
蒼穹の万里

鳳雷 瀬音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の万里

【Nコード】

N6659A

【作者名】

鳳雷 瀬音

【あらすじ】

剣道が得意な高校生・聖良は砂浜で誰かの声を聞き、気が付くと見ず知らずの世界にいた。しかも、彼女の髪と瞳は蒼くなっていた――これは一体何を示しているというのか？五人の神が治める国、高天原で繰り広げられる、アクション中心のファンタジー。現在、全話を修正中です。

二つのプロローグ：中つ国のプロローグ（前書き）

（始まりの前に）

幼い頃から見る夢がある。

龍に乗る、騎士の夢。

蛇のように長い蒼い龍に、同じく蒼い鎧に蒼い髪、蒼い目をした、騎士。

その人が持っている剣も、深海のように青かった。

そして、毎回“何か”を私に言ってくる。

——ううん。今考えれば、“言っている”というより、“呼んでいる”感じだったかな——

二つのプロローグ：中つ国のプロローグ

数十年前。一時的に活発になった火山活動により一つの、大きさにして沖繩程の島が誕生した。その島は“風籟島”と名付けられ、日本の領土となった。

位置は、沖繩県の南。沖繩に近いというのに夏はそんなに暑くなく、冬は暖かい。快適な島だ。

その島の、南の方。

風籟島で1、2を争う剣道場の少女。

その少女こそ、この物語の主人公。

「だああっ！」

少女は剣道の防具を身に纏い、竹刀を振るう隙を突いたので、いける、と彼女は思った。

「甘いつ！」

少女の相手、父親は素早く反応し、少女の竹刀を受けとめる。父親は一瞬の油断も全て見逃さない。

「胴あり！ 一本！」

胴を竹刀で叩かれ、朝の稽古は終わった。

「聖良。また決定打を防がれたと油断したな」

少女の名は、新堂聖良^{しんどう せいらい}。この新堂道場の跡取りでもある、高校一年生。

「……はい。すみません」

「まったく。毎度言っているだろう。お前は由緒正しき新堂道場の跡取りなんだ。わかっているのか？」

聖良は防具を外し、腹立たせた父親の小言を聞いていた。

——わかって、いるのに。

「もういい。朝稽古は終わる。部活が終わったらすぐに来るんだ。」

いいな？」

「はい。失礼します」

聖良は道場を後にした。

朝早くから稽古があり、終わったら父親の説教。学校では武術系の部活の名門だけあって厳しい練習。帰宅後も1時間だけ稽古。ただし、部活がある日のみ、勉強をするという理由でこの時間の短さを許されている。ゆえに聖良にとって、部活がある日の方がかえって休める。

また朝稽古で説教をくらった。本当は褒めてほしいのに。……昔のように。

(……うん。期待しちゃいけない。私は『新堂家の跡取り』……) 道場と自宅を繋ぐ、短い渡り廊下を重い足取りで通る。

(それだけでしか、ないんだから……)

洗面所で顔を洗うと、いつもより朝のスケジュールが滞っていることを知り、直ぐ様制服に着替える。

リビングでは母親が既に朝食の準備を済ませていた。

「おはよう。今日はどうだった？」

この主語の抜けた言葉は稽古のことを意味する。

聖良は誤魔化すように、笑って答える。

「いつもと同じだよ。……いただきます」

聖良はトーストを頬張った。

「そう。これからも頑張るなさいよ。あなたは新堂家の跡取りなんだから」

(お母さんまで、これなんだから)

いつもより食欲が湧かないが、トーストを二枚、サラダを少しつまむと聖良はさっさと鞆を持つ。

期末テストも終わったし、もうすぐ夏休み。今から楽しみだ。

「今日から短縮授業だから、いつもより早く帰るね」

「わかったよ。いってらっしゃい」

学校へ向かう道中、聖良は考えていた。

（頑張るって、これ以上どうやって？　今まで頑張ってきたのに）
皮肉なことに、悩むことも通学路を通るのと同じくらい日課になっていた。

いつもと同じ、変わらない通学路を歩く。少女はまた何の変化もなく一日が終わる、と思っていた。

「はぁーあ。やっと掃除が終わったよ……」

「あんな暑苦しいところで二人だけで掃除って、拷問もいいところだね」

「あははっ。言えてる！」

午前中のみ授業が終わり、部活も終わって各部活の当番による部室の掃除を終えた聖良は、同じく当番だった親友の菊田^{きくた}麻奈^{まな}と部活棟と校舎を繋ぐ廊下でたわい無い会話をしていた。

「せっかく期末テスト終わって早く帰れると思ったのになぁ」

麻奈は溜め息をつく。

「仕方ないよ。当番制だし。明日は早く帰れるから、いいじゃん」

「あのねえ。テスト最終日こそ、さっさと帰ってテストが出来なかった悔しさをバネに寝るのっ！」

「今明らかに言葉の使い方が間違ってるような気がするんだけど……」

「いーの！　あたしは理系の頭脳なの！　聖良はいいよね。中学の頃から四捨五入しちゃえば百点になる点数しか取ってないもんね」

聖良は否定できない真実に上手く返答できる自信が出ず、下手に返答すれば麻奈を怒らせてしまうかもしれないので、ただ苦笑いした。

聖良は幼い頃からずば抜けて暗記力がよく、教科書の内容は三回

読めばほぼ全部のことは覚えられたのだ。

もつとも、聖良にとってはこの吸収率が剣道の方に行ってくれば、と思っているが。

「でも何でもっと上の学校にしなかったの？ 別にこの学校が頭悪
いってわけじゃないけど。もう一つ位ランク上げられたんじゃない
？」

「明華学園は武術系の部活の名門だから、って父さんが……」

ああ、なるほど、と麻奈は頷く。

「すごいねえ。剣道一筋、スパルタなんだねえ」

「ホント。困っちゃ……きやつ！」

聖良は人にぶつかり、後ろによろめいた。

聖良とぶつかった人は無事らしいが、相手の人がもっていたプリントが散乱し、結果的にまず無事とは言い切れなかった。

その光景を見て最初に口を開いたのは、ぶつかった人の後ろにいた人だった。

「あ！ せっかく整理し終わったのに……お前！」

「す……すみません！」

聖良は足元のプリントから拾い始める。

「俺達がどれだけ……」

「もういいコドウ。拾ってまた整理し直せばいいことじゃない」

ぶつかった女子生徒が、コドウと呼ばれた人とはほぼ正反対の口調でなだめる。

その女子生徒は上履きのラインの色から、三年生であることがわかった。その顔の第一印象は、“カッコいい”。普通、女性なら“可愛い”とか“綺麗”とか、そういう形容詞が出てくるはずなのに、この人は“カッコいい”と言った方がはるかに似合う。

「でもあれだけの！」

「落ちたのはほんの一部。四人でやれば十分で片付く」

「そうだよ。ワタル。そんな何百枚とあるわけじゃないんだから」
怒鳴った少年は女子生徒と後ろにいた別の男子生徒の二人からも

つともなことを言われて、黙った。

「ごめんね。こいつ血の気が多くて。気にしないで」

聖良は安堵したのも束の間、その瞬間にその人が誰だったか思いだし、後悔した。

そこにいた四人は明華学園生徒会三年生メンバー。

怒鳴り、未だどこか顰^{しか}めっ面をしているのは書記・虎堂航^{こどう わたる}

最後に航に言い止めた、茶髪で女顔のルックスが人気の会計・西園寺仁史^{いおんじ ひとし}

三人のやりとりを冷ややかに見つめている、少し長めの髪にいかにもクールな印象を受ける副会長・原瀬敏希^{はらせ としき}

そして聖良がぶつかった相手こそ、完全無欠の会長と明華で有名な、巽七緒^{たつみ ななお}

相手が悪かった。この四人はどういう経緯かは知らないが、何故か下手したらこの校長より権力を持っている。

こんな人にぶつかるなんて、本当についてないというか、不運というか。

「本当にごめんなさい！ だから退学には……」

「退学？」

七緒はプリントを拾いながら吹き出した。

「何でこれくらいで退学なの？ そしたら、この学園の生徒のほとんどは退学になってると思うけど」

聖良は自分が拾いあげたプリントを七緒に渡す。

「お喋りもいいけど、人がいることに気付かなくなるまで没頭するのは気を付けた方がいいよ」

最後のプリントを拾い上げ、それでもなお穏やかな口調で七緒は言う。

「はい！ すみません」

「もういいって。怒ってないから。じゃあね」

七緒達生徒会は聖良の進行方向と逆を行った。

四人の中の誰かが

「あの人じゃん？」

と言ったのに、聖良は気が付かなかった

「き……緊張したあ……」

「でも巽会長ってキレイ、というか凛々しいよね」

七緒は成績は学年トップの秀才、武術にもたけている学園の有名な人でもある。

「それに優しいし。神は二物も、それ以上もお与えになったんだね。サインもらえば良かった！ 今度会ったら握手してもらおうと！」

「人事だと思って。本当に緊張したんだからね！」

聖良は緊張のあまり息をするのも忘れていたので、まだ肩で息をしていた。

「大げさだね」

「違う！ だから……もういいや。余計に疲れたから帰ろうよ」

「りょーかい。んーっ！ 帰ったら寝ようっと」

麻奈は伸びをしてから上履きから革靴に履き替える。

「私は帰ったら……」

とっさに父親の言葉を思い出した

帰ったところでどうせまた稽古だろう。しかも帰りが早いから今日は長めなはず。

麻奈はそれを察してか、言いかけた言葉を追求しなかった。

「本当に解放感が得られるのってテスト最終日だけなんだよね」

麻奈は話題を変える。

「次の日とかになっちゃうとテスト返却が憂鬱になって……て聖良には関係ない話か」

麻奈は大きくため息をついたものの、その顔は笑っていた。
聖良も麻奈のことを察していて、敢えて声には出さず、心で言った。

（ありがとう。麻奈）

昼下がりの、帰り道。

交差点で麻奈と別れた途端に吐気まで催す程の憂鬱感に襲われた。
帰ったらすぐ稽古があることなど珍しいことではない。しかし今日是一段と憂鬱になる。

（だるい……）

戻すまではいかないが、その日の吐気は酷かった。

（いいや。寄り道しよう。気分転換にはなるはず）

聖良は真っ直ぐ行くはずの道を曲がった。

（そうだ。海行こう。最近行ってなかったし）

潮の臭いがする。その臭いにつられるように、聖良は走った。

別の場所に向かうだけで、吐気はなくなり、こんなにも気持ち晴れるなんて、思いもしなかった。

風籟島の砂浜は、どこよりも美しいと言われている。

どこの国の法律を真似たのかは知らないが、この砂浜でゴミを捨てると罰金ものになる。

「はぁー。きれー……」

聖良は潮風を体いっぱいに取り込むように、深呼吸した。

こんな風にゆっくり海を見るのは何年振りだろう。

波がゆっくり行き来する光景を見ると、自然と心が癒される。
このまま波と一緒に消えることが出来たらどんなにいいか。

——貴方がいるべきは、其処じゃない。

「……え？」

砂浜には誰もいないのに、男性とも、女性とも言える声が聞こえた。

その瞬間、後方で何かが激しく発光した。

少女の記憶は、一旦ここで途切れた。

二つのプロローグ：高天原のプロローグ

中つ国の少女の記憶が一旦途切れる、十六年前の話。

中つ国の蒼穹そらにあり、この世界には存在しない世界、高天原たかまがはら。そこは真ん中の八つの角がある星のような島を中心に、様々な形をした島国が花卉のように広がっているような地形。

九つに分かれた島のうち、東南に位置する島国、巽国そんごく、そのうちの最東端に広大な土地が広がり、山で西側を遮られた村、希共ききよう。風景は江戸時代の日本の農村を思わせる、何の変哲も無い村が始まりの舞台。

希共は四年前まで凶作続きで、寂れかけたいた。村の人々は山を越えて、別の村へと行ってしまい、瞬く間に人口は減っていった。

そして、この危機を救ったのは四年前のある少女の誕生。

その少女の名は、瑞ずい 星来せいら。

この国の人間は、高天原を治める五帝ごていと呼ばれる五人の神を除き、中つ国と同じように黒い髪と黒褐色の瞳を持つはずなのだが、少女・星来の髪と瞳は空の色をそのまま切り取り、張り付けたような色だった。

おまけに、四歳だと言うのに、知能はすでに十歳ちよつと並にあった。

もちろん、幼い星来にとって、それが特異なこととはわからない。何せ生まれつき、こんな感じだったから。

朱色あけに染まる、村の風景。春の暖かさは夕方になると薄れ、ほんの少し肌寒い。まだ“涼しい”と言って片付けられるほどの気温。

田圃の中の道にある姉妹が走る。妹と見える、後方を走る少女の髪と瞳は、蒼い。

「星来！ 早くおいでよ！」

星来を呼ぶのは十一歳の姉、碧紗^{へきさ}。星来自身も村では有名だったが、姉妹の仲の良さも同じくらい有名だった。

星来は彼女なりに一生懸命ちよこちよこ走り、息を切らせて前に行く姉を追いかける。

「お姉ちゃん！ 速いよお……」

「今日は早く帰ってきなさいってお母さん、言ってたじゃない。ちよっと帰りに川で遊び過ぎちゃったなあ」

朝、近くの家で畑仕事を手伝いに行く時、早く帰ってきなさいと母親に言われていた。その言いつけはちゃんと覚えてはいたのだが、川に久しぶりに魚が泳いでいるのを姉妹で見つけ、そのまま川遊びに没頭していたのだ。

碧紗が妹を気遣いながら家に辿り着くと、家の前に母親ではない女性が立っていた。

ただの人ではない。彼女の髪の色は燃える赤色。近くで見ると、瞳も赤色だった。それでも碧紗は星来のせいか、そんなに驚かなかった。

女性は姉妹に気付き、振り向くと優しい口調で訊ねる。

「瑞 星来の家はここかえ？」

すると星来が碧紗の影にやや隠れるようにして答える。

「うん。私が星来で、ここがおうち」

「星来がそなたなのはわかる。……見事な色じゃ。良い蒼尊^{そらつのみこと}になるじやろう」

女性は屈んで星来の髪を手で梳いた。

「あの、どちら様ですか？」

碧紗が尋ね、女性が答えようとすると家の戸が開く。出迎えたのは彼女らの母親、蘭景^{らんけい}。

「朱夏^{しゅか}様。ようこそおいでなさいました。どうぞ中へ」

「よい。あがるほど話は長くない」

「ですが、そういう訳にもまいりません」

「ふむ。では、お言葉に甘えようかの」

蘭景が深々と頭を下げると、朱夏というらしい女性を中へ入れた。その後に碧紗と星来が続き、碧紗が小声で蘭景に女性のことを訊く。

「お母さん。あの人は？」

蘭景は碧紗と星来に耳打ちする。

「あの方は、赤帝・朱夏様よ。とてもお優しい方だから多少の無礼もお許しなさっていただけたらと思うけど、なるべく失礼のないようにね」

赤帝というのは五帝の一人。これは蘭景から何回も聞かされた話だ。でも、なぜここに。

碧紗は続いて訊ねる。

「どうして朱夏様が？」

「今から説明してくださるはずよ」

帰ってきた二人も中に入れると、囲炉裏を囲むように座らせた。

朱夏は背筋を伸ばし、正座して口を開く。

「さて用件じゃが……星来が四天士の一人、蒼尊なのは知っておるな？」

「してんし？　そうのみこと？」

星来は首を傾げた。朱夏は優しく微笑む。

「五帝は知っておるか？」

「うん！　高天原を守ってくれる五人の神様のことでしょ？」

「さよう。四天士はその五帝に仕え、共にこの地を守る能力者。目印は我々五帝と同じように黒ではない、髪と瞳」

星来は改めて、確かめるように肩まである蒼い髪を摘んで色を見た。

「星来は蒼い髪と瞳を持つがゆえに将来、蒼帝・陽春ようしゅんに仕えることになるじやろう」

「ふうーん……」

「こら！　星来！」

星来が赤帝相手にそっけない返事をしたので、蘭景は控え目に叱る。朱夏は今のやりとりがおかしかったのか、くつくつ笑う。

「よい。五帝に普通の者と違い、多少気安いのは四天士の立派な素質じゃ」

それでも蘭景は申し訳なさそうな頭を下げた。

「さて本題じゃが、四天士には決まって一人、守護獣がつく。私が陽春に守護獣、蒼氷そうひを向かわせるように言っておく。明日の昼には着くじやろう。紺青の龍、または紺青の髪をした長髪の男が蒼氷じや。……二つの姿を持つ。伝えたかったのはそれだけじゃ」

朱夏は立ち上がる。それに合わせて蘭景も立ち上がった。

「すみません。お茶も出せず……」

「よい。茶を飲みに来たのではないからな」

朱夏が沓くつを履こうとすると、星来が立ち上がって朱夏の方へ近寄る。

「帰るの？」

朱夏が振り返ると、真っ直ぐな星来の瞳がこちらを見つめている。その瞳の澄みきった色といったら。

——この子は、本当に良い蒼尊になることだろう。

「そうじゃ。また会おう。蒼尊よ」

それだけ言って、家を朱夏は出ていった。

翌日に待っていたのは、守護獣ではなく思いがけない悲劇の訪問だった。

朝日が昇る前の早朝。希共は山賊の襲撃を受けた。。やっと芽吹いた作物も、全て火が食い尽くしてしまっしまい、緑色の草木の絨毯は火の海と化している。春の早朝は涼しいはずなのに、歓喜に酔ったように踊る火の暑さで汗がじんわり滲むほど暑い。

星来達も家に火を付けられ、三人は逃げ惑っていた。

「お母さん……」

碧紗と星来は怯え、離れないように蘭景の着物の裾をしっかり握った。

「いい？ 絶対にお母さんから離れたら駄目よ」

「いたぞ！ 蒼尊のガキだ！」

山賊は星来を見るなり束となって向かってきた。

「こっちよ！ 走って！」

蘭景は碧紗と星来に縮こまる暇も与えず、手を引っ張って走り出した。

足の速さは、子供を二人連れていることもあって山賊の方がずっと速いが、土地鑑は星来達の方が良かったことが幸いし、どうにか追い付かれてはいなかった。それでも、いつこちらが息切れして追いつかれるかわからない。

「お母さん……怖いよお」

碧紗は顔を赤らめ、べそをかいている。

「お母さんだって怖いわ。でも今は逃げなさい」

「でも……あっ！」

突然、碧紗が木の根に足をとられた。

足を前に踏み出せば転ばずにすむ、と思ったが、踏み出した足を滑らせ、転んだ。

——否。崖から転落してしまった。

碧紗は悲鳴と共に一瞬にして、母親と星来の前から姿を消してしまった。

思わず二人は足を止める。

「お姉ちゃん！」

走らなければいけない状況を忘れ、崖まで様子を見に行こうとする星来の腕を母親が強く掴み、引き寄せる。

「星来！ 今は逃げなさいって言ったでしょう！？」

「でも！」

「お姉ちゃんはきっと生きてる。大丈夫よ。星来が死んだらお姉ちゃんも死んでしまうわ」

「……うん」

星来は大声で泣き出したい気持ちを抑え、再び走り出す。

強く星来を制止した蘭景の頬には、かすかに光る一筋が描かれていたのを星来は見ていた。

林を走り抜け、やっと砂浜に着くと、水平線から朝日が顔を覗かせていた。

この砂浜は希共の秘密の場所。来るには蘭景達を通った道を通るしかなく、少しでもそれから外れば崖があったり、鬱陶しい林に捕まり方向感覚を奪われる。

「ここまで来れば大丈夫よ」

母親にそう言われても、星来は碧紗のことではいっぱいになっていた。

——四年間、いっしょだったのに。

それが一瞬に。ほんの一瞬の間にいなくなってしまった。大事にしていた人形、川の近く摘んだ綺麗な花。林で拾った珍しい形の石。どれを無くした時よりも比べものにならないほどの喪失感が胸に残る。

と、その時、不意に右腕を強く捕まれ、上にあげられた。

「捕まえたぞ！ これで東の国も俺の物だ！」

さっきの山賊達とまた別の大柄な男だった。

星来は千切れそうな右腕の痛みをよそに、幼いながら瞬時に判断した。

——誘導されたんだ。ここに。

ここは村人以外知らない、秘密の砂浜だから逃げるとしたらここだろうと予測したのだろう。だが、この男達は村で見たことがない。なぜこの場所を知っているのだろう。

蘭景は気付き、怒った形相で男に向かっていく。

「その子に触らないで！」

ぴしゃり、といかにも痛そうな音をたてて平手打ちで男の腕を叩くと、星来の腕を掴んでいた手が開き、その隙に星来は男から離れる。少し距離を置いて振り返ると、代わりに母親が胸ぐらを掴まれ、身動きがとれない状態になっていた。

「この女っ！ なめたマネを！」

一層険しい形相になった男は刃物を取り出し、高く掲げて切っ先を母親に向けた。

その光景を、星来が黙って見過ごすわけがなかった

（お母さん！！）

何かが、星来の中で弾けた

——やめて。

星来は震えていた

——殺さないで。

その感情は、怒りにも恐怖にも似ていた。あるいは両方が入り混じったものかもしれない。

母親と重なる、姉の笑顔。もう見れない、笑顔。

——もう、何も私からとらないで……！！

星来の頭の中に自然と言葉が浮かび、勝手に右腕が剣印を抜刀して唱えた。

「陽は定まり、天を成す。陰は定まり、地を成す……」

それを唱えてはいけない……！

どこからか声がした。星来はその声の主を知らない。

「色即是空、空即是色……」

——それを……

再び、同じ声が頭の中で反響する。

星来にはわかっていて。これを唱え終った時に、恐ろしい事が起こる。

それでも口は意志に反し、なおも導くように唱え続ける。

「急急如律令……皆蝕乱狂！」
かいしよくらんきよう

唱え終わってしまった。よくわからないうちに悲しみが溢れて、それを表すように涙で目の前が滲む。

——何で、こんな事を。

——逃げて。

地が予兆の如く、鳴動し始める。

「星来！ こっちに……」

——お願い。お母さん。逃げて！

そう叫んだつもりだったが、声にはならなかった。

突然、景色が歪み、風が吹き荒び、海は荒れ狂い、地は大きく揺れ動く。

男はおの慄き、手を離す。解放された蘭景はその場に蹲るようにして身を守った。背中を飛ばされた枝がひっかいていく。今すぐ星来のところに行きたいのに、何か強い力で押さえ込まれ、全く動けない。

それは唐突に終わった。

蘭景は顔を上げ、引っ掻き傷だらけの体を起こす。しかし、そこにいたのは蘭景ただ一人だった。目の前にいたはずの男がいなければ、星来もない。

「星来？ どこなの？ 出てきなさい」

大声で呼ぶつもりだったが、声が震えて話し声程度しか出なかった。

ザザーン、と波の音のみの静寂が、否定を示したようだった。

「星来——っ！」

叫んでも、返答はなかった。

世界は蒼尊を失ったのだ。

第一章：十六年の時間、各々の謎

星来がいなくなったその日の昼頃、朱夏が言った通り、紺青色の長髪の男、蒼氷が大きな鳥に乗って飛来した。

年は二十代半といったところだろう。水色の裾の長い、中つ国側の人にとっては古の中国官吏の着物に近い服を着ていた。

そして彼はどれだけ主に仕えることを待ち望んでいただろう。早朝の件、即ち星来が行方不明になったことを蘭景から告げられると、ひどく落胆し、同時に紺青の髪は毛先から只人の証である黒に染まってしまった。そのせいか、蒼氷はもう一つの姿、龍の姿に変わることが不可能になってしまい、蒼帝・陽春の元に帰れなくなってしまった。

それを哀れんだ蘭景は、新しく建てた家に住まわせてやることにした。

――十六年後。

つまり、世界が蒼尊を失ってから十六年という長い歳月が過ぎた。

一度火の海になってしまった田畑も息を吹きかえして草木は青々と茂り、村は完全に復興した。それでも、あの蒼い髪と蒼い瞳の少女が戻ってくることはなかった。

そんなある日、希共の昼空にぽつんと光る、朱き星が現れた。他の星は太陽の光に隠れてしまっただけなのに、その星だけはまるで太陽が遠慮しているようにはっきり見え、それはどんどん近付き大きくなる。

その正体は、この世に無二とない、炎を纏った朱い鳥、朱雀。同

時に、赤帝の朱夏。

朱雀姿の朱夏は一件の家の前で着地すると勢いよく更に発火し、瞬時に緋色の髪 of 女性の姿に変わった。朱夏は家の戸を開けると、家の中でなわをなっている五十代前後の女性に声をかけた。

「久しいのう。蘭景よ」

蘭景は朱夏に気づき、縄を横に投げて慌てて平伏した。

「よい。顔をお上げ。変わりないか」

「はい。あれからこんな老いてしまいました。朱夏様はいいですね。老いもなく死もなく」

朱夏は蘭景に家にあがるように勧める身振りをされたので、微笑しながら家にあがった。

「同時にそれは永遠の苦しみじゃ。さて、話なのじゃが。上の子…碧紗だったかえ。消息が掴めた」

碧紗、と蘭景は目を見開いて小さく呟いた。その名前は一時も忘れたことはなかったが、口にするのはだいぶ久しぶりだった。

朱夏は頷いて話を続ける。

「碧紗は生きておる。崖から落ちた後、まだ息があって、そこを豪商の家の主人が通りかかって保護したそうじゃ。驚くぞ。今では異国の王宮で太宰を務めておる」

「まあ…太宰、だなんて」

太宰は百官の長。人間が獲得できる地位の中では一番五帝に近い。この手ですつと我が子を育てたかった、と蘭景は思う。

しかし豪商の主人に拾われなければ、こんな寂れた農家で一生を過ごしたのかもしれない。そう考えれば碧紗にとってそっちの方が幸せだっただろう。

「ひのみこと緋尊が見つつけてくださった。この人も探してもらえないか、と訊ねたらその名に聞き覚えがある、と言ったのう」

「そう、ですか。緋尊様にお礼を伝えてくださいますか」

「もちろんじゃ。…それで、星来の方じゃが…」

朱夏は一瞬にして、暗い表情になった。それを見た蘭景もいい結

果は望めないと顔を顰めるが、黙って話を聞く。

「大半を中つ国で過ぐす緋尊にも言っているのじゃが、なかなか見付からん。……そういえば蒼氷は」

「今は外にいます。……ただ」

ただ、と朱夏は問い返す。

「紺青の髪はほぼ完全に黒髪になってしまいました。光沢に少し名残があるくらいです」

「でも、生きておるのじゃな？」

蘭景は頷く。

「と言うことは星来も生きておるのじゃな」

「それは本当ですか!？」

思わず叫んでしまい、蘭景は頭を下げる。

「守護獣が死ぬのは主が死ぬ時のみ。蒼氷が生きている限りは星来も生きておる。じゃがな」

朱夏は少し間を置いてから、言葉を継ぐ。

「星来は能力を喪失しておる。これは確かなことじゃろう」

「どうして……ですか？」

「よいか、守護獣は主が無意識に集める気で能力を維持し、生きる。今蒼氷は力を無くしつつある。これは主からの気の供給がないため、守護獣本来の力を生きる力に変換しておるからじゃ。だから髪が只人のように黒くなる」

なるほど、と蘭景は二度頷く。

「能力喪失ということは星来の髪と瞳も黒くなっておることじゃろう。それともう一つ、気になることがある。星来は皆蝕乱狂を使ったのじゃろう？　しかも、東の海に近いところで」

確かに十六年前、星来は自分が捕まってしまった時に、聞いたことのない呪文を唱えだした。その最後の言葉が“皆蝕乱狂”。

「皆蝕乱狂は気の流れを崩壊寸前まで乱す、蒼尊の最終にして禁忌の術。星来のものは実に凄まじかったのう。気の流れを修正するのに陽春が苦勞したからの」

「はあ……」

朱夏は理由はわからないが、感心しているのは明らかだった。

「とにかく海で皆蝕乱狂なぞ起こせば波にさらわれることは確かであろう。しかも東の海には三途門さんずもんがある」

三途門とは、高天原の人々が中つ国に転生するために通る門。これを通して高天原と中つ国を行き来する職業が一種だけあった。

「気の乱れで我々五帝と四天士しか開けられない門も開いてしまった可能性がある。つまり」

「星来は中つ国に流された……」

朱夏が言う前に先に蘭景に言われてしまった。

「中つ国で産まれる者は、皆黒髪黒眼。見分ける術はない。気配で気付けるのは五帝、四天士、守護獣。そのうち中つ国で搜索できるのは四天士の三人のみ。守護獣は同じ世界にいるなら主を離れないからの。しかし三人だけで中つ国を捜し回るのは不可」

朱夏の視線がかげり始めた。

——これは、言うべきではない。だが、蘭景の子について例え神である者でも隠すことはできない——

そして、告げることを決心した、最後の言葉。

「以上を踏まえ、搜索は不可。残念ながら搜索は打ち切らせてもらう。まことに申し訳ない」

沈黙がその場を制した。

次に制したのは母親、蘭景の悲鳴に似た、叫び、泣き声。

朱夏はもうなんと言っていないのかわからず、ただ泣き崩れる蘭景を見つめるのみ。それが病無き体といえど、とても心の奥底が数本の棘で刺されているように痛く、苦しかった——

蒼氷は早朝、蘭景に外の風に当たってくると言っ、夜が明けつつある村を、行く先も目的もない散歩に出ていた。夏に快適に散歩をするのは涼しい早朝がいい。

早朝の村は薄い朝靄がかかり、空の色は青がかった黒と、薄らとした赤とでばかされ、黒い部分にはまだ微かに点々と光の点が見える。その下を二羽、鳥が空気を切り裂き、飛んでゆく。

——私の足が地から離れなくなって、もう十六年になるのか。

蒼氷は龍の姿に変わり、何の束縛もなく、空を翔けることが出来たのだが、それは過去の話。

髪がもうほとんど黒く変色してしまった今では只人と同じ。姿を変えることも、術を使うこともできない。

（星来様……）

十六年前のあの日、仕えるはずだった主の名前。

十六年前のあの日、姿を消した、主の名前。

——なぜ。

昨日、蘭景曰く自分が外出している時に朱夏が十六年振りに訪問してきたらしい。

朱夏が告げたのは、姉の碧紗の方については生存の報告と消息。

星来の方は失踪の原因と、搜索の打ち切り。

これには蒼氷も主の失踪を伝えられた時と同様、ひどく落胆した。しかし、蒼氷が気に掛けているのは搜索の打ち切りではなく、打ち切るをえなかった原因を作った、失踪の原因。

（あれが自力で、いや、無知の状態で出来るわけがない）

聞いたところによると、星来は皆蝕乱狂を発動させてしまったせいで行方不明になった、と言っていた。

（星来様の力が取分け強かったせいかな……いや）

皆蝕乱狂は蒼尊の最大にして禁忌の術。そのせいか、守護獣、また普通なら有り得ないが、蒼帝直々に手解きを受けても使えない者もいた。逆に言えば、守護獣から手解きを受けなければ、その片鱗すらも使えないはず。

だと言うのに星来は完全な皆蝕乱狂を発動させた。否、完全どころじゃない。例を見ないほど威力が強大な。

（陽春様に会われた？ いやそんなことはない。あの時朱夏様から

連絡を受け、初めて蒼尊が既に生まれている事を知ったのだから。星来様も五帝では朱夏様しか)

頭が痛くなってきた。どれも有り得ない事だし、予想とその予想を否定を裏付ける証拠も出てくる。

(まさか、異国の場所からして陽春様か朱夏様が起こしやすい状況を作られた?)

異国は東南の国。それゆえ、東の陽春と南の朱夏の二人が守り、司る国だ。政治は太宰が行っているが。

(……蒼尊は決して失ってはならない。なのに危険が伴い過ぎるあんな場所で……)

あの二人は賢明だ。そんなことが出来ても、状況からしてするわけはない。

まさか、この世界自体が星来を拒絶し、中つ国に追いやったとは考えられないだろうか。

(そんなはずないだろう……)

我ながら笑ってしまった。

今まで考えた事象より、はるかに考えられない。それに星来は蒼尊。寧ろ世界には喜んで迎えられる人だ。

(まったく。主がいらないせいで忠誠心が薄れたらしい)

蒼氷は自嘲するように笑い、溜め息をついた。

東の方角を見ると、だいぶ赤の比率が多くなっていて明るくなっている。林から少しずつ太陽が顔を覗かせ、いつしか完全に姿を現していたので蒼氷も帰路を辿ろうとした。

その時だった。

蒼氷の鼓動が急激に速くなったのを感じたのは。

異常な程の胸騒ぎに息が詰まり苦しくなる。その上沸きあがるように熱い。しかし、その苦しさとは逆に、喜びが沸き上がってくる。そしてある思考が蒼氷の脳内を横切る。

——とうとう、帰って来られる。

蒼氷は走り出した。十六年前に主が姿を消した場所へ。

少しでも早く、と考えた時にふいに体が軽くなり、久しぶりに足から地面の感触がなくなった。それを確かめようと足元を見た時、地に自分が細長い影を落としていることに気付き、そしてやっと己が龍の姿になって浮遊しているのに気が付いた。

蒼氷は気付かなかっただろうが、走り出した瞬間、黒髪はたちまち根元から染み渡るように紺青色になり、全ての黒髪が変色すると彼は十六年振りに姿を変え、紺青の龍の姿になって滑空した。

蒼氷が守護獣としての二つの物を取り戻した時、彼の予想は絶対なる確信へと変わった。

主が、星来様がこの地に帰って来られたのだ、と。

聖良は気が付くと砂浜に横たわっていた。目の前で水が往来を繰り返しているので、波打際なのだろう。

こんなことになるまで自分は何をやっていたのか思い出す。部活が終わったから麻奈と帰って、途中で麻奈と分かれて、海に寄り道して、海を眺めている時に突然記憶が切断されたように途切れた。何があったのか、よくわからない。

（大きい波が来て、のまれたのかな。じゃないと、こんな風にはならないし？）

自分なりに解析すると、渋谷家に戻ろうと立ち上がろうとした時、かつてない疲労が聖良を襲い、立ち上がる事が出来なかった。それどころか、四肢も動かすことすら叶わない。

次に、景色がぼやけている事に気が付いた。それは目を半分しか

開けていないからだとすぐにわかった。

(え……あれ?)

砂浜の周りは、林で囲まれていた。

あの砂浜はコンクリートの塀、つまり堤防で囲まれ、その上には家が立ち並ぶ。だから林などあるわけがないのだが。

もっと違うのは、潮の匂い。島の海の香りは風や空気の中にほのかに混じる程度。今はどうだろう。海自らが存在を主張しているような、強い香り。あくまで聖良の判断だが。

よく確かめようと聖良は目を開けようとするが、瞼がとても重く感じ、四肢の他に瞼すら動かせなかった。

もはや自分が今どうなっているのかさえわからなくなってくる。自分に意識があるのか生きているかも曖昧になってしまう。

(私、どうしちゃったんだろう……)

波にのまれ、知らず知らずのうちに溺れまいともがき、体力を消費したのではないか。すると、そっか、と自分で納得した。

ゆっくり何度かできる限り大きく息をして、やっとの思いで顔を動かし、水平線の方へ目を向けると、太陽が顔を覗かせているのが見えた。

日が暮れ始めている、と思ったが、太陽は僅かに逆に上へ昇っている。日が昇るのは東、と今は何の役に立たない記憶を引っ張り出すと、聖良は、はっとする。

(うそ!? 朝!?)

学校を出た時間から計算すると、砂浜に着いたのは五時。日出と言ふ事は軽く半日は気を失っていた計算になる。なんてバカバカしいんだろう。

(何やってんだろ。さっさと起きなきゃ……)

全身砂だらけだろうから、まずシャワーを浴びて、急いで今日の支度をして。でもまず両親の説教が先だろうか。

思考は動くのに、やはり体が言う事を聞いてくれない。

その時、顔に生臭い息がかかり、腰の辺りに重さを感じた。閉じ

かけた瞼をもう一度開くと、茶色の毛に鋭い牙が見える。

（野犬？）

野犬なんて風籟島では珍しい。でも野犬と言ったら変なことをしたら恐らく噛みついてくるかもしれない。

逃げようとしたが、やはり力が入らず無理だった。人は追い詰められた時に思いもよらない力を出すというが、それも発動しない。やがて聖良は体を動かそうとする意思を働かせるのにも疲れ果て、とうとう目を瞑り、意識を失った。

聖良が再び目を覚ますと、野犬は消えていたが、それ以外の風景は変わっていない。辺りの明るさは変わっていなかったので、大して時間は過ぎていないだろう。どこも痛みを感じないところから、どうやら噛まれはしなかったらしい。

聖良は虚ろな目で、ぼーっとしていると、視界に突然青い影が入った。

（何だろ……）

カメラのピントを合わせるように目を凝らすと、それは青い龍だということがわかった。

——じゃあこれは、夢かな。

青い龍はひたすら聖良に話しかけるように口を動かしているが、聴覚が麻痺し、聞こえない。

「——」

（面白い夢。龍に話しかけられるなんて）

そこで聖良はゆっくり目を閉じた。やはりとてつもなく眠たい。

ふいに自分の体から砂の感触が消え、ふわりと体が宙に浮いた感じがした。

（龍に寄せられたのかな……）

あの青い龍は天から使いで、自分は死んで、今まさにあの世に運ばれようとしているのだ。そうなら、これは夢じゃなくて現実になる。現実を起こっていることになる。

あの世はどんなところだろう。人間が語るように天国と地獄があって、どちらかで暮らすようになるのか。あるいは新たな生を授かり、別の生物として生まれ変わるのか。いずれも誰も確かめたことがないくせに、本当にそうであるかのように伝えられてきている人間の作り話に過ぎないけれど。

不思議と恐怖はなかった。単に、いきなりのことでまだ状況が飲み込めてないだけかもしれないが。

第一章：見知らぬ世界、蒼き変化

——さあ、早く。

——早く、目を開けて。

——戻り、動き出した時間^{とき}を、止めないで。

（貴方は、誰……？）

聖良は自分にまだ意識があることを感じ、何も考えずにゆっくり目を開いた。寝ていたことにより疲労が回復し、今度は完全に目が開く。

やっと意識までがはっきりすると、自分は漆喰のような白い壁に四方を囲まれた見知らぬ部屋の寝台に横になっていたことがわかった。

（ここ、どこなの？）

聖良は自分の両腕を持ち上げ、軽く叩いてみる。透けずにちゃんと触れられる。霊体にはなっていないようだ。

「なんだ。ちゃんと生きてるじゃん……」

ゆっくり上半身を起こす。多少こめかみを強く押さえられたような頭痛が伴ったが、砂浜にいた時よりはだいぶましにはなった。

自分は生きていることがわかったが、今どこにいるかはわからない。時計も、なかった。まず、珍しく電子機器がどこにも見あたらない。時計も、照灯も。棚にろうそくがあったので、それを灯りにしているのだろう。次にガラスのない木でできた枠の窓の外を見ると、山と田畑が広がるのみ。現代の日本、または風籟島で見られる景色ではない。

「まだ夢を見てるのかな……」

試しに軽く頬をつねってみたが、痛いという感触はある。夢ではないらしい。

波にさらわれ、海を漂流している時に誰かに助けられたのだろうか。

「また寝ちゃおっかな」

聖良が上半身を倒そうとした時、目の前にあったドアが開く。そこには見惚れてしまう程染めたようには思えない、綺麗で自然な青い髪と目をした、着物とよく似た服装の若い男が立っていた。

男は恭しく聖良に話しかける。

「……よくぞ、ご無事で」

男は聖良を心底心配してくれていたらしい。言葉の一つ一つに滲み出ている。

（無理もないよね。海を漂流してたんなら）

「貴方が助けてくれたんですか？」

男は頷く。それから上半身だけ起こしたままの聖良に歩み寄ると片膝を立ててしゃがみ、頭を下げる。

「ちよつと！？ 何してるんですか！？」

「我が主、セイラ様。長い時間、お待ち申し上げておりました……」
男の行動と発言に、聖良はあたふたとたじろぐ。

「ワガアルジ？ お待ち申し上げたって、何？ それに貴方は誰なんでしょうか？ どうして私の名前を知っているんですか？」

男は顔を上げて微笑む。その顔はいかにも嬉しそうで、今にも感極まって泣き出しそうだ。

「私の名は蒼氷。お初にお目にかかります。貴方の名前は十六年前に既に知っておりました」

「私が生まれた時に？」

それを聞いて、蒼氷は怪訝な顔をする。

「いえ？ セイラ様が四歳の頃に」

どうしてこの蒼氷と言う男が自分の名前を知っているのかなど、様々なことを一遍に聞き出したかったが、余計にややこしくなりそ

うなので、とりあえず一つずつ整理しながら解決していくことにした。

「私、今十六歳だけど？」

蒼氷は更に怪訝な顔をする。これが腑に落ちないことのようなのだ。

「確かに貴方がこの高天原から行方を消されたのは十六年前の四歳の頃です。ですからセイラ様は今、二十歳におなりのはず」

「はぁ？」

またわからないことが増えた。腑に落ちないことがあるのは聖良も同じだった。蒼氷が何を言っているかわからない。でも蒼氷は自分の名前を知っている。人間違いだろうが、人間違いにしては何かうまくいきすぎている。

この問題は解決しようがない、と決めると、聖良は別の質問をする。

「ここは？ どこなの？」

「高天原、異国の希共」

風籟島にそんな町はない。しかもまた意味不明な名前が出てきてしまった。でも高天原というのは日本史とか古文で聞いた名前。

聖良は記憶の奥底から“高天原”という単語と、それはどういう意味かを引っ張り出す。

「高天原って、神話の国でしょ？」

「いえ。ここに実在しておりますが」

あまりにも蒼氷が寝惚けたようなことを言うので、穏健な聖良もさすがに腹がたってきた。

「さっきから何なんですか？ 意味わからないことばかり言って。

ちゃんとまともに答えてください！」

「いえ、ですから……」

「セイラ！」

二人の女性が部屋に入ってきて、口論に発展しそうな状況を鎮めた。

一人は普通の四十代くらいの優しそうな女性。もう一人は鮮やか

な赤く長い髪と瞳、朱色の着物を纏った物腰も優雅な女性。赤を基調としているが、苛烈な印象はなかった。

赤い髪と瞳の女性は蒼氷に言う。

「蒼氷。ここは一度部屋を出てもらいたい。私達だけで話したいのじゃ」

「わかりました」

蒼氷は立ち上がり、聖良にもう一度頭を下げると、部屋から退出した。

残されたのは、入ってきた女性と聖良。

「貴方は？」

「我が名は朱夏。話を進める前に一つ訊きたい。今、年はいくつじや？」

「十六ですけど……」

何を言ってくるわけでもなく、朱夏は頷く。さっきの蒼氷という男よりは話をわかってくれそうだ。

「やはり皆蝕乱狂で三途門を通ってしまったか……。蒼氷の話がわからないのは仕方あるまい」

「あの、一体何なんですか？」

朱夏は寝台の横にあった椅子に座って話始める。

「その前に、中つ国……日本でつけられた名前は何という？」

「聖良と言います。神聖の聖に、良好の良」

朱夏は少し驚いた表情を見せた。

「偶然じゃな。こちらでも星来、と名付けられた。漢字は星に来ると書く。呼び名を変える必要はないな。本題に移らせてもらおう」

「え？ 『こちらでも』？」

誰かが口を開く度に、こちらの疑問がどんどん増えていく気がする。

朱夏は着物を整えて座り直す。

「星来。信じられないのはわかっておる。しかし、そなたの本当の生まれ故郷はこの高天原じゃ。この女性は、高天原での母親、蘭景。

覚えておるかえ」

聖良、いや、星来は蘭景の方へ目を向ける。

——違う。

覚えているわけも、増してや知っているわけがない。自分は風籟島で生まれ、自分のお母さんは、風籟島のお母さんただ一人。高天原なんて場所に別の母親なんて、いるわけがない。

「蘭景、さん？」

蘭景を母親だとは到底思えず、星来は名前で呼ぶ。

星来の発した言葉に蘭景は一瞬悲しい顔をしたが、すぐに、まるで誤魔化すように微笑み、うんうんと頷く。

(あ……)

ふと星来は我に帰る。こんな人達と付き合っている場合じゃない。確実に学校に遅刻する。今ならしている、という表現の方が正しいかもしれないが。

「あの、用が済んだなら帰してくれませんか。学校があるんです」

星来にしては珍しく怒鳴るような口調で言った。それを聞いた朱夏は困った顔をして、溜め息をついた。

「やはり、信じられぬか」

「当たり前じゃないですか。人間違いです。第一、ここが本当に高天原って言う世界だとしても、私がここで生まれたっていう証拠がないじゃないですか。それに……」

「証拠なら、ある」

朱夏が今までと違った威厳を伴った口調でぴしゃりと言うと、星来はまだ言うことがあったが、黙った。

「これこそ、何よりの証拠」

朱夏は星来の頭頂から髪を撫でる。すると、星来は毛根から何かが吹き出し、髪全体に染み渡るようなものを感じた。

「な……何なの？」

髪に手を添えても、特に熱くなっているわけではなく、感触に変化は表れていない。だが……

「……え？」

手にかかった髪が視界に入った瞬間に、変化に気付く。

髪色が鮮やかな、明るい蒼色に変わっていた。

蒼氷のように染めたとは思えない、まるで元からそういう色だったかのような不自然さのない蒼い色。

星来は慌てて制服のポケットの鏡を取り出して確認する。髪だけでなく、瞳の色も西洋人のそれとはまた違った蒼色になっている。急にまさしく身の毛がよだつ寒気がした。

「何よ、これ……戻してよ」

明華学園では染毛は立派な校則違反。茶髪ならまだわかるが、蒼なんて非常識にもほどがある。このまま戻ったとして、学校に行ったら評価が下がることは避けられない。

涙目になっている星来に、追い討ちをかけるように朱夏が言う。「取れぬ。その髪と瞳の色は星来が生まれながらにして持つ色」更に涙で景色がぼやける。

——認めたくない。

急な変化に、震えるようなおぞましいものすら感じられる。

「やめて……こんなの……」

「星来様！ 朱夏様！」

部屋を出ていった蒼氷が、さっきと違う血相でドアを開けた。

朱夏は顔を顰めながら振り返る。

「何事じゃ。騒がしい」

「魔物の来襲です。種族は荒鷲（いろうしゅう）、数は五羽です」

第一章：蒼い剣、赤い悪夢

差し迫ったような蒼氷の報告に朱夏はやれやれと深い吐息をつく。

「まったくこういう時に。……いや」

朱夏が立ち上がり、一歩進めるとその足を止める。

「ちょうどよい機会じゃ。蒼氷。ヘキリュウトウを持って来い。星来は私と共に外へ」

「え？ え？」

訳がわからないうちに星来は寝台から降ろされ、朱夏に手を引かれて部屋を出た。

「何？ コウシュウって……」

「鳥型の魔物じゃ。手荒な手段かもしれぬが、戦えば記憶が戻るかも知れぬ」

「マモノ？」

マモノ、と言うと漫画やアニメに出てくる化け物のようなものことだろうか。それより、朱夏はその後なんて言ったっけ。聞き間違ひじゃなければ、戦うなんて言ってたような。

朱夏は簡素は木製の引き戸を開けて、星来共々外に出た。土の匂いが鼻をさす。

「ほれ、彼奴らじゃ。下級ゆえに蒼尊の星来でも倒せるじゃろう」

朱夏が指差すその先に、黒い十字架のような形の影が空に映されている。それは紛れも無くギアギアと不気味に鳴きながら空を旋回している魔物、荒鷲^{（くわしゆ）}。獲物を捜し求めているような狂気がよく表れている。

星来が思わず朱夏の手を振り払い、後ずさりすると、トンと背後に人がぶつかる。

「星来様」

蒼氷は布で包まれた何かを持って、家から出てきていた。蒼氷が布を取ると、一振りの剣が姿を現す。それは、金色の龍の彫刻が施

された青い鞘に包まれた剣。星来にも高価なものだとわかった。

「これは蒼尊が持つ武器、碧瑠刀^{へきりゆうとう}。星来様以外が使われると紙一枚も切れません。どうぞ」

星来は言われるがままに受け取ろうとしたが、受け取らずに蒼氷を睨みつけながら一步退く。

「いやです。あの荒鷲とかいう化け物と戦え、とか言うんでしょう？」

「そうですが」

星来は視線はそのままに更に一步退く。

「何言ってるんですか？ ただの女子高生があんな化け物を倒せるはずが……」

「貴方のその髪と瞳の色を見ても、まだそんなことを仰いますか」

星来に返す言葉はなくなった。本当のただの女子高生なら、こんな髪と瞳の色は持たない。悔しさに涙が滲んだ。しかしそれで黙っているわけにもいかない。星来は無理矢理理由をつける。

「これは……朱夏って人が頼んでもいないのに、勝手に染めたからです！！ 私には関係ありません！！」

星来は背を向けて逃げ出そうとしたが、腕を朱夏に捕まれる。さつきと同じように振り払おうとしたが、さつきと違って力がこもっていて、なかなか離れない。

「逃げてでもそなたの勝手じゃ。私達は追わないと約束しよう。ただし、彼奴らはどうか分からぬぞ^{あやつ}」

朱夏が指し示す代わりに天を仰ぐ。空を飛ぶ荒鷲は、高度を下げたのか、影がさつきより若干大きくなっていった。

——あれに追いかけられたら。

その怖さと悔しさで、星来は泣きそうになる。

「お泣きになっている場合ではございません。それに四天士は人を超越した能力を持ちます。心配することはございません。さあ」

星来は涙を堪えながら、そっと碧瑠刀を渋々受け取った。その瞬間、蒼氷が頭を下げた。

「……申し訳ございません」

「え？」

その時、剣を受け取ったその指先から何かが一気に流れ込むのを感じた。そのまま一体化されたように、違和感は瞬時に冷めた。

「碧瑠刀に朱夏様の命令で戦う術をかけました。……お許しを」

「なっ！？ ちょっと待って、どうい……」

言いかけて、自分の腕が自然な慣れた動作で勝手に鞘から剣を抜いた。

刀身は瑠璃かサファイアのようなもので出来ていて、とても実用には思えない。全体の形は“刀”というより、ゲームの戦士が使うような両刃の“剣”と言ったところだろう。

その美しさに見惚れる暇もなく、今度は足が自分の意思に背き、荒鷲の群れに突き進む。

「何？ ちょっと……え？」

ある程度近付くと、荒鷲が一羽下降してきた。碧瑠刀を持つ両腕が構えをとる。

——自分は今、あれと戦おうとしている。

「そんな、まさか……？」

自問したところで、碧瑠刀が右翼を斬り裂いた。すると、どっと生暖かい赤いものが星来に降りかかる。

あまりにも急なことだったので、星来には何が起こったのか理解できなかった。

——これが、返り血。

少し間があってバカみたいに冷静になった後、星来は我に帰る。後から恐怖が津波のように襲い掛かってきて、そのあまり悲鳴も出なかった。

右翼を落とされた荒鷲は、あえなく墜落し少しもがくと、やがて動かなくなった。

「死んだ、の？」

魔物と言えど、初めて生き物を殺した。もはや荒鷲より、寧ろ躊躇いもなく生き物を殺してしまった自分が怖かった。

呆然としていると、二羽が後方から下降してきた。右足を軸に振り返ると、その気はなくとも両腕はしっかり剣を構え、向かってくる荒鷲の嘴を先端から真っ二つに裂いた。せめて生々しい解剖図を見ないように目を閉じようとするが、それもさせてくれない。操られていないなら、いつ失神してもおかしくないほどの解体図が、すぐ横を通過していく。

「やだ……」

恐怖の震えからくる疲労のせいで、既に悲鳴をあげる気も起きない。だからといって、無駄な抵抗をやめる気にもなれない。せめて、と四肢にありったけの拒否を注いだが、何も変わらない。

体を血糊が這うにも関わらず、体は再び構えをとる。捨て身で下降してきた三羽目の頸を刎ね、鉤爪を剥き出しにしてきた四羽目をかわすと、荒鷲は戦闘機のように反転して再び向かってくる。

星来は屈んで扇を描くように上に剣を振ると、びちゃつと音をたてて血溜まりに荒鷲の頸が落ちる。その音に反応して星来は左掌を見ると、肌は荒鷲の血に侵食されている。

やっと静寂が戻った。この術も解けて心は人間に戻れるかもしれない、と思ったのも束の間。ふと、星来は記憶を辿る。

（死んだのは四羽、蒼氷が言っていたのは五羽、じゃなかった……？）
空を仰ぐと、未だに旋回している荒鷲が一羽残っていた。目を逸らそうとすると、逆に目があってしまった。その刹那、矢のように荒鷲が下降する。星来は逃げようとするが、それどころか体は剣を構える。

「来ないで……せめて、避けて」

荒鷲のためにも、自分のためにも。しかし、その懇願は相手には伝わる訳がない。

鉤爪を向けて向かってくるも、星来はいとも簡単に軽く受け止め

た。気付くと、剣は右腕でしか持っていないのに、軽い手ごたえしか感じられない。こんな巨体にこれだけの力しかないとは思えないし、向こうが手加減しているなんて、なおさら思えない。

星来は何気ない蒼氷の一言から答えを割り出す。

「人を超越した能力ってこのこと……？」

小さく呟くと、無意識に更に力をいれて振り抜く。いや、これは無意識や術によるものでなく、生き物を四羽殺したことにより人の心が麻痺し、生き物を殺すことによって能力を確かめようと意識的に力を入れたのかもしれない。

腹から真っ二つにされた荒鷲は、突進した時の勢いで二つの体は後方に飛んでいった。その時に降りかかった返り血も、今までよりも多かった。

最後の一羽が死んだことにより、術によって支配された体は、やっと解放され星来は碧瑠刀を突き放すように投げた。今まで戦いに夢中で気が付かなかったが、碧瑠刀は自分は関係ないと言い張るかのように血を完全に弾いている。

星来は血溜まりの上にいるにも関わらず、座り込んで未だ震える血に染まった両手を見た。

既に、常心を失っていた。

常心の代わりに満たす、とめどなく込上げる恐怖。

荒鷲が怖かったからではない。生き物を躊躇いもなく斬りおとした自分への、恐怖。

「いやあああつ！」

血と恐怖を取り去るように叫ぶと、地が鳴動し、風が吹き荒れ始めた。

朱夏と蒼氷は腕で顔を庇い、十六年前の記憶が強くよぎる。

「これは……皆蝕乱狂、か!？」

「いけません! 星来様! 落ち着いてください!」

蒼水の叫びは何もかもを拒み、耳を塞いでいる星来に届かなかった。

すると星来の姿が色が落ちるように透け、静寂が戻ると共に消え失せた。

「星来様!？」

朱夏は乱れた髪を整えながら説明する。

「今のは小規模の皆蝕乱狂じゃ。しかし、消えたとは……」

「星来様の気配が感じられません。……この高天原では」

朱夏は眉を顰^{ひそ}める。

「では、再び中つ国に戻ったというのか？　こんな海から離れた場所で、なぜ。……いや、今は原因を明晰にすることではない。星来は髪と瞳の色を取り戻すことによって、再覚醒した。そのまま角^{かく}の勾玉なしであちらに渡ってしまったら……どうなると思うかえ」

蒼氷ははっとした。

——それは、防がなければ。

「朱夏様。私は中つ国に向かいます。もう主を失いたくありません」
「私も行こう。星来を傷つけ、私があちらに戻ってしまったのも同然。念のため、緋尊にも連絡を入れよう」

二人は顔を見合わせると、蒼氷は青い龍、朱夏は炎を纏った朱い鳥へと姿を変え、遙か遠き国へと飛び立った。

ここで一つ、新しい疑問が浮かんだ。

なぜ、覚醒したての上に詠唱破棄、意志も無く小規模といえ皆蝕乱狂を起こせたのか。

いや、今はそんなことを考えている暇はない。

——もう、蒼尊を失うわけにはいかないから。

第二章：覚めた悪夢、戻る日常（前書き）

（幕間）

朱夏と蒼氷が中つ国を目指している頃。

小さな火の鳥が、地ではなく、蒼穹に赤い影を落としながら王宮を目掛けて飛んでいた。

その時、王宮の一つの窓が微かに開く。鳥は、その隙間にするりと入っていった。

中には緋の髪を持つ人と、真紅の髪を持つ人の二人がいた。

緋の髪の人が鳥に手をさしのべると、鳥は一瞬激しく発火し、巻かれた紙に姿を変えた。

「誰からです？」

「ほうちょう烽鳥なんだから朱夏に決まってる。お礼でも何かか？」

紙を広げ文面を読むと、緋の髪の方は、溜め息をつく。

「どうしようもないことをしてくれたな。朱夏は」

「いかなされました？」

「読んでみなよ。言っとくけど、お礼じゃなかった」

真紅の人も渡された手紙を見ると、眉を顰め怪訝な顔をする。

「……こんなことが可能なんだろうか」

「さてね。その気になれば自分も出来る。でも蒼尊は、そんな能力が高いわけじゃない」

「わずか四歳で皆蝕乱狂を起こされた方ですよ」

「わかってる。わかってるけど」

緋の髪の方は立ち上がる。

「朱夏に協力してくる。リョウガ、トキ、ギョウシュウも中つ国にいるから仕事が溜るけど、今回は四天士のことがかかってる。目を

瞑ってくれないか」

「承知致しました。無駄な休みをとる方じゃございませんから。我が主は」

「ありがとうございます。行ってくる」

緋の影は、部屋を出た。

動き出した時をもうとめないように。

第二章：覚めた悪夢、戻る日常

聖良が目を覚ますと、出窓から朝日が差し込む部屋。即ち自室のベッドで横になっていた。安心感で、ふーっと息を深くはく。

（長くて、生きてる中で一番嫌な夢だった……）

天井を見たまま、ぼーっとする。

（夢……？）

聖良が携帯を手に取り、日付を確認する。テスト最終日から一日しか経っていない。

（じゃ、夢だよね）

生き物を殺し、自分が自分でも、人間でもなくなった悪夢。それはすべて夢の中のできごとだったのだ。

そのことに安堵すると、ドアが開いた。開けたのは、紛れもなく聖良の母親だった。母は目覚めた聖良を見て、喜びの色を顔に浮かべた。

「起きたのね？　いつまで経っても帰ってこなくて……捜したら砂浜で倒れてて……何があったの？」

（砂浜……あ！）

上半身を起こし、鏡を手に取り自分の顔を見た。そこに映ったのは黒い髪、黒い瞳のいつもの自分。血糊もついていない。いつもの自分。

（何やってんだろ。夢だっていうのに）

「どうしたの？」

何でもない、と首を横に振ると鏡を元の位置に置いた。

「学校休む？　無理しなくていいのよ？」

聖良は時計を見た。家を出る時間までまだ二時間ある。

夢であったことはわかったが、どうも気分がすぐれない。休もうか本気で考えたが、ここで休むなんて言ってしまったら、より心配をかける結果になるに違いない。

「平気だよ。今日からテスト返ってくるし」

「そう？　じゃあシャワー浴びにいきなさい。朝食作っておくから」
母親はそう言うのと、一節置いて聖良を抱きしめた。

「本当に、心配したのよ。聖良……」

聖良の首筋に母の一滴の涙が溢れ、小さい嗚咽が聞こえた。

（心配させるようなこと、今までなかったっけ）

「お母さん。ごめんなさい」

母親は手を放すと、少々目を赤くさせながら笑顔を見せた。

「いいのよ。聖良が無事だったことが一番だから」

「父さんは？　やっぱり怒ってる？」

「最初は、かんかんに怒ってたけど、砂浜で倒れてた事を聞くなり
医者と呼ばやら……おかしいくらい慌ててたわ」

「……父さんらしくない」

二人は微笑んだ。

「さ、シャワー浴びてきなさい」

聖良は体をベッドから降ろすと、新しい制服を持ってシャワーを
浴びに行った。その足取りは、どことなく重い。

（どうして……）

高天原という神話上の世界。自分の事を主と呼ぶ、青い髪の青年・
蒼氷に、赤帝と名乗る女性・朱夏。化け物を5匹を相手に血を浴び
ながら戦ったこと。そして、自分の髪と瞳が蒼く変色し、わずかな
がら顔付きも変わっていたこと。全て、夢。なのに。

（どうして、こんなに気になって胸騒ぎがするの？）

忘れてはならない、という声がどこからか聞こえた気さえた。

洗面所のドアを開けると、すぐそこに鏡がある。

そこに映った、蒼い髪と瞳――

「っ！　違う！　違う！　私は……！」

気が付くと、鏡の中の自分は朝の姿に戻っていた。気にしすぎて
幻覚でも見たのだろう。

すごく驚いてしまったので、運動後のように心臓が激しく鼓動している。

「ダメダメ。気にしないようにしなきゃ」

聖良がシャワーを浴び終わると、制服に着替えてリビングに向かった。

テーブルには香ばしい香りを漂わせる焼きたてのパン、スクランブルエッグ、サラダが並んでいた。

聖良は椅子に座り、いただきます、と言ってから温かいパンを少しずつぎって食べた。なんだか暫く食べていない気がして、パンの味と温かさが心にしみる。

食事が終わり、食器をかたそうとした時、母は聖良の前に少し厚い封筒を置いた。

「母さんも父さんも暫く外泊するから。その間の食事代よ。何かあったら電話しなさい」

「……それにしても、やけに厚い気がするんだけど」

「留守番代金として余分に入れといたから。余った分だけお小遣いにしなさい。それじゃあ行ってくるからね。片付け、よろしくね」

「わかった。行ってらっしゃい」

聖良は食べ終わった食器を片付けながら言うと、母親は家を出た。片付けを終え、今日の支度を素早く済ますと、聖良もスポーツバッグを持って家を出た。

——これが、自分の世界と日常。

（何が本当の生まれ故郷は高天原、よ。あんな化け物が出るとこんなて私の故郷じゃない）

食器を軽く洗っていると、意識を持っていかれるような眠気に襲われる。悪夢で眠りが浅かったせいか、やはり眠気がひどい。

「こんなことで、めげるもんか、っと」

洗い終わると、タオルで手を拭き、予めリビングに持ってきてたスポーツバッグを持って家を出る。ちゃんと鍵をかけるのも忘れな

い。

「んーっ！ いい天気！」

晴れているといえども湿気はそんなになく、風があるので昨日よりずっと涼しく感じた。住宅街を吹き抜ける風を受け、学校へ続く短い坂道を上る。

「おはよっ！ 聖良！」

しばらく歩いていると、麻奈が後ろから肩を叩いた。聖良が振り向くと、麻奈のもう片手にはサンドイッチがあった。

「また寝坊？」

麻奈はよく寝坊し、テスト期間の時は徹夜続きで、一緒に登校することはなかった。中間テストの時はテスト期間が終わっても、しばらく遅刻が続いていた。

「仕方ないじゃない。テスト返ってくるから眠れなかったんだよー。古文が赤点危機だし」

「そうだったね。麻奈は理系なんだよね」

「そうそう！」

麻奈は微笑むが、怪訝な顔をした。

「どうしたの？」

聖良にはその質問の意味がわからない。

「何で？」

「いつもの聖良の顔をしてないよ？」

聖良は胸ポケットから手鏡を取り出したが、見ようとする気は起きなかった。また、蒼い髪と瞳が映し出されそうだから。

「それは髪か目の色が違うんじゃない？」

今度は麻奈には聖良の返答の意味がわからない。

「あはっ。寝惚けた？ なんか元気ない、てことだよ。だてに幼馴染みやってるわけじゃないから」

その直後に麻奈はサンドイッチを三口でたいらげた。

「今日はあまり寝てなくて」

化け物と戦った夢のせいで体調がすぐれないなど、信じてもらえ

る理由ではないだろうと思った聖良は、半分本当の理由を選び口にした。

「聖良が寝不足なんて珍しいね。稽古が長引いた？」

「うん。そんなところ」

「本当に厳しいねえ。それに堪えられる聖良も聖良だけだ」

「もう慣れた。物心つく前からどっぷりだし」

聖良は苦笑する。

「ま、テストも終わったし、残りの一学期を有意義に過ごしましょ」

「それってつまり、『授業中寝ないで授業聞け』ってことでしょ」

「当たり前！」

「……赤点危機の麻奈には言われたくないなあ」

「なっ！ 言ったなあ！」

ふざけあいながら坂道を上る。

上った先には、学校があった。

——いつもの日常に戻った聖良を迎えるように。

そこは、暗闇と言うには暗すぎる空間だった。

なぜ、自分がそこにいるかわからない。わかるのは、そこに自分がいること。

目の前に、ふいにどこかで見たような化け物が現れた。

（荒鷲、って言ったっけ？）

荒鷲は今にも聖良を食わんと口を広げる。

「ひっ……」

目を瞑ろうとする直前、荒鷲が断裁された。

荒鷲の代わりに目の前に立つ、蒼い影。影が振り返る。それは——紛れもなく自分だった。

「役目を放棄した臆病者めがっ！」

狂気の目をした蒼い影が、その刀、碧瑠刀を振り上げた。

暗中なのに、碧瑠刀が鋭く光る。

(斬られるっ……!)

「……新堂! 新堂!」

「はっ……はいっ!」

担任が自分と呼ぶ声だった。気が付けば、そこは自分の教室。自分があんなところにいたのは、眠っていたからだと気付く。やってしまった、と言わんばかりに手で軽く額を叩いた。

(帰りのホームルームで寝ちゃったな)

「どうした? 新堂にしては珍しいな。まあいい。さて、お待ちかねの成績発表の時間だ」

えー、と生徒から不満の声が次々と漏れる。

聖良の学校、即ち明華学園では、テストの次の日に各教科の点数が印刷された紙が渡される。解答用紙は次週に返される。クラスが最も一喜一憂する時だ。

「実はこのクラスに学年ダントツの奴がいる」

クラス中が騒めく。

「新堂。よくやったな。なんと全教科満点だ。新堂。最初に取りに来い」

聖良は歓声と驚きの声を浴びながら担任から成績表を受け取った。全教科名の横に確かに“100”という数字がある。

(そういえば、蒼尊は超越した運動能力を持つって。知能の方はどうなのかな)

聖良は未だ静まらない騒めきの中を歩き、席につく。

(って、何考えてんの。私。これじゃあ自分が認めたようなもんじゃない)

「こんな快挙を成し遂げられるのは異以外いないと思っていたなあ」担任が他の生徒の成績表をパラパラとめくりながら見て、ふと言葉を漏らす。

「異って、生徒会長のことですかー」

誰かが質問した。その名を聞いて、聖良も昨日のことを思い出す。あの、容姿は格好良く、しかも優しい、完全無欠と噂される生徒会長、異七緒。

「そうだ。異も今までテストで1点も落としたことがないんだ。さすが、あいつは有名だな……」

「一点も!？」

クラス中が口を揃えて叫んだ。何せ完全無決と謳われ、学園一誇れる人だ。知名度は相当高い。

「おい! 静かにしろ! 異のようになれ、とは言わんが少しは異を見習え! 成績表を返すぞ。……荒海!」

また生徒の声が不満へと変わり、予想通りほぼ全員が一喜一憂しだした。

聖良は成績表をファイルに入れて鞆に入れた。思わぬことで夢のことを蒸し返してしまい、何だかまた気分が悪くなってしまった。(部活休もう。中途半端にやったら顧問に怒られるだけだ)

全員分の成績表配布が終ると同時に帰りのホームルームは終わり、生徒は部活に向かう者、掃除分担の場所に向かう者で分かれた。

聖良の班は今週掃除当番ではないし、部活を休むので、すぐに帰れる。その前に麻奈に部活欠席を告げる必要があった。

「麻奈ー。ごめん。今日やっぱり部活休む」

「おっけー。朝から顔色悪かったもんね。お大事にー」

「あ、途中まで一緒に行こうよ」

麻奈の班も掃除当番ではないので、すぐに部活に向かうことが出来た。

「あーあ。今日は一人で部活やるかあ……」

「ごめんね……」

「ううん。いいよ。体調悪くなるって、誰でもあることだし」
下駄箱で、更に家路につく者と部活に向かう者で分かれる。

「じゃ、顧問に言っとくから！」

「うん。じゃあね！」

麻奈は部活棟に走っていった。それを見送ると、聖良は自分の下駄箱を開けて、革靴を取り出す。

（そうだ。図書館で本借りようかな？）

特に意味はないが、そんな気になった。この学園が所用する図書館は、公共の図書館ほど本はないが、普通の学校の図書室と比べると、相当な数だ。それでも聖良は入学以来一度しか利用していなかった。

革靴を下駄箱に戻すと、その足は図書館にと歩を進めた。

この図書館は三階建て。一つの階の広さは体育館の半分ほど。三階は自習、または閲覧フロアになっている。

聖良は鞆を三階に置いてきて、一階で何かいい本はないかと探していた。

（……てか、ここ、何のコーナーなんだろう）

聖良は天井を見上げ、吊られた標識を読んだ。書かれていた文字は“神話”。

（神話……高天原）

不意に手を伸ばして、一冊の本を本棚から引き抜いた。そして、適当に本を開くと、そのページには高天原について詳しく書かれていた。本までもが故郷を指し示すように。

「違う！」

周りの人に迷惑がかからない程度の声で呟くが、本を足元に落としてしまった。拾おうと身を屈めると、別の手が本を拾い、聖良に差し出した。

「本は大切に扱わなくちゃ。ね？」

聞き覚えのある声に顔を上げた。声の持ち主は、昨日七緒と一緒にいた、生徒会の一員、西園寺仁史。

「すみません。ありがとうございます」

「ねえ、これ読む？」

会話を続けられて、聖良は一瞬たじろぐ。

「いえ……」

「良かった。巽が探してたんだよ。これ」

「巽先輩が？」

立ち去ろうとする仁史が立ち止まった。

「うん。巽は神話系の本をよく読み漁るからね。あ、もしかして君、巽ファン？ 巽と話したい？」

「えっ！ いえ、あの……」

どう答えるべきか迷った。憧れているが、ファンではない。それでも憧れているということは、一種のファンに入るかもしれないからなので。

「顔に書いてあるよ。本見付けてくれたし。いいよ」

「見付けただなんて、そんな」

「偶然でも見付けたことに変わりないって。それに巽自身も、話してみたいって昨日言ってたし」

「巽先輩が、ですか？」

仁史は微笑む。

「家、剣道道場やってるんでしょ？ 新堂道場、だっけ」

「知ってたんですか？」

仁史は顔を横にふる。

「知ってたのは巽だよ。巽のとも道場やってるから。さ、こっち」
少し強引だったような気もするが、七緒自身も、こんな自分と話したいらしいので、とりあえずついて行った。

第二章：生徒会との出会い、悪夢の悩み

仁史に導かれるまま三階に上ると、残りの生徒会メンバーの三人が談話していた。聖良もさっきここに来たが、鞆を置いたところからは死角になっていたので、気付かなかったのだろう。

「本、見つかった？ ……て、おや。今日は聖良も一緒？」

「さっき会ったから。ほら、これ」

仁史は七緒に本を渡すと、七緒は満足気な顔をした。

「ありがとー。探す時間がなくて、どうしようかと思ったけど」

「見付けたの、新堂だよ」

仁史は微笑んで、背中を押して聖良に七緒に近付くように促す。すると、七緒は嬉しそうな声で話しかける。

「よくわかったねえ。私が探してる本だって」

「別にお前の事がわかって……がっ！」

航がぼそりと呟くと、七緒と航以外からは死角になっていたところで七緒は航の足を思い切り踏みつけた。

「あの、異先輩は私と話してみたい、というのは本当ですか？」

「七緒、でいいよ。家が道場やってる者同士、てわけじゃないけど、話してみたいなって。それに聖良は今回のテスト、全部満点なんだった？」

聖良は目を丸くした。

「聞いたんですか？」

「うん。先生が『俺のクラスにもお前のような奴がいる』て誇らしげに言ってたよ」

七緒は500mlのペットボトルを手にとると、そうだと呟き、財布から百円玉と五十円玉を取り出し、航に手渡した。

「会話に飲み物は必需品でしょ。てことで、虎堂。聖良の分よろしく」

「はあ！？ 何で俺ばかり！」

「簡単だよ。西園寺と敏希は君のように『テストで勝った方が負け
た方をパシっていい』という賭けをしていないから」

「そ……そんなこといつ!」

七緒は怖いと思える微笑みを浮かべながら、鞆から携帯を取り出し、少しいじってから“録音再生”と表示された画面の方を航側に
向けると、音声 flowed。

『いいか!? 今度こそお前よりいい点数出してやるからな! 今
回の範囲は俺の全部得意分野だから負けるはずがねえ! テストで
勝った方が負けた方をパシっていい、てのどうだ!』

航の声の再生が終わると、七緒は携帯を折り畳む。

「異存は?」

航はすっかり肩をすくめていた。

「……ありません」

「さすが異。アレ録音してたんだ」

仁史が苦笑いしていると、敏希が何か思い出し、口を開く。

「待て。航。賭けには対象が誰だか特定していなかったな」

「あ、そういえば敏希も虎堂に勝ってたよね」

「……おい。待てよ……」

敏希は航にプリントを強制的に一枚渡した。

「ここに書いてあるものを全て生徒会室に持ってこい」

「おい! 俺は異にしか……」

「賭けの対象の私から指示したら言い逃れ出来ないよ」

「んな理不尽なっ!! ……わぁーったよ。行ってくりゃいいんだ
ろ」

「図書館では静かにしろ」

敏希の忠告を無視し、航はドタドタと足音をさせながら階段を降
りていった。

「すみません。おごっていた上に喧嘩させちゃって……」

「聖良が気にすることないよ。いつものこと」

ふー、と軽い溜め息をつく、七緒は聖良の顔をまじまじと見た。

「何かついてます？」

「ううん。今日の聖良は元気がなくなって。昨日と比べてね」

——昨日が初対面だったのに、なんでわかるんだろう。

聖良にはそんな七緒が不思議でたまらなかった。

「隠してるつもりだろうけど、すごく辛そうな顔してる。相談があったらよろよ？」

とても飾っているようには思えない、七緒の優しさ。人が集まり、信頼を寄せるのも頷ける。こういう人になら、あの悪夢のことを打ち明けてもいいかもしれない。

（七緒先輩に相談してみようかな。でも）

たかが夢のことでもこんなにも悩んでいるということがわかったら、バカにされるかもしれない。でも七緒先輩は優しいから、そんなこととはないかもしれない。それに一人で考え込んでいるのも辛い。

聖良は意を決する。

「くだらない、と思うかもしれないんですが……」

「それを決める権利は私にはない。言ってごらん」

その声があったよりも、更に優しくなったことに、ほっとする。

「あの、知らない世界でいきなり、ここが貴方の故郷だ、化け物と戦え、なんて言われたらどうします？」

聖良は笑われるころを覚悟して、単刀直入に話を切り出したが、実際には笑わずに寧ろ真剣に七緒は少し考える仕草をしている。

「時間があるならまずじっくり理由を聞くな。それさえしなきゃ、他者から見ると短気だと思われる。後でバカらしい、って後悔するのも嫌だし」

「自分の髪と目の色が変わってたりしたら？」

「それは……認めるしかないと思うけど。影になってわからなかったモノが引つ張り出された、と考えるしか」

聖良は言葉が続けようとしたが、どう続ければいいか困ってしまった。その様子を見た七緒も申し訳なさそうな顔をする。

「ごめん。相談にのるって言ったのは私なのに。こんなじゃ全く

参考にならないね」

「いえ、そんな事ないです！」

聖良は否定したが、七緒は苦笑していた。完全無欠と言え、こんな悩みには対処しきれなかったのだろう。

「でも、たかが、たかが夢なのに、こんなにも気になるんです」

無理して言葉を続けたが、結局また相談になってしまった。それでも七緒は真面目に答える。

「それは……言いにくいんだけど、どこかでそういう事を認めている、ていうのかな。肯定してるんじゃない？」

「どういうこと、ですか？」

「動物で言う本能って言うやつ？ 本心受け入れているのに、表が否定する。すれ違いで気になる」

「そんなこと、ありません！」

ドン、と聖良は机を叩く。きょとした三人を見て、聖良は縮こまる。

「ああ。ごめんね。でも本心なんてどんなに頭が良くてもわからないもんだよ。事実私もよくわからなくなる」

静かな口調で答え、七緒はペットボトルの蓋を開け、お茶を飲もうとした時、突然敏希が立ち上がった。

「……やっぱり航が寄り道してないか気になる。行ってくる」

それに七緒は驚いてしまい、お茶を飲む前にむせる。

「げほっ……いきなり立ち上がったたりしないでよ！ あー、飲む前でよかった。敏希は無口なんだから余計驚く」

七緒はペットボトルの蓋を閉める。

「私も行く。言われると心配になってきた」

「七緒。お前は後輩が」

敏希が聖良に目を向けると、聖良は顔の近くで手を振った。

「あ、いえ、お構いなく……」

「じゃ、お言葉に甘えて。西園寺、ここよろしくね」

二人は並んで階段を降りていった。残されたのは、聖良と仁史。

「ホント、あの二人は特に仲良いなあ」

同学年の人がいなくなり、仁史は欠伸あくびをしながら伸びをする。

「特に、ですか？」

「何せ沖縄本土からの仲だからねえ」

「え？」

そうだなあ、と仁史は呟く。

「生徒会三年生は中部部から一人部屋の寮を使ってるんだ。もっとも、今その寮は僕らしか使ってないけど。だから僕らは仲が良い。で、あの二人は幼馴染みで、入学と共にこちらに来たから、とりわけ仲が良いってわけ」

聖良は何気に行われていた二人のやりとりを思い返す。言われてみれば、あの二人は名前呼び合っていた。それが証拠なのだろう。「西園寺先輩と虎堂先輩は沖縄本土から来たんじゃないんですか？」
「僕と航は風籟島に住んでるけど、ただ寮からの方が近いから、僕らも寮に行った方が生徒会が集まるから仕事もしやすい、って理由とかで使ってる」

「とか？」

「……あ、『とか』は要らなかったね」

仁史は柔らかに微笑んだ。その笑顔につられ、聖良もやっと微笑もうとした時。

ドオオオオン……

火山が噴火したような、爆弾が爆発したような轟音が響いた。その衝撃で図書館も揺れた。下の階から悲鳴が聞こえる。

聖良は動揺こそしたが、定心は保っていた。

「な……何の音!？」

「近い、ね。校舎の方から!？」

聖良は嫌な予感がする。確か、校舎には。
最悪の事態が脳裏を過ぎる。

「麻奈……七緒先輩！」

聖良は図書館を飛び出そうとしたが、仁史に腕を掴まれ、制された。

「放してください！ 親友がいるかもしれないんです！」

「今君が行ったって何も出来ないだろう！ それに危ない！」

さっきの柔らかな顔と違い、その表情は険しくなっていた。

仁史の言う事は正しい。非の打ちどころもない。でも。

「それでも、行きます！」

聖良は自分の腕を引っ張り、仁史の手を放させた。その隙に、聖良は急いで階段を駆け下る。

（麻奈……七緒先輩！）

落ちるように階段を下り、ガラスのドアも突き飛ばすような勢いで外に出ると、そこにいたのは……

「星来！ やはり中つ国に戻っておったか……」

「ご無事ですか？ 星来様」

——どうして？

夢の中だけ、のはずだった。しかし疑いようも無く、そこに立っていたのは“この世界にいるだけで”違和感を漂わせる朱夏と蒼氷。その顔色は、消耗しているのかひどく悪い。

「どうして……貴方達は」

「境界……高天原と中つ国を分ける壁を無理矢理越えて来た。それゆえ、私たちの体力は既に限界じゃ」

聖良は呆然として朱夏の話聞いていたが、直に我に帰り、当初の目的を思い出す。

——麻奈が、七緒先輩が。

朱夏がまた何か話そうと口を開けたが、それを聞かずに聖良は、位置にして図書館のちょうど裏側にあたる校舎へ一目散に走る。

途中、足元にコンクリートの残骸が散らばっていた。それはつまり、最悪の状況を示す物。一際大きい残骸を見つけ、聖良は足を止めて目の前の現実を見た。すると、失神しそうな感覚に陥る。

「そんな……！」

粉々に碎かれ、瓦礫の山と化した校舎。その下には恐らく麻奈と七緒がいただろう。そしてその上で弧を描き飛ぶ、高天原だけの存在だったはずの荒鷲。

「あの化け物は……」

蒼氷と朱夏が後に続く。

「星来。そなたが我々の事を夢中だけの者と思っていようとそれは構わぬ。これを見て未だに思うと言うのならばな」

朱夏の声は殆んど聖良の耳には入っていなかった。

「星来様。……これを」

蒼氷は鞘に収められた碧瑠刀を差し出す。

——これがあれば、かたき仇が。

聖良は碧瑠刀を受取り、抜刀すると鞘だけを蒼氷に渡す。両手で柄を握り、きりぎりす鋒を荒鷲達に向ける。

すべて、失くしてやろうと思った。

「あ……」

悲しみと、怒り。

畏怖と、憤怒。

両方が同時に沸き上がり、進む事も退く事も出来なくなってしまった。足が震えるだけで、前には動かない。

（動いて、動け！ 麻奈と七緒先輩の……！）

焦るが、足はその意志に答えてはくれない。

そのうちに、無数の荒鷲達はこちらに気付き、いなくな。それを合図に一斉に聖良に襲い掛かる。

——ほら、やっぱり。何もできない。私は蒼尊なんかじゃない。

——私は、ここで終わるんだ。あの化け物に、体を食い千切られて。

「足がありながら、逃げず」

カツ、とコンクリートを蹴る音がした。

「剣を持ちながら、戦いもせぬのか」

その声を聞いた直後、横を紅い色がかすめて通り抜け、荒鷲を一閃した。

その軌跡は、紅の虹の如く。

第二章：緋の騎士、紅の虹

はっと見上げた聖良の目に映ったのは、真紅の鬘をなびかせる朱色の馬と、それに跨る紅い髪の騎士。その左手には紅い刀身から風に舞う花弁を思わせる火の粉を散らす剣が握り締められている。

さっきの一閃で半数の荒鷲を仕留め、残りは二、三十匹になっていた。

「緋尊……あのかたは、レン殿！」

蒼氷が意外であったことのように呟く。

「レンって、あの人のことですよ？」

聖良は朱夏と顔を見合わせると、朱夏は頷いた。

「当代緋尊、綜蓮^{そうれん}。もちろん、聖良と同じ四天士の一人じゃ」

「シテンシ？」

朱夏は四天士についての説明をしていなかったことに気付く。

「四天士というのは、生まれつき特殊な色の髪と瞳を持ち、特殊な力を持つ者のこと。星来もあちらでは髪と瞳が蒼かったろう？ 同じように見た通り、蓮は緋の髪と瞳を持つ」

蓮は馬で宙を馳駆し、なおも荒鷲と対峙する。荒鷲から発せられる殺気をもともしない。寧ろ、跳ね除けているように感じられる。その跡、正確には剣の跡に紅い帯、あるいは虹のような軌跡が描かれている。

「あれは？」

「紅虹^{ぐこう}。華焰刀^{かえんとう}の主力能力じゃ。対象が剣に触れなくとも、あの軌跡に触れれば斬れる」

蓮が赤い馬を駆ってこちらに近寄る。

「怪我は」

凜とした、その声。風と共に火の花弁と緋の髪がなびく。

「あ、えっと……ないです。大丈夫です」

「なら、いい。朱夏。蒼氷。ここは頼む」

終始荒鷲達を見据えていた蓮の依頼に、朱夏と蒼氷は頷く。蓮はそれを気配で確認すると、再び馬を駆って荒鷲に立ち向かっていく。ギィア、と一羽が不気味に鳴くと、五羽が蓮に向かって突撃する。蓮は鼻で笑うほど余裕の表情で剣を振り抜き、前方に華焰刀で鮮やかな紅虹の弧の描く。勢いで止まらない荒鷲は紅虹に触れ、接触部から斬れて落ちていった。

「すごい……」

戦い慣れている。それも相当。だから、あれだけの荒鷲を目の前にしても笑っていられるんだろう。こういう戦いは、あの術で無理矢理戦わされた時のことを除いてやったことがない聖良でも、そう直感できる。

蓮は足元に落ち行く荒鷲の見下ろし、再び剣を構えた。その直後、喧嘩を売られたように思った荒鷲が十羽前後、蓮に向かって飛行する。

さっと突くように剣の鋒を向けると、鋒から炎が渦を巻きながら現れ、瞬時に荒鷲を囲み燃やし尽した。聖良には立ち向かうことができなかったほど恐れていた荒鷲を、蓮と言う人は軽々と退治している。

すると蓮は何を思ったか、馬を地に下ろし、自分自身も馬から降りて怒鳴る。

「どうした。魔物の分際で怖気づいたか」

荒鷲は蓮に鼻で笑われていることがわかったのか、一羽を上空に残し、一羽が下降してくる。

蓮は右腕を上げる。馬には離れている、という合図だったらしく、馬は蓮の側を離れていく。相手は空を飛ぶ荒鷲。強い力を持っているといえど、こちらは地しか移動できず、明らかに荒鷲より移動速度が遅い、蓮。

「無茶です！ どうして……！」

聖良はあまりにも無謀な行為に思わず叫んだ。対する蓮は落ち着いた様子で、こう返す。

「無茶と言うのは、自分の力量以上のことをすることさ。見てなつて」

刹那、辺りの空気を蓮が支配してしまったように、全て止めてしまふほど引き締まり、緊張感で満たされた。

まず一羽目が速度を急激に上げて突っ込む。蓮は難なく身を葉のように翻してひらりとかわし、その回転を利用して荒鷲の足を斬り落とし、腹を裂く。その時に血が蓮の右頬に付着したが、本人は聖良と違って気にしていないようだ。

二羽目が食い殺さんと嘴を開ける。蓮は怯まず、その挑戦に応えるようにその口に剣を押しこんだ。蓮が前進を押さえているのか、荒鷲が前進を止めたのか、荒鷲の動きが止まる。すると、剣を引き抜いて隙を作らず横に一閃、薙ぎ払った。

休む間もなく、二羽が同時に同じ方向から下降する。それでも慌てる気配すら見せずに蓮は身構えた。

ギリギリまで接近させると、その瞬間に荒鷲の嘴を踏み台に少し跳ぶ。二羽の間で舞うように八の字を描きながら剣を払うと、二匹の片翼が同時に斬り落とされる。着地すると、蓮は翼を斬り落とされ飛行できないこと、出血量から死ぬことを知っているように、止めは刺さずに見下ろすだけ。いや、その理由は他にもあった。

聖良が蓮の強さに見惚れていると、頭上で荒鷲が一羽、巨大な影を落としながら通過した。蓮はとっさに振り向き、一刀両断する。蓮は頭上を荒鷲が通過し、聖良がやっと気付く前から接近に気付いていたのだ。残るは、上空に残るあと一羽。他に比べ体が大きい。群れのリーダーであることは間違いない。

「とりあえず、あの一羽で処理はどうにかなるか」

聖良にとっては意味のわからない言葉を呟くと、蓮は地に華焰刀をドツと突き立てた。荒鷲の方は武器を破棄したと思い込み、その機会を逃さぬように下降する。

動き出しを見計らい、蓮は華焰刀を目の前に、両腕を広げて早口で唱える。

「幽暗より生まれし、異形を成す者よ――」

紅い風が渦を成し、華焰刀を取り巻く。それを受けて蓮の緋の髪が色と輝きを増す。

「地に陰、天に陽。以って世を界とす」

カッ、と刀身が紅く、鋭く光ると両手にその光が集結していく。

「願わくば、その者を代償に、在るべき事象へと導き給え――」

目にも止まらぬ速さで印を結び、その指に向かってきた荒鷲の嘴の先端に触れ、動きを止める。そして、とどめの一声。

「急急如律令！」

蓮が持てる力を注ぎ込むように叫んだ。

すると、景色の代わりに紅く眩しい光が弾け、突風が辺りを支配する。

聖良にはもちろん、何が起こったのか少しも、いや、全くわからない。わかったことといえば、眩しさのあまりに目を瞑った。それでも光が眩しすぎるのか、目を閉じた暗闇も明るかった。

しばらくして、と言ってもどれほど時が経ったのかわからないが、光が落ち着くと、聖良は目を開けた。蓮に向かってきていた荒鷲の姿がなくなっていた。

蓮は地に刺さっている華焰刀を抜くと、馬も蓮のもとへ戻ってきて、聖良達に歩み寄る。その時、気持ちにも余裕ができたので初めて蓮と馬の詳しい容姿を認めることができた。

蓮は見たところ二十代前後で、セミロングの緋の髪と同じ色の瞳が似合う、綺麗な人だった。体つきもあんな軽々と荒鷲を斬っていたのに、魔物に少し攻撃されただけで折れてしまいそうなほど華奢でも、その細身はしっかりしている。

蓮が左手に持っている剣も聖良の碧瑠刀と負けじ劣らず美しい。デザインは碧瑠刀と酷似していて、刀身は青い碧瑠刀に対し、燃えるような赤いルビーのようなものでできている。その柄には紅い勾玉が穴から紐が通され、しっかりくくりつけられている。

蓮の隣に付き添うように四本足で立つ馬は、額に揺らめく炎を思

わせる一本の角を持つところから、馬と言うより麒麟かユニコーン。鬣は炎が燃えるように真紅に煌き、胴体はやはり朱色。

「何でこちらに来ることも烽鳥ほうちょうで知らせてくれなかったんだ。華焰刀で送ることくらい息をするほど容易いことだったのに」

「いや、急いでおったので。それに李雪こそ最後の戦い方はなんじゃ。何代振りかの有能な緋尊を失うと思ったぞえ」

「いいじゃないか。久しぶりに刀身だけで戦ってみたくてね」

蓮は華焰刀を腰にさしていた金の鳳凰の彫刻が施された紅い鞆に収めた。

「第一、私が軍で何と呼ばれているか、お忘れかな？」

「まったく。お前は昔からそうじゃったな」

「ま、全て元通りになったんだからいいじゃないか」

元通りに、と蓮に言われて聖良は初めて気が付いた。校舎が、いやそれ以外も荒鷲に破壊されたものが全て元通りになっていた。それに荒鷲の遺体や血も全く見受けられない。まるで時が巻き戻されたように。

「李雪。そうやって事を済ませようとするでない」

「……あの」

聖良が二人の口論を止めるように口を挟む。

「李雪、って……あの、この方は蓮さん、ですよね？」

「あ、そうだった。ごめんね。ややこしくて」

蓮は微笑むと、傍らに立っていた馬の方を見遣る。

「こちらの麒麟は牡だから麒。名前は緋炎ひえん。そして私の姓は綜、名は李雪りせつ、字は蓮あやな」

「字？ 中国男子が成人後につけられる呼び名のことですか？」

うん、と蓮は頷く。どうやらこちらの世界のことも知っているらしい。

「高天原では男女関係無く成人後に呼び名としてつけられる。それでも李雪を使うのは朱夏を含めて二人いるけど。聖良も向こうじゃ二十歳なんだから、そのうち字をつけられるんじゃないかな」

「そうですか……て、え？」

不可解なことに気付く。蓮の前で蒼氷も朱夏も聖良の名を呼んでいないのに、おまけに初対面なのにどうして知っているのだろう。

「えっと、字で呼ぶんですよね？」

「一般的にはそうじゃな」

「あの、蓮さんは……」

聖良に呼ばれた蓮は、一層にこやかに微笑む。

「聖良。私が言ったこと、もう忘れた？」

「え？ さっきって……」

風で乱れた髪を、蓮は手で軽く払う。

「だから言ったじゃないか

『七緒、でいい』って」

「……はい？」

聖良は目を丸くした。何がなんだかわからなくなった。その言葉を言ったのは、七緒先輩。でも高天原の人が七緒先輩を知っているわけじゃない。――まさか。

「どう？ ……あ、そうか。容姿が違うからね。じゃあ」

蓮は目を瞑り、静かに息を吐くと、風が微かに起こる。するとみるうちに緋の髪は熱された鉄が冷めていくように黒くなっていく。目を開けると瞳も日本人のそれになっていて、顔つきは七緒そのものに変わっていた。

「うそ……言葉遣いとか」

「高天原では將軍職をやっているからね。緋尊でいる時はどうもその時の言葉遣いになっちゃって、ね。今度から改善に努めようかな」
驚いて気が動転している聖良に対し、蓮……七緒はその状況を楽しんでいたことは明らかだった。

「初めまして、と一応言っておく。綜蓮としてお目にかかるのは初

めてのことだからね」

第二章：蒼穹の国、その姿

突然現れ、一瞬で荒鷲を一掃してくれた騎士。目の前で緋尊を名乗った女性。それは紛れもなく、自分が尊敬している、同じ学校にいる先輩だった。

その真実を知り、聖良はそのまま身動きがとれなかった。

「どうかなさいました？ 星来様」

何も、と言ったきり聖良は二の句が継げない。何か言おうと口を動かしても声にならない。

それを七緒は友達のことを心配していると受け止めた。

「安心して。荒鷲の事は私が『なかったこと』として処理したから。聖良の友達に影響は全く出てないよ」

「本当、です、か？ よかつ……」

安心しきったせいか、全身の力が突如抜け、聖良の足元がふらついた。七緒はつかさず支えてやる。

「聖良！？ ……そっか。安心したんだね」

「無理もないよ」

近付いて来たのは、仁史。

仁史は優しい顔で、目を閉じている聖良を見つめる。

「逃げようとした荒鷲は仕留めたよ。新堂は僕の静止を振りきって、友達や巽が無事か見に行こうとしてたんだから」

「そう、なんだ。心配してくれたんだね」

気を失ったか眠ったかどっちかの状態の聖良の頭を軽く撫でる。

「……でも、心配してくれなくて良かったのに」

その手の動きを、ぴたりと止めた。

「もう、私を心配するがゆえになくなるなんて、嫌だから」

「……巽？」

七緒は聖良を支えている手と逆の手の袖で目を擦る。

「まだ心配されるのは嫌なんだ？」

一つ思い当たる節があったので、仁史はそれに関連して訊ねる。
「嫌ってわけじゃない。心配される有り難さより、いなくなる恐怖の方がはるかに大きいから」

七緒は弱気な目をした。――この目の意味を知っているのは、あの時も一緒に出陣したあの人しかない。

――六年前の“全面戦争”で、何があったのか。

「そうだ。朱夏はこれからどうするの？」

「五帝たる者が護る世界を長く空けていられるかえ。事は済んだ。私は戻る」

そう、と七緒が頷く。

「蒼氷は主がここにいるからまだ戻りたくないならそれでいい、って言いたいとこだけど、聖良は一応再覚醒しているから勾玉、持ってきてもらえるかな」

「致しましょう」

「高天原組はこれでよし、と。後は……」

七緒は聖良の体を仁史に預けた。

「私達の寮で休ませてあげて。空き部屋はたくさんあるんだから」

「え！？ いや、ちよつと……」

「私は緋炎と軽く周辺を見回りがてら夏の合同合宿の資料を取りに行くから」

「それじゃ仕方ないか。わかった。新堂のことは任せといて」

七緒は緋炎に騎乗すると緋炎の蹄を火が取り巻き、空を翔けて行った。

「ん……」

聖良が気が付くと、見慣れぬ部屋にいた。

（また高天原だったら笑えるなあ……）

窓の景色を覗くと、部屋に引き替え見慣れた景色、明華学園があった。それを見ると再び高天原に戻されたわけではないらしい。

「目、覚めた？」

仁史が本を持って部屋に入ってくると、カーペットの上に座った。
「えっと、その……」

「僕らの寮だよ。空き部屋だから心配しないで」

「先生にはバレないんですか？ 見回りとかで……」

「ないない。使ってるのが生徒会しかいないから大丈夫だろ、て管理は僕らに任されてるんだ」

へえ、と簡潔な返事をし、聖良はここに行き着く前の記憶を辿る。
まず、荒鷲が現れた。七緒先輩が高天原の人、且つ四天士の一人、
緋尊だった。その瞬間、嬉しいような気持ちだったが、同時に裏切
られた悲しさがあった。そこで、だんだん意識と記憶が薄れ、思い
出せない。とりあえず、外にいたことは間違いなかったと思う。

「誰が運んでくれたんですか？」

「僕だよ。異はその後、敏希と航と合流して他の場所に荒鷲がいな
いか確認しに行ったから」

「そうですか……て、え？ 西園寺先輩？」

「あ、いや、あの、僕は普通に……つかあれ、普通って言うのかな
……じゃなくて、とにかく新堂を運んだだけで……」

「いえ。西園寺先輩達も高天原の？」

顔が紅潮しかけていた仁史は安堵の息をつく、説明を始める。

「そう。僕らは異国^{そん}三軍の將軍。異、即ち綜蓮^{すなわ}は三軍の總將軍。あ
んな大規模じゃないけど、稀に中つ国に魔物が迷いこむことがある
んだ。それを僕らのような“派遣員”は魔物を討滅し、“なかった
こと”として処理する。それが仕事」

「派遣員？」

「あー……。その説明嫌いなんだけど、ま、いっか」

仁史は持ったままだった本を床に置いた。

「派遣員ってのは、五歳までに三途門を通った人達のこと」

「三途門って何ですか？」

「簡単に言っちゃうと、中つ国での肉体を手にいれる為に通る門。」

通ると魂の根元は同じだけど、中つ国で生まれ変わることが出来る。十歳前後になると自分が高天原の人間である事に気付き始める。これを世醒よせいって言うんだ。ここまではいい？」

「あ、はい。なんとか」

「じゃ、続けるよ。完全に世醒すると、自分が住むところから一番近い高天原の入り口を見付け、行き来するようになる中つ国の人には変哲もない場所が高天原の人にとっては入り口っていう重要な場所だったり」

「でも私が高天原の人間だとしたら、世醒がありませんでした」

仁史は顎に手を当てて、んー、と考える仕草をする。

「よくわからないけど、下手に、例えば無理矢理通ると世醒しないって聞いたことがある。それじゃないかな。ちなみに世醒する時、すごく混乱する人がいるんだ。そういう人は自ら命を絶つ人もいるね。でも派遣員は給料が普通の軍人より倍近くだから、志望者は後を絶たない」

仁史が一通り説明を終えると、ドアをノックする音が聞こえた。それに続く、蒼氷の声。

「斗暉とき殿。蓮殿とせが呼びですが」

「わかった。今から行く」

「斗暉？」

「うん。高天原では姜斗暉きょうと、って言うんだ。さ、巽のところに行こう。遅いと怒るから」

仁史は立ち上がり、聖良もベッドから下りて鏡で髪が乱れていないか確認する。

「七緒先輩は怒ると怖いんですか？」

「うん。表情には出ないけど醸すオーラが怖い」

仁史はにっこり笑った。

聖良が部屋から出てまず寮の印象で思ったのは……
(ホテルみたい)

室内の廊下にいくつかのドアが並んでいる。仁史が二、三階が部屋の階で一部屋は1LK、それが一つの階につき九つある、と教えてくれた。

一階は、まさしく広いリビングだった。仁史に聞いたところ談話室らしいが。キッチンにテーブルやテレビなど、くつろげそうな場所。そこで七緒は書類を広げていた。七緒は聖良に気付き、顔を上げる。

「西園寺、ありがとう。だいぶ時間を犠牲にしちゃってごめん」

「異も生徒会引き継ぎに向けて仕事が多いんでしょ？　いいって。じゃ、僕ちよっと出掛けてくる」

「もう七時過ぎだけど。いっか。夕食までにはちゃんと戻ってよね」
仁史が出掛けて行くと、七緒は聖良と蒼氷を向かい側の席に座らせた。

「そういえば、朱夏から高天原の世界のことは聞いた？」

「何も……。でも、あの、教えていただけませんか。高天原の世界を」

そんなことを知っても、何にもならないと今でも信じている。それでも、知りたかった。先輩達が生きるという、もう一つの世界を。七緒は真剣な表情になり、答えた。

「いいよ。でもまだ自分が認めたわけじゃないでしょ。自分が高天原の人間だって」

核心を突かれ、返す言葉が思い浮かばない。

「顔は隠してるようだけど、目に表れてるよ。じゃ、まず高天原の地形から」

七緒は紙の中心に八つの角がある星を描き、その先端の上に八つ、花が開いたように翼や涙型のような形を描いた。

「これが高天原。九つの島があるけど国は八つ。地球のように丸いかはわからない。この中心の島は実質五帝のトップの黄帝の居住。中央に居城があって、周辺は守護獣の卵が住む」

「守護獣の卵？」

「黄帝は力で毎年何匹か守護獣を作り出し、特に卓越した能力を持つ者が守護獣となって八国に降りる。確か私の緋炎が蒼氷と同期。言わば双子の兄弟のようなもの。ね？」

七緒が蒼氷に視線をやると、蒼氷はこくりと頷いた。

「でも緋炎は私以外には冷たい。そのところ入れると蒼氷が羨ましいよ。で、各国の名前は、っと」

七緒は北を上方位を書き込み、燃える炎のような形をした南の島を指差した。

「これが離国。朱夏の王宮がある」

次に片翼の形をした東南の島を指差す。

「ここが異国。私が籍を置くのもここ」

次はジグザグの形をした東の島。

「震国。五帝の蒼帝、陽春の王宮がある」

次に三角形のような形をした北東の島。

「艮国。巨大な禍を封じ込める天の岩戸がある。こちらの神話にもあったよね」

次に雫の形をした北の島。

「坎国。玄帝、玄冬の王宮がある」

次に雲のような形をした北西の国。

「乾国。私も一度しか行ったことがないからよくわからないけど…」

次に中心に微かに穴が空き、バランスの悪いドーナツのような形をした西の島。

「兌国。白帝・白秋の王宮がある」

次に六角形の形をした南西の島。

「坤国。一応半分朱夏の支配下だから私も稀に遊びに行く。……つと。やっと説明終わった」

「質問いいですか？」

説明が相当疲れたらしく、七緒はコップの麦茶を飲みながら頷く。「東西南北の国は五帝が治めるからまとまっていると思うんですが、五帝のいない艮、巽、坤、乾はどうなんですか？」

「太宰^{たいさい}が治める。こちらでは総理大臣に当たる坎、震、離、兌は帝
国制、艮、巽、坤、乾は共和国制と言ったほうがわかるかもね。あ、
でも」

七緒は北東から南西に、北西から南東に対角線を引き、分かれた
四つのうち、北を黒、東を青、南を赤に塗り、西は白いまま何も塗
らなかった。

「一応共和国制のとも黒は玄帝、青は蒼帝、赤は赤帝、白は白帝
の支配下ってことになっている。なんて言えればいいのかな……そう。
邪気とかから護るのが五帝。そういえば異国の太宰は蒼尊の姉だよ」
聖良のことを蒼尊と認めない聖良の気持ちをめぐんでか、聖良の
姉、とは言わなかった。

「とりあえず地形説明は終了。他に質問は？」

「……四天士、って……」

聖良の顔色が微かに変わった。

「常人の髪と瞳は持たず、常人ではない力は持つ人のこと。どうし
て生まれるのかは、私でもわからない。朱夏に訊いても黄帝しか知
らないだろう、って言われる」

「どうして、四天士だけが怖い思いをしなきゃならないんですか」

「そうかな。魔物に襲われても逃げることしか出来ない人々よりは
マシだと思うけど」

七緒はコップの麦茶を飲み干し、麦茶をペットボトルからついだ。

「……蒼氷から聞いたけど」

聖良は、はっと蒼氷の方を向いた。

「蒼尊の使命を背負うのは嫌か」

七緒が冷やややか且つ優しい目で聖良を見た。すると聖良は迷いな
く言い放つ。

「嫌です！ 私はただの高校生で、人間で……どうして私がそんな
恐ろしい思いをしなきゃならないんですか！」

「星来様！ しかし！」

「蒼氷。待て」

言葉を続けようとした蒼氷を七緒が止めた。軽い溜め息をついた後、再び口を開く。

「わかった。蒼尊の籍から除籍してもらうように黄帝に頼む」

「蓮殿!？」

同じ考えを持っていたと思っていた予想外の七緒の言葉に、蒼氷は目を見開いた。

「ただし。もう少しだけ考えて。私は……」

七緒が何か言いかけるとドアが開く音がした。

「……毎度やなタイミングで我が寮の主夫が帰ってきた」

「うっせ! 毎度ってなんだよ!」

声の主は航。確かに航の両手はスーパーの袋を持っていたので、なんとなくそれらしかった。

「今から仕事、てことはまず夕食は間に合わないだろうね。私の分は聖良にまわしてあげて」

「あいよ」

七緒は近くの棚から赤く黄色い糸の刺繍が入った短めの鉢巻きを取り出し、額に巻いた。

「それ、どうしたんですか?」

聖良の問いに、微笑みながら答える。

「気合いを引き締めるのに、ね」

七緒は寮から出ていった。その時蒼氷も立ち上がる。

「星来様。少々外出します」

「あ、うん……」

続いて蒼氷も出て言った。

「……蓮殿」

「蒼氷?」

七緒が振り返る。その横に麒麟の緋炎が立っている。

「先程蓮殿が星来様に仰ったことは……」

蒼氷の言葉に、緋炎が口出しする。

「わからぬか蒼氷。あんな弱気な蒼尊など、いつそいない方がよろう」

「黙れ緋炎。そういう事を言っているわけじゃない」

七緒が怒鳴ると緋炎は謝罪の意で頭を下げた。

「では、なぜです？ 貴方がた四天士の方に負担がかかる上に……」
蒼氷は間を置いて言葉を続ける。

「このままでは星来様が六年前の蓮殿と同じ経験をされてしまいます。蓮殿は自分と同じ思いをさせるのを何よりも嫌がられておられたのに……」

「そう。あんな目に合うのは私一人で十分。でもね」

七緒は緋炎の首を撫でた。

「聖良には“戦うこと”が辛いんだ。後輩に辛い思いをさせたくないのも本心。だからその分私が強くなって皆全てを守る。それでいいだろう」

第二章：緋尊の過去、決意確立の経緯

五分程で蒼氷が聖良のもとに戻り、聖良の顔を見ると何か思い出したように首にかけていた青い勾玉を聖良に差し出す。

「角^{かく}の勾玉です。どうぞ、お持ちください」

「でも……」

「持つだけでも。これがないと、また中つ国に魔物が入り込みます」
「え？」

「本来、中つ国でも蒼尊の能力が使えるようにするためののですが、蒼尊の所持する力の漏洩を防ぎ、高天原と中つ国を隔てる壁に穴を開けないようにするためです。星来様は半覚醒していらっしゃるから」

聖良は拒否しようとしたが、持つだけなら水面の輝きを持つ勾玉をアクセサリーとしてつけるのも悪くない、と思い、受け取って聖良は首からかけた。

「それでは、お暇^{いしま}申し上げます。私のような者は長く中つ国にいられませんから」

蒼氷は一礼して寮から去った。

聖良はソファアに座り、倒れこむように背もたれに寄りかかった。

「はぁ……」

やっと一人になれた、と聖良は思った。航がいたものの、いい勾玉を漂わせながら夕食を作ることに集中しているので、実質一人と言っている。

昨日も今日も色々なことがありすぎて一人で考える時間が欲しかったのに、なかなかそんな時間がなかった。劇的過ぎる環境の変化に、身体より精神が悲鳴をあげていた。

（どうして、こうなった？）

昨日の夕方まで普通の高校生をやっていたのに。

（砂浜なんて行けなきゃよかった……）

同時に否定も生まれた。同じ学校内にもう一人四天士がいたのだから、砂浜に行かなかったとしても、ただの時間稼ぎにしかならなかっただろう。七緒に限って無理矢理連れてくる、ということはないだろうが、さすがに切羽詰まると、そういう手もとらざるを得なくなっただけかもしれない。

(いずれも、こうなる運命だったのかな?)

「ただいま。航ー。今日のご飯はー?」

仁史とジャージを着た敏希が帰ってきた。競走でもしてきたのか、二人とも肩で息をしている。

「鍋。今日は一人お客がいるしな」

キッチンから夕食を作っている航が答えた。

「こんな暑い日に鍋? 好きだからいいけど。牛肉入ってる?」

「豚の方が安かったから豚」

「……七緒は?」

敏希がタオルで汗を拭きながら言った。

「高天原。離で魔物の群れが出たらしいから討伐に。夕食に間に合わないそうだから食べとけ、だってさ」

敏希はテレビをつけ、バラエティ番組にチャンネルをあわせ、仁史もテレビの前に座る。

「七緒、確か朝にパン一つ食べたきりだぞ」

聞こえるように敏希が呟くと、そこにいる全員が目を見開いた。

「マジに?」

キッチンから航が出てきた。

「今回の合宿、メンバーがメンバーだから色々やる事が多くて食べる暇なかったんだね」

野菜を切る音を響かせながら、航はそこにいた三人に尋ねる。

「翼が帰って来るの待つか。どうせすぐ帰ってくるだろ」

敏希と仁史は頷く。仁史が聖良の方に顔を向けると聖良も頷いた。

「ただいまあー」

航の言う通り、一時間弱で七緒は寮に帰ってきた。服はいつ着替えたのか、着替えなかったのか中つ国の私服のまま。

「早くしろー。腹が減って仕方ねえ」

他の四人はとっくにテーブルを囲ってテレビを見ながらイスに座っていた。

「待っててくれたの？ 先に食べてって言ったのに」

七緒はテーブルに既に置かれた具材を見渡す。

「鍋なんだから全員で食べた方がいいだろ」

「こんな暑い日に？ 牛は入ってる？」

「仁史と同じ質問をすな！」

七緒が椅子に座ると、航はキッチンから鍋を運び、鍋敷きの上に置いた。

「そーんじゃ。いただきますーす」

「あーっ！ 仁史！ てめえ俺が狙ってた肉！」

仁史と航が争奪戦を繰り広げる横で敏希は自分の皿に具をとり、反対側ではポン酢を入れた皿を聖良が七緒から受けとる。温度差があるようで、おもしろいな、と聖良は思った。

「ごめんねえ。見苦しくて」

「見苦しいって何だ！ ……あっ！」

航が目を離れた隙に仁史が航の皿からがんもどきを素早く手馴れた手つきで奪っていった。

「こういう時は聖良優先でしょうが。何がいい？ 取ってあげるから」

「じゃあ、白菜と榎と豆腐を……」

「肉はいい？」

「あ、お願いします」

七緒は聖良が言ったものを皿に取り分け、はい、と置いた。

それと同時に二人の争奪戦が再開された。一時的に中断していたのは、七緒が取る時に争奪戦をやっていると、絶対に後で七緒の鉄

槌が下るからである。

「いつもこんな感じなんですか？」

「鍋の時はこんな感じかな。お腹すかせてると余計にね」

七緒は肉を口に運ぶ。

「さ、食べなよ。早くしないと全部とられるよ」

「あ、はい」

聖良が食べようとした時、髪が邪魔をした。結ぶのを忘れていた、と聖良はゴムを取り出し、高いところで一つに結ぶ。

「短くしようかな……」

「四天士の女性は髪を腰の辺りまで伸ばさなきゃいけないんだよ」

七緒は白菜を美味しそうに頬張りながら言った。

「そんなに、ですか？」

「おかしいことに髪が力の貯蔵庫みたいなものだから」

自分は四天士じゃない、と否定しようとしたが、この賑やかな空気を保っていたかったので、言葉には出さなかった。

聖良は七緒を見て、矛盾に気が付く。

「七緒先輩は緋尊なんですよね？」

「うん？」

鍋から椀を取り、ポン酢にちよっとつけて食べながら答えた。

「そう言う先輩は肩までしか伸ばしていませんよね？」

七緒は皿の中の具を全部食べ終え、置いた。

「……さて。どうしてでしょうか」

七緒はふんわり微笑む。それっ切り、何も言わない。ただ、微笑むだけ。

「敏希っ！ てめえまで何しやがる！」

航が取ろうとしていた具を、悉く敏希が奪い去っていた。

「いい加減にしない！ 航！」

「……俺かよ！」

航の怒鳴り声で、あっさり話題を変えられてしまった。

——あの微笑みは、何か引つ掛かるものがあつた。

「聖良。泊まってもいいよ?」

良く言えば賑やか、悪く言えば騒がしい夕食が終わった後、テーブルを拭きながら七緒が言った。

「いえ、そんな……」

「構わないって。ね?」

そういえば両親は暫く外泊すると言っていた。聖良の一人だけの外泊は許されていないが、両親がいないならバレない。帰ったところで寂しい思いをするだけ。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「決まり! いいよね?」

他の三人も片付けをしながら頷く。

「あ、今から着替えとか持ってきます」

「一人じゃ重いだろうし、暗いんだから危ないよ。えっと」

七緒は三人の顔を見渡した。

「敏希。頼める? 西園寺はさっき聖良の事頼んじやったし、虎堂は食器洗いあるし頼らないし」

「前者は事実だが、後者は納得いかねえ……」

「事実じゃん。ってことで、いい?」

敏希は立ち上がり、携帯をポケットに入れて軽く出掛ける支度をした。無言の了承。

「じゃあ、あの、お願いします。原瀬先輩」

聖良は家に着くなり、急いで衣服等を旅行用の鞆に積み、学校の鞆とスポーツバッグを持って外に出ると、重い旅行用の鞆を敏希が持ってくれた。

すっかり人通りの少なくなった道を、二人は並んで歩く。涼しい

夜風が島を流れて行く。

さすがに静か過ぎて気味が悪くなって来たので、聖良は話題を探す。

「先輩も高天原の人なんですよね？」

「そうだ」

「四天士なんですか？」

「いや、俺は異国三軍の一つ、『疾風』の將軍だ」

「そう、ですか」

七緒と幼馴染みとはいえ、雰囲気が違う敏希はなぜか取っ付きにくかった。

敏希は七緒とは対照的に表情、性格共に冷ややか。それが話にくいオーラを発しているのだろう。

今度はそんな敏希が口を開く。

「お前はどするんだ？ 蒼尊としての役目を」

「私は……」

七緒は使命を果たすことを強制しなかった。しかしそれは遠回しの強制だったのかもしれない。それも考慮した上で聖良は答えを出す。

「やっぱり嫌です。仮に私が高天原の人だとしても、あんな化け物と戦いたくないです！」

強く言葉を発した。

「……七緒の願いは」

自分ではなく、七緒を庇うような発言をされると思い、とうとう聖良は本心を表してしまう。

「どうせ仲間が増えてほしい、と思っているだけでしょー！？ 私のこと、全然考えないで！」

その時、敏希はどこかしんみりとした表情をする。

「七緒は、蓮は十六歳で朱夏様に連れられて華焰刀が封印されている離の王宮に行ったが、その時は戴剣は華焰刀を持つ事で形をつけるだけ、と思っていたらしいな」

信号が赤だったので、二人は歩を止めた。車がしばしの間、前を行き交うと信号が青に変わり、再び歩を進める。

「……あれから、もう六年になるんだな」

敏希は指をおって年を数えた。

「何があつたんですか？」

「七緒と俺は、水楊すいようと万励ばんれいって奴と、異国軍四天王として三軍を仕切っていた。水楊と万励とは少し年が離れていたが、兄弟同然だった。……六年前までは」

敏希は空を見上げた。聖良も空を見上げると、雲のない空で、星が瞬いていた。

「六年前、坤国に新種の魔物が発生し、坤国軍は壊滅状態になった。その時、俺達は坤に行つて加勢したが……」

右肩からかけていた鞆を左肩にかけ直す。一回目はずり落ちてしまい、もう一度かけ直す。敏希は口ごもっていた。

「先輩？」

「ああ。すまない」

気のせいかな、敏希の歩調が少しだけ落ちた。

「その時に水楊と万励は七緒をかばつて、死んだ」

「え？ 七緒先輩でも倒せなかった魔物だったんですか？」

「いや。七緒の実力なら充実倒せた。地形が多少悪かったが、七緒には関係ない。ただ唯一悪かったのは、魔物……今では鬼神きしんと呼ばれる魔物の能力」

聖良は首を傾げた。

「鬼神、つまり二人を殺した魔物は、四天士の秘宝刀、七緒の場合は華焰刀でないと致命傷を負わせる傷すらつかせることが出来なかった。これが何を意味しているかわかるか」

この意味を解釈したが、その意味が聖良には信じられなかった。

「務めを破棄したせいで、仲間が死んだ……？」

敏希は無言で頷く。

「それだけじゃない。助けられるはずなのに、助けられなかった。」

七緒は軍で『紅蓮の討士』と呼ばれていたからそのプライドの面でも、そして仲間を失う事が相当辛かっただろうな」

聖良は震えた。

——自分が七緒の立場だったら、堪えきれない。

「あの二人は俺が七緒を連れて逃げる前に、今更七緒を責めて、あの卓越した強さを潰さないように、最期に『俺らはお前が守る国をずっと見ている。お前の力は人々に使え』と七緒に告げた」

再び信号に引っ掛かり、歩を止めた。

「でも七緒にはそれが重荷だった。二人の言った『人々』はもちろん、七緒にとってあの二人も含まれるわけで。約束を守ると誓っても、二人を助けられないから即座に破ることになるから」

信号が変わり、また歩き出す。

「でも、その二人が命を懸けて鬼神は止めることが出来たんですか？」

「まあ、な……」

敏希の声色が明らかに沈む。

「鬼神は四天士じゃないと倒せないんじゃないんですか？」

「武力で倒すならな。二つの倒す方法があるうちの一つがそれだ。もう一つ高天原に最強の毒を飲ませる。二人はその方法を使ったんだ」

「その時に亡くなったんですね……。でも、こんなことをいうのは失礼ですけど、それが七緒先輩の髪に関係あるんですか？」

「その後の話になる」

敏希は少しだけ目を瞑り、一つ一つ、丁寧^{てんこ}に辿るように話を語りだす。

「俺と七緒は空を翔ける獣、天虎^{てんこ}に乗って逃げる途中、七緒の長く綺麗な緋色の髪が先から黒くなっていった。ひどく傷付いたからか、務めを破棄した報い^{うり}がその時になって来たのか未だにわからないが」

敏希は更に記憶を辿り、それを言葉にして紡ぐ。

「朱夏様なら治療法をご存知かもしれないと思って離の王宮に直行

した。生憎、朱夏様はいらっしゃらなかったが。その時ちよつと目を離れたら七緒がいなくなつてて。緋炎に言われて、見つけた場所は華焰刀が封印されている場所。七緒は封印を解き、肩まで黒くなつた髪を華焰刀で切つた」

「それで……」

七緒が悲しい顔で緋の髪を切る姿が、一瞬だけ目に浮かんた。

「四天士^{あいにく}の髪は能力の貯蔵庫。もちろん、直後は戦力が著しく低下した。それでも七緒は必死に鍛練して何度疲労でぶっ倒れたことか」
敏希が珍しく失笑した。

「今は華焰刀でやっと能力を引き出しているが、な」

聖良は暫く言葉を失つた。

——あんな、優しく、強くて、聡明な人が自分のように務めを破棄して、仲間を失つた。

それが、未来の自分の姿のような気がした。

「同時に、四天士の務めとは『人を守る事』じゃないかと思つたな」

「七緒先輩の両親は同意したんですか」

「同意するも何も、高天原、中つ国共に産みの親がいらないからな……」

言つた後で敏希は自分の発言に喫驚した。

「さっきの話もそうだが、俺が言つた、なんて七緒には口が裂けても言ふなよ」

敏希が仕方ないか、と言っているような溜め息をつく。

「まず中つ国の方。七緒と今の両親とは血が繋がっていない。早い話、養子だ」

え、と聖良は呟く。

「両親は七緒が産まれてすぐに亡くなつた。残された七緒は遠い親戚、異家に引き取られた」

「うそ……」

気付く者なんていない、と敏希は呟く。

「そして高天原の七緒、すなわち蓮は幼い頃に土砂降りの日に樹海

で瀕死の状態で朱夏様に発見された。おまけにその場から離れられないように高等な呪までかけられて」

「ひどい……」

聖良は心を痛めた。自分は家族に囲まれて過ごしている時期に、蓮は独りで雨の樹海にいたのだ。どれだけ寂しいことなのだろう。「四天士が生まれた村はその四天士が死ぬまで豊年が続くし、捨てることなんてまずない、はずなのに」

敏希は再び溜め息をついた。

「ま、不幸が幸いしてそれで七緒は常人には出来ない覚悟が出来るようになった」

聖良はあまりにも衝撃的な事実の連続ですっかり黙ってしまった。

「明日、高天原に行くか？ 旅行だと思って」

旅行。それなら、まだ気軽に行けるかもしれない。

「……はい」

それに、なぜか話を聞いて行ってみるだけの気は起きた。

「俺もお前の気持ちかわからないわけじゃない。大任を勝手に押し付けられたようなものだから」

と、後になって付け足した。寮はもうすぐそこだ。

「七緒もお前の気持ちは充分理解していると思う。ただ、同じ思いをさせたくないだけだ」

更に付け足しをすると、目の前の人影にやっと気付く。

「ちょーっと歩くのに時間を費やし過ぎじゃない？ 原瀬敏希君？」

「七緒か。どうした？」

「帰って来るの遅過ぎ！」

七緒が心配したらしく、途中まで来てくれたのだ。もっともな意見で静かに口論する二人に聖良は言う。

「七緒先輩。私、まだ蒼尊のことを認めた訳じゃないですけど……」

二人は口論をぴたりと止めた。

「高天原に、行くだけ行ってみたいんですが……？」

七緒は驚いた顔を見せたが、すぐに微笑み、

「おっけ。私が異国の町を案内してあげるよ。魔物が来てもここに用心棒がいるから、安心して」

そう言って、七緒は自分の胸に手を添えた。

その相変わらず優しい言葉に、聖良は笑顔で返した

第二章：緋尊の過去、決意確立の経緯（後書き）

（終幕の間）

高天原、離、即ち赤帝の王宮。その敷地の一角に、小さな滝のあ
る木々で隠れた庭がある。

夜、月明かりが当たる滝壺に、叩き付けるように落ちる水に打た
れる緋色の髪をした女性が一人、あぐらをかいて岩に座っている。
格好は胴に晒を巻き、水に隠れた下半身には袴、と言ったとても簡
素なもの。

ガサツ、と木々の間から音がした。

「誰だ。丸腰とでも思ったか？」

共に水に浸していた剣の柄を握る。

「俺だ」

「ああなんだ。敏希……りょうが凌雅か。こっち来ればいいのに」

凌雅、というのは中つ国で言う原瀬敏希の高天原の名。

「蓮。お前少しは女性としての自覚も持て」

「え？ ああ」

蓮は自分の格好を見て理由に気付き、苦笑する。

「女性としての自覚を持ったら將軍職が務まらないと思うけど」

「最低限は、と言っているんだ」

蓮に対して背を向けながら答えた。

「やはり今でもそれに当たらないと駄目か？」

「これだけはどうにもならないみたい」

四天士の力の貯蔵庫は髪。蓮の髪は短く切ってしまい、もう伸び
ない。故に、普通の四天士並に力を生み出す事、微かに生み出す力
を漏れなく留めることが出来ない。

だから、この水、水の形態を持ちながら水に属さず、炎に属す、
この流炎るえんの滝に打たれ、力を供給し、体に叩き込んで貰うのだ。

「今日まさか中つ国で一氣に使っちゃうなんて思ってもなかったけど」

「荒鷲と言え、あれだけ数が多いと圧巻だったな」

「そう。数が多過ぎたよ今日のは」

蓮は額に手を当てて、深い吐息を落とす。

「それは新堂が皆蝕乱狂を起こしたからだろう？」

「もっとも。最初はそう思ってた。けど度が過ぎてるような気がして……」

星来は皆蝕乱狂で一時的に境壁に穴を開けてしまった。穴が開いた時に魔物が迷いこむことがあるが、それも群れからはぐれた一五匹くらい。群れで迷いこむことは有り得ない。いや、まず有り得ないのは荒鷲の方だ。荒鷲の群れは一群につき二十羽前後。今日の群れは軽く倍はいた。

「有り得ないことづくしでこっちがおかしくなりそう」

「明日、新堂はどうするんだ？」

「異国の首都を案内する。その後、城にも行こうかと」

「太宰が新堂の姉だからか？」

「じゃないと行く理由がないでしょ」

異国のトップ、太宰は姓を環^{かん}、字を留京^{るきょう}、名を——碧紗と言った。十六年前、豪商環家の当主が崖下を通った際に倒れていた女の子を拾った。その子が碧紗だ。

碧紗は家族構成と自分の事以外は全て忘れていた。家族構成のみで家族の名前は覚えていなかったので、親の探しようもなく、結局環家の養子になったのだ。

そしてつい最近、朱夏が蒼尊と同時に碧紗という女の子を探していることを聞いた。蓮は異国の將軍なので元から面識があり、家族構成と年を訊くと一致したので本人だ、という話になった。

会わせたいと思ったが、碧紗は太宰。多忙で暇がない。母親の蘭景も田畑を離れられなかった。

「やっと姉妹の感動の再会になる、ってわけ」

「会って留京が思い出せるといいな」

「そうだね」

ザバツ、と音をたてて水からあがり、赤い着物に袖を通す。

「新堂はどうするんだろうな……」

「私は同情で引き入れたくない。同情で、だなんて脆い決意でしかないからね」

華焰刀についた水滴を布で拭う。

「さ。中つ国に帰って寝よう」

「そうだな……て、おい！ 前！」

「あ、忘れてた。いつもの癖で」

蓮は着物を羽織っただけで、帯でとめていなかった。苦笑いしながら着物を帯でとめ、二人の影は庭から消えていった。

第三章：仲間との食卓、家族の再会

「いったきまーす！」

聖良はこの日曜の朝を寮で迎えた。

部屋にもキッチンがあるが、個人で食わず、合宿の用に一階のリビングで皆で集まって食べるのが主流らしい。この日のメニューは五目ご飯、岩海苔の味噌汁、大きい皿にゴーヤーチャンプルと（航が海で捕って来たらしい）魚が盛られていた。よく沖縄のホテルで観光客に出す典型的な沖縄料理のパターンだが、今朝の朝食当番は七緒で、彼女は沖縄料理を好んで作るらしかった。

聖良はまず味噌汁を吸う。母親が作ったような、ほっとする味だった。

「今日はどうするんですか？」

「ん、異国の観光を」

「けっ。名字と文字が同じだから！」

「虎堂。デザートいららないなら、そう言いなさい」

七緒が航からデザートのプリンをさっと奪い取る。

「いえいえ！　いります！　すみませんでした異さん！」

プリンの返却を乞う航に、くすりと聖良は少し笑う。

「ここにいる人全員異国出身だし。なんてったって一番私の顔がきくからね」

「どうやって行くんですか？」

「私なら華焰刀を使って。空間に一時的に道を切り開くんだよ。四天士の武器なら出来る」

七緒が昨日『華焰刀で送る』と言った意味がやっと理解でき、聖良は一人で頷く。

「私にも出来るのでしょうか？」

「感覚掴めば簡単だよ」

「いいよね、四天士は。関所行かなくても剣でツイ、だけだから」

仁史がゴーヤーチャンプルーを食べて言った。

「西園寺先輩はどうやって行くんですか？」

「僕らは関所と呼ばれる高天原と中つ国を繋ぐ場所まで行かなきゃならないんだ。幸い、ここからは近いけど。他の人から聞くと、遠い方が多いんだってさ」

「七緒先輩が送ることは出来ないんですか？」

「出来るけど、五帝や四天士以外を送るとなると、発動者にうんと負担がかかるから。よっぽど急用じゃない限り送ってもらったりしないよ」

「……生徒会の後、皆を華焰刀で送った直後に過労で倒れたこともあったな」

敏希が五目ご飯を食べる前に言う。

「あったねえ。十二月のことだったっけ」

よく覚えてたね、と小さく返答すると、七緒は茶碗を持ってご飯を口に掻き込む。

「確か原因は虎堂がゲームばっかやってるからー、だったっけなー？」

「う……」

七緒が箸を持っていないほうの手を顎に当てながら航の方に視線を向けると、魚の身をほぐしていた航の箸を持っている手が、凍ったようにぴたりと止まった。

「その上、コード抜いても抜いても戻して続けてたしな」

「うう……」

追い討ちをかける敏希の言葉に、どんどん沈んでいく。

「ホントだよ。勤労感謝の日生まれなんだから、もうちょっと航には働いてもらわないと」

「オイコラ仁史！ 誕生日は関係ねえだろが！」

しかし三人は航の抗議をあっさり聞き流して、延々と航のサボり癖を聖良に話し、後半に差し掛かると、さすがの航もげっそりしていた。

「さーってと。ごちそうさま。私は行く準備するから」

七緒は自分の食器を片付けて、階段を上って自室に戻って行った。

「……異の顔色、最近悪くねえ？」

いきなり七緒を心配する発言をしたのは、意外にも航だった。それに答えたのは、敏希。

「夏の合同合宿、来る人が人だからな」

「んあ？ 誰か知り合いがいんのか？」

「煌^{こうりん}燐学園運動部総部長、宗^{そほういんせいや}篷院晟夜。宗篷院家の当代当主」

「あの名家中の名家！？」

航が口の中にご飯を入れながら驚いた口調で言った。聖良は驚いて箸を落としそうになる。

「そう。ちなみに異家は宗篷院家の最下級の分家だ」

「階級があるんですか？」

「ああ。よくわからないけどな」

敏希は味噌汁を飲み干す。

「で、何か家の事で異と関係はあるの？」

「家のことじゃない。宗篷院は七緒の好きな人だ」

『マジで！？』

仁史と航は声を揃え、聖良は声こそ出なかったが、口を開けて驚いた。

「じゃあ嬉しいことなんじゃないの？」

「家の階級で七緒は宗篷院に声をかけられないらしい。……複雑な思いなんだろうな」

三人は納得して頷いた。

「ちなみに今回参加する部の一つ、剣術部部長は宗篷院の双子の妹らしいな。暁^{あけいろ}、と言ったっけな」

敏希は茶碗の最後のご飯を口に入れ、立ち上がって自分の食器をキッチンに運んでかたした。

「早く食べろ。そろそろ出発する」

聖良達は食器を片付け、私服に着替えると外に出た。

三人は高天原の服装なのか、古代中国の官のような服装をしている。

「用意はいい？」

「あ、はい」

「魔物が出るんじゃないかって、気にしてる？」

橙色を基調とした服に身を包んでいる七緒に核心を突かれ、聖良は頷く。

「気にすることないって。全然。そんな頻繁に出るものじゃないからね」

七緒はふんわりした声で囁く。

「じゃあ、俺達は関所に行く。向こうの異国城下町で会おう」

と、敏希が言うと、三人は背を向けて関所へ向かっていった。

「ゆうじょ 揖恕ね。わかった。……さてと」

七緒は腰にさした鞘から、本当なら銃刀法違反だね、と冗談を言っ
て華焰刀を抜刀すると、横に一閃する。軌跡に赤い線が表れると
みるみるうちに開いていき、赤い空間、あるいはトンネルが出来た。

「ここ通るんですね？」

「うん。行こう」

七緒が先に入り、聖良はおそろおそろ足を踏み入れた。段差はなく、
入った瞬間少しだけ耳鳴りがした。歩いていくうちに前を歩く
七緒の髪は緋に染まり、蓮となる。それを見て聖良も自分の髪を見
ると、蒼く染まっていて、星来になっていた。

もう何歩か歩くと、赤い空間が濃さを増し、増したかと思ったら
一気に晴れ、中つ国ではない景色が表れた。

——高天原に到着したのだ。そこは、どこかで見た風景。高天原
で最初に見た風景。希共。

「え？」

待ち合わせは揖恕という場所のはずなのに。

星来は思わず、蓮の顔の方を見た。

「一度、星来と話させたい人がいるから」

「蘭景さん、ですか？」

星来は朱夏と一緒にいた、あの女性のことを思い出した。

「そう。こっち」

蓮は一件の家に向かって進んで行く。絶対にこちらの母親だから、という理由だからだろうが、星来は認めていなかった。行く事を拒もうとしたが、蓮には両親がいない。拒否なんてしても蓮は説得してでも行かせるだろう。星来はついて行った。

一軒の家の前で止まると、蓮は戸を軽く叩いてからを開ける。中では蘭景が一人で朝御飯を食べていた。

「食事中すまない。星来をつれてきたんだが」

緋尊になったせいかな言葉遣いが変わった蓮は蘭景に声をかける。

蘭景は手に持っていた食器を置き、頭を下げた。

「そんなことはございません。……すみません。ありがとうございます」

「私は外にいるから。二人だけで話すといい」

蓮は星来の肩を軽く叩いて外に出て行った。

残された二人に流れるは、沈黙。星来はとりあえず会釈してから縁に座った。

「星来、ね……」

「はい……」

どう言葉を繋げればいいかわからなかった。母だと認めていないのは確かだが、それを態度に示して傷付けるのは嫌だ。とにかく、目だけは蘭景に向けるようにする。

「貴方がいなくなった時はあんなに小さかったのに……」

蘭景は星来に近寄り、成長を確かめる様に見つめる目はうるんでいた。

「よく毎朝ご飯を食べた後、すぐ碧紗と田まで走って行って、帰って来る度に泥だらけに……覚えてるかしら？」

「あ、すみません。覚えてないんです……」

「そう……」

笑顔で返したが、蘭景は微かに溜め息をついた。しかし蘭景を傷つけないように覚えている、と返したところで、どうやって会話を続けられるのか。

「星来。これからどうするの？」

「七緒先輩、じゃなくて蓮さんに異国の首都を案内していただきま
す」

「碧紗がいる町ね」

「あ……」

国のことを説明してもらう時に七緒が異国の太宰は蒼尊の姉、と言ったっけか。あの四人が全員異出身だから、という理由の他にもこれも狙っていたのだろうか。

「王宮には行くの？」

「蓮さんに訊かないと……」

「もし行けるようだったら蓮様に頼んでくれないかしら？」

心から乞うように子を思う母親の目で星来に言った。

「はい。私も一度会ってみたいので」

「お願いね。でも、やっぱり覚えてないでしょうね……」

「どういう意味ですか？　もしかして記憶喪失とか……」

そこで星来ははっとした。碧紗が自分の姉なら。自分が碧紗の妹なら。姉妹で記憶喪失になっていることになるのではないか。

「そもそも、どうしてこんなことになったんですか」

「もう、十六年になるわね……」

蘭景は記憶を辿り、語りだした。十六年前に賊が村を襲ったこと。逃げる際に碧紗は崖から落ち、はぐれてしまったこと。逃げた先の砂浜で星来は皆蝕乱狂を発動し、星来も行方がわからなくなってしまったこと。そして仕舞いに、碧紗は豪商の家に拾われていて、その時は崖から落ちてしまった時によるものか、記憶がなくなってしまうていたこと。

星来には前にあったような、言い表しにくいが、まず初めて聞く

感じがしなかったのは確かだった。

「そう、なんですか……」

「十六年間、ずっと願っていたわ。いつか帰って来てくれるようにと。朱夏様と蓮様はずっと探してくださったのよ」

「蓮さんも？」

「將軍職は決して楽ではないのに、ねえ。あの方についていくのよね？」

「はい。中つ国でも先輩ですし」

「蓮様なら安心だわ。將軍職に就いておられながら、とてもお優しい方だから。異国中の女の子の憧れになっているほど。さ、そろそろ行きなさい」

「はい……」

星来は立ち上がる。その時蘭景は、星来、と言って一度引き留める。

「貴方が私を母親だと思ってくれなくてもいいわ。子を二人とも守れなかったのだから、私にもう母親の資格はないわ。でも、私は高天原で一番星来が大好きよ。それだけはわかって」

星来は頷く。しかし、その言葉をきちんと受け止めることが出来なかった。母親と思えていないから。

罪悪感を感じながら、星来はそれから逃げるように外に出た。

第三章：異国での対面、迫る時間

希共から異国首都、揖恕に続く、丘陵に敷かれた道を星来と蓮の二人は歩く。遮断物は殆んどなく、風は流れるままに吹く。高天原の国名の由来は八卦からきていることは前に教えてくれたが、異という字は風を表していることを蓮が付け加えとして教えてくれた。

「sonで、東国、震は雷を表すから雷を操る」

「じゃあ南国の字は火を表すんですね」

「そ。ちなみに離ね。北国の坎は水を表すから北の四天士は水、西国の兌は沢を表すんだけど、これは特殊で西の四天士は重力を操る」

「でも、私は雷を操れません」

星来は俯く。それを見て、蓮は星来の肩に手を添えた。

「三途門を変に通ったから能力が引つ込んだんじゃない？」

事実、私も星来を探すのに近づくまでわからなかったし」

「どうやって操ったりするんですか？」

「説明は難しいね。歩きたいと思えば足が前に出るように、炎を出したいと思えば手から湧く。何て言ったらいいのかな。説明が上手い久遠くおんなら説明出来るかも」

「クオンって、四天士はくのみにこの一人ですか？」

「西の四天士、白尊はくのみことの久遠。銀髪と白に限りなく近い薄茶の眼を持つ。良い奴だけど悪い奴。何年か前に私が坤に行った時に仲良かったんだ。今度会ったら紹介しなきゃね」

蓮は微笑む。

「あ、そういえば……やっぱり髪と目、目立ちますよね」

「目立つね。でも揖恕の人は私で四天士は見慣れてるから気にしないと思うけど、蒼尊は十六年前に行方不明になったことは有名だからわからないかな」

「囲まれちゃったりするんでしょうか？」

星来は街に現れた有名人に人が群がる光景を想像した。一方蓮は

また微笑む。

「それはないかな。視線は集めるだろうけど。どうしても気になったら私がなんとかするから。それもあって、さっき緋炎から降りたんだ」

希共を出て山々を越えるまで二人は緋炎に騎乗していた。草原地帯になって緋炎から降りたのは、もし万が一、町の近くで飛来するところを見られたら目撃者は町人を集めて、よく見んと自然と囲まれてしまう。

なるほど、と星来はやっと納得した。

「でも降りるには早すぎたかな」

「いえ、こういうところ歩くの嫌いじゃないです」

「風籟島にはこういうところないからね」

風籟島は世界一新しい島。出来上がった時から、まるで人間の為に用意されたかのように環境が異常な程整っていた。それに付け加えて、人間が長年培ってきた高い文明により、ものの十年と少しで昔から人が住んでいたかのようになった。田舎と都会がうまく混ざりあったような雰囲気だが、開発のしすぎ、と言うべきか。畑を除いてかつては所々にあった広い草原はなくなってしまった。

それからまた少し歩くと巨大な町が見えてきた。

「あれが揖恕。敏希達が入口で待っていてくれるはず」

「原瀬先輩達もこちらの名前がありますよね。なんて言うんですか？」

「向こうから言ってくれるよ」

揖恕は建物の殆んどが漆喰で固められているので全体的に白く、比例して明るい。明るい色の石畳も星来にここは風籟島でないことを更に強めた。

蓮はキョロキョロと辺りを見回し、何かを見つけて大きく手を振る。

「こっち！」

蓮がやや大きな声をあげると、三人の青年が駆け足で近寄る。高天原で会うのは初めてだったが、星来には誰だか少し時間がかかったが、わかった。なぜなら中つ国で見た容姿がそのまま成長したようだったから。

「先輩、達？」

「おう。随分遅かったんじゃないか？」

「希共から来る途中歩いたから。ほら、高天原で会うのは初めてなんだから名乗ったら？」

「はいはい」

一人が星来の方を向く。顔からして中つ国では航だろう。

「俺は姓は蔡、名は由宗、字は堯宗。中つ国では虎堂航。異国中級軍旋風將軍。分かってるだろうーけど高天原では字で呼べよ」

「こんなんで將軍になれるのが不思議」

蓮がぽつりと呟いた。

「うっせ！ ほら凌雅！」

「姓は扇、名は澄峰、字は凌雅。あちらでは原瀬敏希。上級軍疾風將軍兼信官長」

「信官？」

「軍政を司る官。凌雅はその長。異では私のような総將軍が兼任することが多いけど、私は緋尊でそっちの務めもあるから凌雅に代わってもらった。ほら次」

「僕は姓は姜、名は維照、字は斗暉。あっちじゃ西園寺仁史。下級軍清風の將軍やってるけど、医療に回る方が多いかな」

「よし。皆終わったね。じゃあ私も改めて……」

蓮はくるりと振り向く。

「改めて言うね。私は姓は綜、名は李雪、字は蓮。中つ国では異七緒。異三軍総將軍。そして当代緋尊。よろしくね、星来」

「あ、はい！」

「星来も一応自己紹介したらどう？」

「あ、そうですね、えっと姓は……」

「ちなみに瑞^{ずい}ね。星来の姓」

蓮が優しく教えた。

“瑞”。それが自分の姓。

「はい。えっと、姓は瑞、名は星来で、字はまだないんですけど、中つ国でもセイラなので名で呼んでください」

星来が照れながら微笑む。知っている人にこんな風に改めて自己紹介するのは中つ国ではまずやらないだろうし、くすぐったい感じがした。

「……で、どうでもいいことなんだけどさ、僕ら相当視線集めてるよ」

「へ？ あ、ホントだ。正直どうでもよくないね」

蓮に言われて星来も辺りを見回すと、自分達が道行く人々の大半の視線を集めていた。大層な身分の人達がいるからかもしれないが、蓮の話が本当なら視線を集めているのは星来の方だろう。

見兼ねた蓮はパンパンと手を叩く。

「はいはい。見世物じゃないんだからそんな風に見ないの！」

それでも視線は減らない。

「目が悪くてこの人の髪が蒼く見えるんじゃないかって思ってる人。この人は確かに蒼尊、瑞星来だ。それでも信じられないなら見るのをやめて周りの人にも訊いてみなさい。二人以上、蒼だって言ったら素直に信じなさい。まさか集団で幻覚をみることはないだろうから。いい？ わかった？」

一瞬の沈黙の後、ドツと笑い声があがる。嘲る時のそれではなく、談笑した時のそれ。

「蓮様には敵わないなあ」

「ほらほら。蓮様がそういう風に見るなと仰っているんだ。散った散った」

町人が口々に言うのと、それでもまだちらちら見る人がいたが、断然少なくなった。これは蓮に人望が多い証に違いない。

「ごめんね。一部の人は死んだと思ってる人がここにいるもんだから」

「いえ、いいんです。蓮先輩は皆から好かれているんですね」

「魔物が出たと聞けば真っ先に飛んでいく勇敢なところもあれば、どんなに身分が違う者であろうとも見下したりしないからな」

蓮の武勇伝を語る凌雅に、蓮は軽く肘鉄砲を食らわせた。

「凌雅。余計なこと言わないの。あと、星来。高天原では“先輩”なんてつけないんだよ」

「えっ。えっと、じゃあどうすれば」

「硬くならなくていいよ。呼び捨てでいい」

「そういうわけには……」

「中つ国じゃ先輩と後輩の関係だけど、高天原では四天士同士という関係でしかないんだから。ね？」

「はい……。蓮、でいいんですね」

「いいんだけど、言葉遣いもタメでいいよ」

星来は目を見開いた。

「そんな！そこまで先輩に失礼な……」

「ううん。そんな気を遣わなくていいよ？」

「蓮。星来にはタメで話すのがかえって気を使うんじゃないかな？斗暉が助け船を出し、星来は胸中でほっと胸を撫で下ろした。

「ああそうか。ごめんね。じゃあ好きに話して。とまあ、こんな話はこれくらいにしといて。当初の目的は異国案内なんだから案内しなきゃね」

「おーいおい。総將軍たる者がそれくらい忘れ……ぐはあっ!？」

星来の目の前で蓮の緋髪が少しふわりと浮いたかと思うと、左足を軸に回転し、右足の蹴りが堯宗の腹に直撃した。

「戦闘の専門家である將軍職に就きたる者がこれくらいの不意打ちに対処出来なければ困る」

「お前の不意打ちに対処出来る奴なんて滅多にいねーよ！　いってえ……」

呆氣にとられた星来に斗暉は念のため解説した。

「中つ国じゃ同級生同士だけどここじゃ軍人、ましてや將軍同士だから、突っ込みにも容赦ないんだ」

「すごい、ですね。えっと……」

「僕も呼び捨てでいいよ。蓮のせいかわからないけど、四天士にさん付けされるのはどうも感じが悪くて」

斗暉が話していて聞こえなかったが、また堯宗が要らぬことを言ったらしく、また蓮の蹴撃を受けていた。

注文した武器を受け取りに行った三人と別れ、蓮と星来は揖恕の中心に進んだ。普通なら王宮は首都のほぼ中心にあるのだが、大きな過ぎる建造物で町の巽の象徴である風を遮るのは良くない、と王宮は揖恕の一角に建造されたのだ。だから、正確に言うと二人は揖恕を縦断し歩いた。

「巽には風車が多いですね。ここに来るまでいくつ建っていたか……」

「風の故郷とも言われてるから。巽の反対側の国、乾で吹く風も巽で生まれたものだ、と言われるくらいね。特に……ああ、あれ」

蓮が指さした先には学校のグラウンド半分くらいの広さはある広場があり、その中央には噴水が設置されていて、さらに噴水の中央には神々しい石像が立っている太い石柱がそびえ立っていた。

「風源の塔って言うんだ。塔の上にある石像が高天原の守護神、風奏真君ふうしんくん」

星来は石柱を見上げると、狼とも麒麟ともとれる像が前肢をあげて勇ましく姿をいしていた。

「守護って……五帝とですか？」

「五帝が壁を作って守り、風奏真君は戦って守る感じ。風脈に乗って世を回り、姿は余程のことがない限り現さない。巽は風の国だからここで生まれたんじゃないかって言われてる」

「蓮は会ったことが？」

「ないよ。五帝ですら百年に一度会うか会わないか程度らしいし」
蓮も石像を見上げた。

「人語も喋り、歌うことも出来るらしい。その歌声はあらゆる穢れも浄化させるらしいから一度聞いてみたいもんだけどね」

「すごく詳しいんですね」

星来は視線を蓮に向けた。

「だって、寂しいと思わない？ 独りで世を駆け巡り、独りで戦うなんて……」

「蓮？」

「おっと。早く王宮に行かなきゃ。碧紗に昼前には着くと連絡入れてるんだし」

蓮は再び歩き出した。

さっきの横顔が寂しげで、妙に印象深かった。

——巽王宮。

星来は極度に緊張しながら蓮の後をついて行く。途中蓮は女官を呼び止めた。

「留京は今いる？」

「はい。たった今、使節の方々との対談が終わったところですから、自室にいらっしゃいます」

礼を言うと、星来を手招きし、ある扉の前に立たせた。

「ここに碧紗がいる。字は留京だけど。星来が姉と認めるか認めないかは自由だけど、碧紗は記憶喪失で本当の家族を覚えていない。だから思い出させるだけでいいから会ってくれない？」

「私に会うくらいで思い出すでしょうか？」

「確信はないけど、望みはある。さあ」

ギィ、と音を立てて蓮は扉を開けた。

王宮の名に相応しい、広い部屋だった。壁の代わりに本棚がある、

と言っても過言ではない程の本の量。逆に寝台や机は飾りに見えた。その中でじつと窓の方に向いて立つ、女性の姿。振り向く気配は見受けられない。

「気が付かなかったんでしょうか？」

「とりあえず近くまで行くか」

星来と蓮はなお窓に向いて立つ碧紗に近寄る。真横に來ても振り向いてすらくれない。

呆れた蓮は碧紗の肩を叩く。

「碧紗！ 何立ったまま寝て……！」

強い違和感に蓮は目を見張る。

（これはっ！？）

シュッ——！

蓮は後ろに飛んだ。後ろにいた星来が見たのは、服に横線の切り口を付けられた蓮と、鋭い形相で剣を振り抜いた碧紗。

「おいおい……ちょ、待てよ碧紗！ いくらなんでも冗談が過ぎない！？」

碧紗は眉一つ動かさず、再び剣を振るう。蓮は身を後方に回転して避ける。

「どうして！？ ということですか！？」

「ヒス持ちじゃないし。何かがおかしい。ここじゃ不利だし外出るよ！」

蓮は華焰刀を抜き、降り下ろされた剣を弾くと、窓に向けて炎を放ち、穴を開ける。それから蓮は星来を脇に抱えて飛び降りた。

「ひゃあっ！」

「仕方ないでしょ。廊下行ったら官まで巻き添えになるし」

蓮は落下の速さのわりには、布のようにすんと地に降り立った。「て、え？」

地に、ではなく殺気の中にとっただ方がいいかもしれない。

四方を取り囲む、双頭の狼、翼のある虎、そして荒鷲。
「一体、何が起こってるんだ？」
魔物は、じりじりと近付く。

第三章：影の敵、異国の初戦・前編

はあ、と厭きた重い溜め息をついて星来を降ろしてから蓮は鞘から華焰刀を抜いて構える。

「頼むよホント……」

「あの二種は？」

「双頭の銀色の狼が嶺河^{ざんが}、白黒の縞に血色の翼を持つ虎が兇忤^{くうこ}。前者が中級、後者が上級魔

牙を剥き出しにして唸りながら一頭の嶺河が突進する。蓮は片方の頭に華焰刀に噛みつかせ、もう片方の頭が口を開くと顎を蹴りあげ、突き放した。

「雷使って結界張れる？」

星来は伏し目がちに申し訳なさそうに首を横に振る。

「じゃあ私から離れないで。紅虹じゃなくて、なるべく炎で戦うから。消炭になっても知らないよ」

中つ国で蓮が一瞬で魔物を炭にした光景を思い出し、ぞっとしながら頷く。

その直後、魔物達が覆い被さる津波のように地はもちろん、空からも襲う。それでも蓮は涼しい顔で軌跡に火の粉を振り撒きながら華焰刀を振るう。

「そーんじゃ、久しぶりにやりますか、と」

蓮は身を屈め、剣を横に一線する。その軌跡から三日月型の紅虹が斜方に向かって飛び、一匹の荒鷲に当たると、ぶわっと迫力ある爆風を起こしながら爆発し、星来と蓮を避けて炎が包んだ。あまりの暑さに熱風に少し撫でられただけでじんわり汗が出る。

「すごい……」

星来が感嘆している一方で、蓮は手で爆風でなびく髪を押さえる。「攻撃範囲も消費する体力も凄まじいから、あまりやらないんだよね。おまけに確かに魔物は一気に討滅できるけど、人も巻き込んだ」

やうし」

蓮は剣を振り下ろす。草原に積もった魔物の灰。

——それらを踏みしめる、生き残った多数の魔物。

二人は驚きの色を隠せなかった。特に、蓮は。

「あれにやられなかったのがいたなんて……」

「そんなはずは……。でも」

蓮は右掌に蜜柑くらいの大きさの火の玉を作る。

「ちよつとこの状況は不利だから逃げよう。ここじゃ王宮を気にして戦わなきゃならないし、灰が目に入る」

蓮は火の玉を一匹の荒鷲に向けて放つ。火の玉は蜘蛛の巣のように広がり、荒鷲を捕らえて炎を纏わせた。暴れ、もがきながら火の鳥と化した荒鷲は、荒鷲のものではない甲高い声で鳴くと仲間につかり、火傷を負わせながら二人の前に舞い下りる。

「乗って。この火は火傷しないから」

「魔物を操る術、ですか？」

「この火が魔物の体を焼け切るまではね」

蓮の後に星来も背に乗る。炎が脚を舐めたが、熱くなく、何かが触った、くらいの感じしかなかった。

火の鳥は熱風と火の粉を散らしながら飛び立つ。飛行可能な荒鷲と兇忤が反転して追ってきた。

「私達を狙ってるんでしょうか？」

「……違うと思うけど」

「え？」

蓮は返答しないで立ち上がり、体ごと後ろを向いて、その回転を利用してながら剣を振り抜いて三日月の紅虹を放つ。群れに命中すると、凄まじい爆音と共にそれに値する爆発が起こる。

「魔物の分際で、私達を追うな……！」

灰になって声が聞こえるはずのない魔物に怒鳴ると、蓮はへたんと座り込んだ。

「蓮！」

「はっ、はあ……。月紅火^{げっこうか}ってホントに負担が大きいんだから」

蓮は息を切らせながら華焰刀を鯉口を鳴らしながら鞘にしまった。

「凌雅達と合流しよう。一旦」

火鳥を駆り、そんな距離のない揖怱までの間を飛ぶ。

（力が、あれば……）

疲労しきった蓮に寄り添いながら星来は思う。

蓮が言っていた『不利な状況』とは、きっと自分がいたというのも入るだろう。せめて、力があれば足手まといにならないのに。援護できるのに。守れるのに。どうしてこんなに無力なんだろう。

（あ、れ？）

力を望んだが、それはなんの“力”なのだろう。魔物と戦うなら、やはり蒼尊の力。と言うことは、自分が蒼尊であることを認めたに等しい。

——自分は、何がしたいんだろう。

（違う。私は普通の人間……）

火鳥が下降し、足が地に着くと二人は背から飛び降りた。その足音と共にシュツ、と火鳥は急激に小さくなり、消えた。火の鳥を蠟燭^{ろうそく}の火と例えるなら、荒鷲の体は蠟^{ろう}の役割をしていたのだ。

「はあ……」

蓮は浮かない表情で吐息をつく。

「大丈夫ですか？ 魔物のことで……」

星来の問いかけに蓮は浮かない表情のまま首を横に振る。

「碧紗のことで。どうして……」

「あ、星来！ 蓮！」

斗暉が二人に向かって大きく手を振る。その後ろには凌雅と堯宗。近寄り、何か話し出そうとしたが堯宗が蓮の顔色の悪さに怪訝な顔をした。

「どーした？ 王宮で感動の再会を果たしたんじゃないのか？」

「感動、はしなかったね。というより程遠かった」

「？」

「報告することがある。緊急で。また堯宗のそこ、借りていいかな」
訝しく思いながらも、堯宗は頷いた。

堯宗の家、蔡家は宿を営んでいて、四人の会話を聞いたところによると機密会議から雑談まで様々な対話をする時によく利用するらしい。

四人はある建物の前で足を止めた。中華の雰囲気がある料亭の感じがする立派な建物。

「ここが堯宗ん家。今度から星来も顔パスにしないと。って言うてもその髪と目でどうにかなるか」

軽く笑うと四人は中に入る。星来はもう少し外装を眺めてから入った。

「お帰りなさいませ。堯宗様。蓮様もよくぞいらっしやいました」
玄関掃除をしていた女性が雇い主の子息を見て手を休め、頭を下げる。

「おう。いつもの部屋、空いてるか？」

「もちろんでございますとも」

その意外さに星来は女性と話し始めた蓮の代わりに斗暉にこっそり耳打ちする。

「ここでは、お坊っちゃまなんです」

斗暉は微笑んで頷く。

「上流の宿だしね。中つ国の僕もこんな感じだけど」
「……」

中つ国の斗暉、即ち西園寺仁史は天下の西園寺コンツェルンの御子息。中つ国では堯宗と同等以上の扱いを受けていることだろう。
聞く相手を間違えたな、と密かに後悔しながら星来は案内役の人に導かれる四人についていった。

案内された部屋は特に最上級の部屋で和式だった。入って早々、蓮は寝台に仰向けに寝転んだ。

「ふー。やっぱりここは癒されるね」

「李雪。話を先にしてから寝ろ」

「私はすっごく疲れてるんだから、そこは目を瞑ってよ」

ごろりと転がって、蓮は横向きになった。

「話をすれば弁明にもなると思うが」

「はいはい。凌雅のバカー」

蓮は少々寝台から降りると椅子に座る。他四人も卓子テーブルを囲んで椅子に座った。

「で、さっき言ってた『感動の再会じゃなかった』と言うのはどういう意味だ?」

「感動どころか最高の驚愕と落胆だね。碧紗、誰かに操られてた。顔合わせた直後に斬りかかってきた」

まさか、と三人は口を動かす。

「碧紗は運ぶこと以外剣を持ったことがないって言ってた。剣の稽古をしていたか、って聞かれたら、なおさら。なのに凌雅と同じくらしいの腕だった。それにあんな碧紗の殺気立った目、見たことない」

「留京の親友が言うんだ。間違いない」

斗暉は呆然としてか落胆か、あるいは両方の溜め息をつく。

「久しぶりだね。そういう愚かな術者。異国支配でも狙ってるのかな」

「もう一つ、あるんだけど」

碧紗を操っている犯人探しとして話を進める前に蓮はもう一つの異変を話す。

「魔物に待ち伏せされた。予め」

「はああ!?!」

三人は碧紗の話より驚く。星来が聞いていると前者の方がよっぽど驚くべきことに思えるのに、どういふことなのだろう。それを目で訴えると斗暉が答える。

「魔物には待ち伏せする習性はないんだよ。人が渡り鳥のように決まって季節に飛び移動する習性がないように。ふらふら歩いて視界に入った魔物から殺していく、はずなのに」

「それ、本当なんですか？」

「うん。少なくとも僕はそういうところを見たことないし、書物にも載ってない」

不審に思えるように努力してみたが、やはり無理だった。

「それより、留京女史のことも気になるな」

「……信じたくないんだけど」

俯いたまま、蓮がそつと口を開く。

「裏で糸引いてる人がいる、でしょうね。操るって形で」

「術者、か。しかも高等な」

堯宗の一言に、蓮は顔をあげて頷く。

術者。言葉からしてそのまま。術を使って様々なものを操る者。そのくらいは星来にも理解できたのと同時に息を飲む。目的は蓮を殺すことなのだろうか。それとも国の支配か。何れにせよ恐ろしい。「でもさ、蓮。僕たちが王宮を出る前に話した時はいたって普通だったよ。異変を見抜く力は鋭い堯宗ですら、違和感を感じなかった」「そういう力がすごいのは認めざるを得ないから……じゃあ、術者に会ったのはその短い間……」

蓮を始めとする四人には全く心当たりがない。異王宮に勤めている者に術が使える者はいないし、総將軍と信官長のおかげで警備はしっかりしている。不審者が入れば早急に気付く。

星来がふと、記憶を辿っていくうちにあることを思い出した。

「そういえば、王宮の人が碧紗さんを訪ねる時に『施設の人との対談が終わった』とか言ってませんでした？」

あ、と三人も何か思い出したらしく声をあげる。

「確かに。僕達と話していた時も来客がいる、って呼び出されてた」「じゃあ、今すぐ王宮で外交の司、忠官に聞けばわかるんじゃない？」

「ダメ。危険がある」

何でだよ、と堯宗が不満そうに蓮に怒鳴る。

「今王宮の人全員が操られているかもしれない。全員が碧紗と同じくらいの腕を持つ状態になっていたりしたら、即刻黄泉の国行き。違うとしても聞かれて答えたところを術者が見てたら答えた人は処分されるかもしれない。余計な人を一か八かで巻き込むことは出来ない」

將軍仲間の三人は言葉を失った。

蓮は過去、本人曰くつまらない意地を張って二人の仲間を巻き込み、失ったのだ。彼女の精神からして、どんなことを言っても巻き込む可能性が半分を占める方法は聞き入れてくれないだろう。なかなか四人の会話についていけない星来も中つ国で凌雅の言った蓮の過去を思い出し、だから、と納得した。

「それに、外には月紅火二発でも処理しきれなかった魔物がいるんだし」

その時凌雅が怪訝な顔をした。

「どうしたの？」

「月紅火は威力が強く、強大すぎる力故に戦闘用より寧ろ威嚇用だ、と言えばお前にもわかるだろう」

「……私としたことが。そんなことにも気付かなかったなんて」

蓮は顔に手を当てた。

「二発も放って逃げ出す奴は一匹もいなかった。月紅火は狂気の内にいる者を威嚇し、正気に戻す。例え操られてるとしても。……なんで気付かなかったんだろう」

第三章：影の敵、異国の初戦・後編

蓮が言っている意味がわからず、星来は斗暉に目で助けを求める
と、快く答える。

「術者は稀にみる、相当の使い手ってこと」

自分の失態に、蓮は憂鬱さ溢れる深い溜め息をついた。

その一方で、星来は肩をすくめた。

（……わからない）

正直なところ、星来には事の重大さがいまいち実感が湧かない。

蓮達は魔物と戦うことは日常茶飯事で、戦闘中は戦うだけ、
とは思わないだろうが、星来には剣道の試合と違い、常に殺意を攻撃
という形で向けてくる魔物と戦うことは怖くて仕方ない。術者と戦
うことくらい慣れてしまっているのではないか。それに蓮のような
強い人が何を恐れるのか。

「星来。帰っていいよ。僕達はこれを片付けないと」

斗暉が星来の胸中を察してか、優しく言う。それに蓮も付け加える
「うん。私が星来と約束したのは『異国の案内』。案内は出来なく
なっちゃったし、もし向こうの標的が私なら、関わって巻き込まれ
ない保証はないから」

星来は即答するはずだった。帰ります、と。なのに口をその形に
開きかけて、自分の何かが知らず知らずのうちに言葉を変えた。

「……残ります」

自分でもこんなことが言えた自分に驚いた。負けたような気がし
たが、勝ったような気もする。

その返答が四人にとって予想外だったらしく、少し驚きの色を見
せた。

蓮は真剣な表情で訊ねる。

「何が起るか、わからないんだよ」

「何かあったら守る、と言ってくれたのは蓮じゃないですか」

だから残るなんて言ってしまったのか、という咄嗟の解釈の後、生意気な発言に対する後悔が込み上げた。さすがの蓮も怒るだろうと覚悟していたが、当の本人はその気はなく、寧ろきょとし、後ににっこり笑った。

「そうだね。そう約束したからね」

ぽん、と星来の頭に手を添える。

「私の可愛い後輩を泣かせた奴は、全部ぶっ飛ばしてやるから」

「李雪。本当に……」

「約束を破るの嫌いなんだ。破られるのも。それに私の呼び名は“一騎当万”。半分にしても五千に値する力はあるでしょ」

「無茶苦茶な理由だが……約束を破るのが嫌いな仕方ないな」

星来は、ありがとう、と凌雅に向けて微かに口を動かすと蓮が話題を本題に変える。

「さて。どうやって碧紗の目を覚まさせる？」

「術ってどうやって解くんですか？」

「術者をこらしめたり、遠隔の場合、術発生源を壊す破壊型と、衝撃を与えて無理矢理正気を戻させる返戻型。今回は前者はわからないし、後者は無理そうだからどうしようもない」

蓮は呆れ返ったように吐息をついて頬杖をつく。

「つか、その前にどうやって碧紗に近付くかじゃねえ？」

「ああ。堯宗にしては賢明な意見だね」

「俺がお前より頭いいってことなんだよ！」

「ふーん。誰だったかな。中つ国では満十八歳、ここでは満二十八歳のくせに、かき氷が食べたいからってジュースの氷を噛み砕きながらシロップを飲んで……」

「わーっ！ その先言うな！ 言わないでください！ 私が悪うございました！」

直後に凌雅と斗暉の堯宗を見る視線が冷たくなった。

多分、その先は腹を壊した、という展開なのだろう。

「操られてるのが碧紗だけなら簡単なんだけど。外の魔物は私が片

付けて王宮内には凌雅と斗暉、できれば星来が突入してくれればいいから」

「俺は？」

堯宗は自分を指差す。

「揖恕が空きになったところを狙われちゃ困るから待機。付け加え、一人で勝手に行動する確率が一番高い」

硬直した堯宗を堂々と無視し、残り四人は話を続ける。

「蒼氷がいれば、なんとかなるんじゃないかな」

斗暉が独り言のように呟いた。

「緋炎は確か結界を張ることが出来たから、同じ守護獣なら出来るかも」

「それはいい、て言いたいところなんだけど」

一拍おいて、言葉を継ぐ。

「守護獣は誰のために在るか覚える？」

「あ……そうか」

「他人に張れないって言うんじゃないで。必ず中に主人、蒼氷なら星来がいらないと」

視線が星来に集まり、集めた方はたじろぐ。

「私、行くんですか？」

「まさか。危険すぎるしね」

とりあえず星来はほっとした。

「やっぱり蓮と緋炎が行くしかないんじゃない？」

「もう少し思慮をつけろ。堯宗」

凌雅は呆れた顔をした。それが馬鹿にしたような口調だったので、堯宗の目が若干細められる。

「外から魔物が入ってこないとは限らない。もしかしたら術者自身に来るかもしれない。そういう時に李雪が対応してくれないと困るのはこっちだ」

凌雅と堯宗の視線がぶつかり合うが、凌雅は間違ったことは言っていないので、すぐに堯宗は押し合いに負ける。

すると、疲れた、と言わんばかりに蓮は伸びをし、手で隠しながら欠伸をすると立ち上がる。

「念のため、緋炎を呼んでおくよ。私以外の人に結界を張れるか聞いて、ダメだったら拝み倒してみるよ」

「どこか行くのか？」

「部屋借りて軽く寝るよ。さすがに月紅火二発はマズかったっぽい」「あ、あの……」

出ていこうとする蓮を星来が呼び止めると、振り返る。

「守護獣って、どうやって呼ぶんですか？ それに今蒼水はどこに……」

「東の震国王宮で蒼帝・陽春の補助。特に用がなかったりするとそうしてる。守護獣を呼ぶのは念じるだけ。守護獣が思念を受け取ってくれるから」

日暮れ。空の色が紺青と朱の二色が分かれながらも見事に溶け合っている。陽はもう今の位置からは見えず、一番星が輝き始めている。

星来は宿を抜け出し、庭の丘に蹲うずくまるように座り込んでいた。庭と言っても揖恕の一角にあるせいか、平原まるまる一つ買ったのかと思っただけほど相当広い。

身を縮めるようにすると、横で微かに影を落とした者がいた。

「庭が気に入ったのか？」

星来が影を辿るように顔を上げると、自分を見下ろす凌雅がいた。「李雪に捜してくるように頼まれた。まさか揖恕の外に出たんじゃないか、と」

「そう、ですか」

星来は答えてから目を伏せた。

「悩み事か？」

凌雅のことだから、てっきりそのまますぐ帰ると思ったのに意外にも話を続けられた。しかも、いきなり核心を衝かれた。

ぱっとまた顔を上げた。目があうと、視線を逸らして口を開く。

「本心、どっちなのかな、って」

「言ってみろ」

凌雅が横に腰を下ろした。星来はなんとなく目は合わせたくない一心で顔を前に向けた。

「私、蓮が状況が不利だから逃げよう、って言った時に力が有れば戦えるのに、と思ったんです。でもあんな恐いものと戦いたくないし、私は蒼尊なんて立派な人じゃない……!」

横にいる凌雅は何も言わない。

——やっぱり、呆れられたのかな。

見捨てられた感じがして、星来が溢れた涙を袖で拭っていると、凌雅は立ち上がった。

「じっとしてると、ますます悩むぞ。体動かしてすっきりした方がいい」

腰にさしていた鞘から剣を抜く。

「え？ そんな、危ないんじゃない」

「これは疑似刀。形だけで切れはしない。お前も碧瑠刀を抜け」

星来は何をやらせるつもりなのかと驚いて、碧瑠刀の柄を握りながら凌雅の顔を見上げる。

「碧瑠刀は切れる剣なんですけど……」

「持ち主の意志がなければ切れはしない」

星来も渋々立ち上がり、碧瑠刀を抜刀する。刀身に夜空に増えだした星が纏ったように映る。

「そういえば、凌雅……原瀬先輩は弓道部主将ですよね」

「ああ、高天原じゃ射手の名家出身だからな。でも弓だけじゃ近くにいたのが反って仇になる」

中つ国の凌雅、原瀬敏希は弓道部主将であり、一年生の時に全国大会優勝した強者。そんな才があるのは高天原で実戦訓練している

からだと今知った。

近くにいたのが仇になる、というのは、矢は普通離れて射るもの。近くにいて射ることが出来ないことはないだろうが、難しいだろう。それに放ってからコントロールが効かないし、矢が尽きればそれで終わり。

「いいか？」

「はい。お願いします」

二人は同時に踏み出し、蒼い剣火を散らして二本の剣がぶつかり合う。四天士の運動能力は常人以上のはずなのに、押されているのは星来だった。

（すごい、剣圧！）

父親のように、がっしりした体格をしているわけではないのに。

星来は剣を弾いて距離をとる。凌雅の剣を受け止め、押しあっていた剣を握り締めていた両腕がびりびりと痺れる。おまけに一瞬の焦りで鼓動が速くなっていた。

（でも、負けたくない。毎日猛稽古してるんだから！）

「っだあああっ！」

よりしっかり握り締め、立ち向かっていく。

（やはり、弱くはないようだな）

『この前、部活を覗いたけど。強いよ。見間違いないじゃなきゃ、部長ですら打ち負かしていたし』

蓮からはこう聞いていた。大方これはお世辞ではない。

（しかし、決定的に足りないものがある）

星来は剣撃をひらりと横に避ける。体の均衡を崩したところを凌雅は後ろから剣を降り下ろす。察した星来は右肘で凌雅の手首を突く。

凌雅は思わず手を開いてしまい剣が宙に浮いたが、慌てることなく左手で掴みにいき、そのまま回すように振る。星来は対応の素早

さに驚きながらも身を振ってそれをかわす。

凌雅が剣を利き手に持ちかえると同時に星来は立ち上がり、袖についた草を払う。この動作を行う間もずっと警戒していた。

（強い。なんて、強い——！）

対処の素早さ。俊敏性。瞬時判断。身のこなし。総合して余程戦歴があることを物語っている。

今度は凌雅の方が接近し、仕掛けてくる。星来も身と気を引き締めた。

（隙を作ろうとしても、すぐ対処されるから、自ら作った僅かな隙を突く）

と、凌雅の姿が消えた。否、低く屈み、星来の視界から外れた。冷やかな上目遣いの双眸は蒼眼を捕らえ、斬撃を備える。

しかし、刀身はこちらに向かってこない。それどころか、もう一步踏み込み、星来の横を通り過ぎる。

（しまった……目的は背後をとること！？）

咄嗟に怯んでしまったが、動作には表さない。毎朝の稽古でそれを身につけた。動じないだけではない。瞬時の切り替えもできる。それでも凌雅の動作の方が速かった。凌雅は両手についてそれを軸に一回転、星来の足下へ蹴りをいれる。また均衡を失った星来は、今度は踏み留まることができず、尻餅をついてしまう。

「いったあ……腰打った……」

そのままの体勢で腰をさする。受け身がとれなかったほど、見事な不意打ちだった。凌雅の方は戦意喪失を認め、疑似刀を鞘にしまう。

星来は肩を落とし、さする手を止める。

（負けたんだ。私……）

それを意味するのは認めざるをえない自分の敗北。いくらなんでも圧倒的で呆気なさ過ぎる。全く歯が立たなかった。あれほど稽古しているのに。

「お前」

凌雅は星来に横顔しか見せないまま、静かに言い放つ。口調は父親が剣道の指摘をする時のと同じだった。

「稽古は相当数を踏んでいるな」

冷やかな口調からして、やはり誉め言葉ではなかった。

「だが、その最中に何を考えながら励んでいた？」

あまり考えずに率直な意見を言う。

「いつも父さんが相手してくれるから、勝ちたいて」

返答に直ぐには感想をつけなかった。沈黙に疑問を抱きだした頃にやっと続きを言う。

「訊くが、稽古は何のためにするものかわかるか？ それを踏まえ、勝つためには何をすればいいのかわかっているか？」

今度の問いは、よく考えても直ぐには返答できなかった。

（稽古の意味……）

稽古は強くなるために行うもの。勝つためには強くなること。稽古で負けても、それで得られる強さがある。

（あっ……そうか）

「そんなこともわからずに、強くなれるわけではない。強くならなければ、守るものも守れない」

目を伏していた星来に、抑えきれない何かが喉の奥から込み上げてくる。

悔しかった。敗けを認めた時よりも。

その時、手を叩く音が軽く二回した。

「はいはい。凌雅、星来をいじめたら蓮が怒るよ」

音と声の主は斗暉。

元々凌雅は星来を捜しに来たのだから、凌雅まで、と呆れ返って斗暉まで捜しに来たのだろう。

「蓮が呼んでたよ。明日のことで」

「すぐ行く。あと、星来」

凌雅は背を向けたが、顔だけこちらを向いた。

「守ると戦うってのは、ほぼ同義語。皆、守る時は何かしら何かと

戦っている。俺だって“守る”ならともかく、“戦う”だけじゃ、未だに恐いものがある」

そう言い残し、凌雅は宿に戻っていった。

「ったく。最後はキザになって。……ところで星来、もしかして立てないってこと、ないよね？」

尻餅をついた時のまま、未だに立ち上がってなかったことにやっとな気が、星来は慌てて立ち上がる。その際にふらついて、また転びそうになるところを斗暉が腕を掴んで支えてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「立てないってことはないんだね。じゃ、僕はすぐ戻るように言われてるから。星来も早く戻ってきてね」

時は手を放し、優しく微笑むと凌雅の後を追っていった。

(“守る”と“戦う”、か)

最初、高天原に来たとき、魔物と戦うのが恐くて恐くて仕方なかった。殺されるんじゃないかって。でもあの時、蓮を守りたいって思った。戦いたいって思った。その時に恐さはなかった。

——ああ、なるほど。これか。凌雅が言ってたのは。

凌雅も戦うだけなら恐いものがある、と言っていた。

——ねえ、凌雅の守りたいものって何？

知りたかった。凌雅のことが。常に蓮と戦う毎日を送る、凌雅のことが。冷ややかに見えて、優しい凌雅のことが。

——明日は皆と“守る”ために行くんだね。私も、皆の见ている世界を見たい。守りたい。だから、私も。

「蒼氷……」

星来は蒼氷を呼んだ。明日に備えるために。

この時、星来の中で今までなかったモノが生まれたのに。

——まだ、気付いていなかった。

第三章：守りたいモノ、始まりの目覚め・前編

星来は聞き慣れない鳥の囀りで目が覚めた。

風籟島にそんな鳥、いたっけな、と考えたが、まず自分自身が今風籟島にいないことに気付く。

（一日交代で朝、迎えてる……）

中つ国と高天原で交互に朝を迎えている。聖良の感覚では三日経っているが、実際には中つ国では二日しか経っていない。変な気分だった。

鳥の声をかき消す、朝から威勢のいい蓮達の声も聞こえる。

「いーのか？ 三人一斉で」

「構わないよ。どうせ魔物はそれ以上だし」

会話の内容から、早くに起きて庭で稽古を行っているのだろう。

星来は二階の部屋から窓を開ける。蓮が凌雅達と対峙している。蓮の手には華焰刀、他の三人の手には疑似刀ではなく木刀が。

（凌雅……）

星来の目は意識せずとも自然とそちらを向く。凌雅は木刀を片手に二人と共に蓮と対峙する。

「あ、星来！」

最初に気付いたのは斗暉で、こちらを向いて手を振る。蓮も気付いて振り向く。

「おはよう。星来。眠れた？」

「あ、はい。私もすぐそっちに行っただ方がいいですか？」

「来てもいいけど、来なくても全然構わない。来るとしても急がなくていいし」

「じゃあ、今から行きます」

こんな返事したのは、先輩達がいるのだからと言う気遣いではなく、ただその場所に凌雅がいるから。これは自分でもわかった。

「はい、りょーかい。星来がこっちに来るまでに今日の鍛練、終わらせちゃおーっと……」

暢気そうな返事だったが、次に行われた鍛練は三人が一斉に襲いかかるという、真剣勝負だったためか、表情は真剣そのものだった。星来は思わず感心して目を奪われる。

（おっと。こうしちゃいられないんだった。でも急がない方が？ま、いっか。歩いて行こう）

髪をすいたり軽く身支度を整えてから部屋を出た。

「よっし。今日も快調、快調っ」

星来が庭に出る頃には、四人、否、ほぼ蓮自身のみの鍛練は終わっていて、あとの三人は同時に攻撃を仕掛けるという有利な条件だったはずなのに、座り込んで肩で息をしていた。

「蓮！ お前毎度ながら手加減なさ過ぎなんだよ！」

「手加減の言葉も知らない魔物が相手の時は、そんなこと言わないのに？」

軽く嘲るか、挑発するように笑ってみせる。

「わーった。今度から魔物って呼んでやる」

「おっとお！ 足が大幅に滑ったあ！」

「いってえ！」

蓮は自分の背後にいた、あぐらをかいて座っていた堯宗を後方回転蹴りで腹から蹴り上げられ、一分だけ吹っ飛んだ。伏したままの堯宗の苦悶の表情が、その激痛を物語る。

「李雪……いくらなんでも、ここまでやると、死ぬんじゃないのか」

「平気だって。打たれ強さと骨の強度は私のお墨付きだから」

「総將軍閣下にお誉めいただき、光栄に存じます……」

腹を押さえながら、棒読みで堯宗が呟いた。顔を持ち上げると星来と目があり、視線で助けを求める。

「なあ、星来。あいつ、ひでえよな？」

大人しい子だから同情してくれる——と疑わず思っていた。

星来は気を使ったのか、視線がある程度あうようにしゃがんだ。

「堯宗って、そんなんで本当に將軍職を務めているんですか？」

一瞬、星来以外の四人には何が起きたか理解できなかった。

「あははっ！ やばい！ 傑作！」

蓮が体を二つ折りにして笑い、堯宗は完全に落ち込んだ。凌雅と斗暉の二人は、堯宗を庇うどころか、明らかに失笑していた。

「あ！ すみません！ とんでもないことを……」

星来は言った後で、自分はこういう発言をしてしまったのかを理解し、狼狽^{うろた}える。

「いいって！ あー、笑える。涙出てきた。斗暉。一応見てやって」

「もう。毎回仕事増やさないで欲しいね。……堯宗」

もう一度、堯宗が顔を持ち上げると斗暉は満面の笑みを浮かべた。

「將軍職のクビがとぶのと、堯宗自身の頸が飛ぶの、どっちが早いだろうね」

明らかに斗暉の周りがどす黒くなった気がし、ある意味、一種の麻酔を打たれた堯宗は、固まったまま斗暉の診察を受ける。

「うん。怪我として残るほどのものはないよ。……て、あれ？」

斗暉の前に細長い影が落とされた。その場にいた全員が空を仰ぎ、影を落とす者を探す。

青空に引かれた、蒼い線。

「蒼い、龍——蒼氷か？」

「蒼氷だって？ 星来？」

蓮が見た、空を見る星来の横顔は。

——どこか、微笑^{わら}っていた。

蒼氷は地に降りると、人型に姿を変えて膝をつく。

「只今、参りました」

「ありがとう。蒼氷、蓮達と一緒に碧紗さんを助けたいんだけど、力を貸してくれる？」

「星来……！？」

星来は振り向いて、決心を胸に秘めて頷いた。もちろん、それに至る理由は星来以外、誰も知らない。

蒼氷は星来の中で何かが動き、一つの蓋が開いたことを認め、要望を聞き入れる。

「致しましょう」

「――ありがとうございます」

「でも、本当にいいの？ 数が多かったら、星来が危機状態になっても、僕らは助けに行けないかもしれない」

平気です、と星来は斗暉の心配、遠回しの制止を振り切った。

「決心は揺るがないんだね。わかった。じゃあ、蓮」

「うん。今日の作戦はまず宮中の人達も操られてることを想定し……」

「蓮様あー！」

「うわっ!？」

星来より少し年下の、昨日の朝に凌雅や斗暉が着ていたような着物を纏った少女が、猪突猛進と言わんばかりに全速力で蓮に突進し、抱きついた。蓮は勢いに耐えきれず、倒れるまではいたらなかったが、大幅によろめく。

「蓮様あ、聞いてくださいよお！ 碧紗様が変なんですよお！」

「あーはいはい！ わかったから落ち着きなさい！」

蓮は少女をなだめるように頭を撫でる。

「ケイカ。初対面の人がいるんだから、まず自己紹介しなさい」

少女は涙目で初対面の人を探す。

「あ……蒼尊……?」

その人は、本来ならば敬意を払わなければならない人物だったので、慌てて頭を下げる。

「こ、こんにちは！ 姓は麗らい、名は慶果けいかと言います！ まだ十七歳なので字は無いです。えっと」

「私のお付きの女官だ。慶果、この人は星来。一番年が近いから仲良くね」

星来もぺこりとお辞儀する。慶果は十七歳と言ったが、随分幼く見えた。

「そういえば、碧紗がどうかしたのか？」

「そうです！ 聞いてくださいよお、蓮様あゝ」

「また最初の状態……落ち着いて言いなさい」

慶果は蓮に促されて深呼吸をする。

「昨晚、碧紗様が突然、全官吏に宮外退去命令を出されたんです」
さっきまでの慶果の雰囲気と不釣り合いな、まさかの報告に、その場にいた全員が呆然とする。

「もちろん、はい、そうですかと納得する人は少なくて。ここからは父に聞いたんですけど、徳官長が反論なさったら……」

早口だった慶果の言葉が急に止まる。

「碧紗様の影から、魔物が湧くように出てきたそうです」

「……ははっ。夏の夜の怪談話にありそうな話」

「余裕そうだな」

「焦りが極限まで達して、かえって余裕が出てきたよ」

蓮は引きつった頬を叩いて気を引き締める。

「宮内の人が操られていないことはわかったけど、代わりにとんでもないことがわかったね」

「でも、作戦は変えない。星来が行ってくれるなら、どうにかなる」
蓮と星来は顔を見合わせた。

「慶果は私達が使っていた部屋で待ってて。堯宗は揖恕と王宮を繋ぐ道まで一緒に来る。あとは王宮の向かって左側に行く」

星来、蓮、凌雅、斗暉、蒼氷の五人は王宮の左側に回り込んだ、離れたところ集まる。

「もう一度作戦を確認する。これから太宰の部屋に一番近い裏口から突入する。外の魔物は私と緋炎で食い止める。星来、凌雅、斗暉、蒼氷は碧紗のところまで行ってもらおう。少しでも危機を感じたら、

星来、君が碧瑠刀を通して私にそれを伝えてくれ。華焰刀が共鳴するから」

「わかりました」

星来は少し震える手で碧瑠刀を握り締める。その肩に斗暉は手を乗せる。

「心配することないよ。僕達がちゃんと守るから。それに蒼氷もいるわけだし。ね？ 凌雅」

「ああ。大切な仲間を失うわけにはいかない」

そつと、凌雅の顔を見た。

——それだけなのに、鼓動が速くなる。

（凌雅……）

——いつか、大切な“仲間”ではなく、大切な“人”になれば。

「じゃあ、行くよ！」

「は、はいっ！」

五人は一斉に走り出した。

蓮の予想通り、裏口の扉の前で昨日と同じ種の魔物が地面から湧くように急に現れ、道を塞ぐ。

「どけえっ！」

蓮は先を行き、華焰刀を構え、月紅火を放つ。紅の虹が爆発を起すすと、扉までの道を開いた。

「行け！」

「最初から月紅火って、大丈夫なのか？ 李雪」

「大丈夫、とは言い切れない。でも、あんた達は私の身を案じている場合じゃないでしょ」

魔物の群れを抜け、蓮のみ向きを変える。

「あーつと、開いてないかもしれないから、斗暉。よろしく打って変わって気の抜けたような付けたし。」

「えー。なんでそのまま扉ごと吹っ飛ばしてくれないかなー」

「私がやったら扉どころじゃ済まないから」

「ん。まあ、もっとも」

呆れながら吐息をつく、走る速度を速め、飛び蹴りを木製の扉に食らわせる。扉はそれ自体があまり強度がなかったのか、斗暉の蹴りが異常に強かったからか、呆気なく開いた。斗暉に続き、四人も振り返らずに宮中に入っていく。

実は斗暉は中つ国で一種の趣味としてテコンドーをやっていたので、蹴りは蓮と比べるとわからないが、凌雅や堯宗より強い。

「うまくやってね。でも、絶対にいなくならないで」
かつての戦友のことを思い出す。

——自分だけ助かって、あの二人は死んでしまった。
魔物の殺気が、勢いを増した。蓮は魔物達に見せるように華焰刀の鋒を向ける。

「この命は、守るために使う」

——そう。約束を破るのは、嫌いだ。

宮中の広く、天井も高い廊下を三人は横に並んで駆け抜ける。いつもは人が点々というはずなのに、嵐の前の静けさと言わんばかりの静寂には、凌雅と斗暉は絶対的な違和感を覚えた。

「何で皆を宮外退去させたのかな……」

星来が独り言として呟く。

「さあ。どう思う？ 凌雅」

「来客のために掃除をした、と考えとけ」

「なるほどね。だって」

斗暉は星来と顔を見合わせる。凌雅はともかく、こんなほやほやした感じの斗暉が將軍職に就いていることが、未だに信じられなかった。

將軍と言ったら、日本史や物語ではもうちょつときりりとした印象が深い。ただし、今日の前にいる人のことを考えると、先入観としか言いようがないのか。

「無駄話は一先ず止めて……来るよっ！」

廊下の赤い絨毯から双頭の狼、蕨河が二匹湧く。

凌雅は鞘から剣を抜き、吠えながら向かってくる蕨河の頭を分けるように軽々と両断する。

斗暉は宙返りで蕨河をかわし、そのまま目で追った蕨河の双頭に斗暉は合わせて、器用に両足で踵落としを食らわせる。脳天を強打され、くらくらししている蕨河に容赦なく両頸を剣で断ち切った。

「蹴りの方が得意なのはわかったが、やりすぎて後で足が痛いから走れないとか言うなよ」

「まさか。そんな貧弱じゃないし。行こう」

蕨河の死体を避けて再び四人は走り出す。

（やっぱりすごいな、凌雅と斗暉は……）

特に斗暉の方。さっきまで柔らかかったものが、蕨河出現と共に瞬時に固まり、鋭利なものを形成したような感じだった。

「ガルアアッ！」

「後ろか！」

もう一匹、蕨河が後ろから飛びかかってきた。気配が現れてからすぐにこれ。恐らく、湧いた勢いで飛びかかったのだろう。

「星来様！」

一番後ろにいた星来に狙いが定まっていたのは明らかだった。蒼氷は主を守る術を放つべく、構える。だが、それより先に――

（皆を、凌雅を……）

碧瑠刀の柄を右手に握る。

（守る！）

「だぁっ！」

刀身を蕨河の胸に差し込む。血が刀身を滴り、鏢に当たって赤い絨毯に染み込む。刺した蕨河の重さが剣に加わり、反射で引き抜き、ついでに身を振って返り血をもろにかぶるのを防いだ。

「やれば出来るじゃないか」

「あっ……」

凌雅の素っ気ない称賛で我に帰った。

気が付くと、戦おうとした。

気が付くと、剣を握って構えをとっていた。

気が付くと、蘄河に剣を突き立てていた。

——守るために戦うって言うのは、こういうものなのかもしれない。

「厄介ですね。念のため星来様の周りに結界を張ります。魔物の攻撃は多勢は防げないかもしれませんが、最低、すぐ近くからの出現は抑えられます」

「凌雅と斗暉も結界内に入るくらいのを、よろしくね」

「御意」

ウァン、と奇妙な音がすると、蒼氷は印を結んだ手をほどく。

「じゃあ、続き、行きますか。留京の部屋までもうすぐだし」

斗暉の一言に無言の了解をしてまた走り出す。

蒼氷の言う通り、すぐ近くからの出現は防ぐことは出来たし、一度に出現するのは三頭から五頭程度だったので、攻撃も防げた。しかし、結界を張っている以上、中からも攻撃出来ない。付きまとわれるのが、鬱陶しいと思い始めた頃、蒼氷も同じことを考えていたらしく、自身の能力で結界の表面に電気を流し、触れる魔物を次々と感電させた。

「蒼氷、すごいね」

「ありがとうございます」

蒼氷が戦う、と言う形にするとどうかはわからないが、魔物を倒すところを見たのは初めてだった。

——守護獣がこれなら、主はもっとすごいことができるのでは？
(できない私は、やっぱり蒼尊じゃないんじゃない……)

「着いたよ。留京の部屋」

部屋を塞ぐ、昨日蓮が開けた両開きの扉。昨日とは違い、中からも異様な空気を漂わせている。

「誰が開ける？」

「俺が……」

「私が開けます」

星来が凌雅より先に大きな取っ手に手を添えた。

「危険だ。開けた瞬間に何か襲いかかってくるかもしれない」

「すみません。でも、頼りっぱなしは嫌ですから……」

操られているのは、星来の姉。その気持ちがなんとなく理解でき、凌雅は一步下がる。

開ける権利を譲られた星来は右手にしっかり碧瑠刀を持って、不意討ちに対処出来る状態にしてから、始めはゆっくり隙間を作る程度に開け、不意討ちはないと判断すると、蒼氷にもう片方の扉も開けるように指示を出し、ボタンと勢いよく扉を開く。

第三章：守りたいモノ、始まりの目覚め・後編

不意討ちは完全に扉を開いてもなかった。あったのは部屋の中央で正面を向いて立ち、目の前に巨大な窓からの光で長い影をおとす、碧紗。

「留京！ 一体何があったの！？ 使者から何をされた！？」

斗暉が呼び掛けるが、応答はない。代わりに投げ掛けられたのは、冷淡な言葉。

「退去せよ、と言ったはずだ……」

影から有翼の虎、兇忤が五頭現れる。

「聞く耳持たない、って感じだね」

「とにかく、魔物を片付ける」

斗暉は兇忤の顎を蹴りあげ、動きを止めると前足と右翼をはねて動きを封じる。兇忤の鳴き声で振り向くと、斗暉の背中を狙われる。その時、凌雅が割り込んでその兇忤の背を斬り裂く。

「どうする？ 留京をどうかしないことには、こっちもどうしようもないよ」

碧紗は眉一つ動かさない。まるで、動くまま固まったように。それも心身共に。

「碧紗、さん……」

星来は応戦する二人より部屋の奥で、人にしては不気味すぎる雰囲気を感じた女性を見据えた。

——この人が？

——この人が、高天原での私の姉？

「……違う」

元の碧紗を知っている、覚えているわけではない。ただ、直感的に、または常の人間にあるものが無くなっていることがわかっただけ。

星来は魔物の間をすり抜けて、碧紗の元へ走る。

「星来！？ 危ないよ！」

止まれなかった、止まりたくなかった。星来は碧紗の肩を掴み、叫んだ。

「碧紗さん！ どうしてこんなことするんですか！」

「黙れ……去れ！」

腕を振り払われ、反動でよろめき、その絶好の機会を兇忤は狙う。星来は降り下ろされる前足を断ち、更に横に一閃する。

「星来！ 伏せろ！」

二頭目を斬った凌雅の声に星来はとっさに反応し、膝を曲げて片膝をつく体勢になる。その刹那、頭上で空気を切る音がする。視線をその方向にやると、碧紗も剣を抜いていた。

斗暉が最後の一匹を片付けると同時に星来は碧紗から離れる。

「退去、と……」

碧紗はじりじりと近付く。

「言ったはずだあっ！」

狂気に目が光る。それに呼応するように再び兇忤が六頭現れる。

「留京をどうにかしないとな。星来、頼めるか？」

「凌雅！ 留京の腕はわからないし、危険だ！」

「剣を交えているうちに正気に戻るかもしれない。今は少しの可能性に頼るしかない」

「分かりました。やります！」

それでも斗暉は制止させようとしたが、聞かずに星来は走ってくる兇忤の背を踏み台にして跳躍し、碧紗の前へ降り立つ。すると早速と言わんばかりに剣を振るう。それを星来は必死に碧瑠刀で防御する。

（剣圧が強い。やっぱり本当に操られているんだ）

これで、本当に剣術を身に付けていない人の力なのか。袖の長い、見るからに動きにくそうな着物を着ていても、ものともせず、表情が凍ったまま戦っている。

「碧紗さん！ 目を覚ましてください！ 碧紗さん！」

押し合っていた剣が弾かれ、隙に星来の顔を目掛けて剣を突く。顔を反らして突きを避けるが鋒が頬に赤い線をつける。星来は顔の横に伸ばされた腕を肘鉄砲で退けると、碧紗の手から剣が離れた。(中つ国で蓮は碧紗さんは私の姉と言ってたっけ)

しかし、その記憶はないと言っていた。もしかしたら蒼い髪と瞳を持つ妹なんて印象が強くて、少し揺さぶりをかければ思い出すのではないだろうか。

星来は声の無い自問をしてから、頷いて決心した。

「姉さん！ 私だよ、星来だよ！ 姉さんの妹の、蒼尊の星来！」
「せい、ら」

剣を拾おうとした素早い動作が止まる。

「四天士は……殺す」

星来は一步下がり、離れた。

「蒼尊も、殺す……駄目……星来は、私の、妹……」

「姉、さん？」

言葉が支離滅裂でおかしい。

まるで、碧紗の中に二人、碧紗自身と碧紗を狂わせている何かが混在している。

「うわああああっ！」

「姉さん!？」

「どうした!？」

兇忤の相手をしていた二人は最後の一匹を始末し、頭を抱えて苦しむ碧紗に注目する。

「させない……殺す！」

「姉さん……？」

星来が手を差し伸べようとしたが、苦しみながらも拒絶する。

(どうすればいいの?)

目の前で人が苦しんでいる。助けたい。でもその方法が分からない。苦しんでいるのは、恐らく碧紗の中に潜んだ何かのせい。それからが分からない。そのうちにも、碧紗はふらふらと頭を抱えなが

ら、星来から離れていく。

「何が起きた」

凌雅と斗暉が警戒を携えながら星来に駆け寄って訊く。

「分からないんです。私が呼び掛けたら、急に変なことを言って苦しみだして……」

「変なこと？」

ガシャー……ン

窓の硝子が割れる音がした。

「今度は何だ!？」

そちらを向くと碧紗の姿はなく、天井に達しそうな大きな窓硝子に大きな穴が空いていた。

「まさか……落ちた!？」

斗暉の顔色が青くなる。

「幸い、ここは二階だから比較的地面から近いが……」

「私達も早く出ましょう。落ちたところを魔物に襲われるかもしれないですから」

星来は蒼氷を連れて窓の外に飛び降りる。蓮のすることに似てきたかもしれない、と思ったのは外に出た後だった。

「姉さん!」

星来は着地し、硝子の破片の中で倒れている碧紗を抱き起こす。

硝子のせいで擦り傷はあったが、気絶しているだけで息はある。

「姉さん! 姉さん!」

「動かさないで」

続いて降りてきた凌雅と斗暉が近寄り、斗暉は容態を診る。

「僕は下級將軍だけど、巽の医療団の長だからね」

「戦う職と治す職を？」

「中つ国じゃおかしい話だけどね。高天原じゃ武力をもって戦う対象は魔物だから」

碧紗の体を斗暉に委ね、再度容態をみる。

その時、背を向けながら近づく人影に気付いた。

「碧紗がどうかした？」

視線を上に移動すると、赤い髪が目に入る。紛れもなく蓮だった。
「ちょっとびっくりしたよ。硝子が割れたかと思ったら、ドンって音はするわ、星来の声はすぐ近くからするわ。碧紗が窓から落ちた？」

「はい。私が呼び掛けたら急に苦しみだして……」

「詳細は後で。周りの状況、目に入ってる？」

星来は言われてから蓮の背中越しに状況を確かめる。今、六人は多勢の魔物達に包囲されていた。とても悠長に今までの出来事を説明している場合ではない。

「王宮内で魔物は現れた？」

「はい。一度に四頭前後」

「魔物が呼べる術を使えるなら、こっちに大半をまわしていたんだろうな。それでもずっと緋炎と戦ってたんだよ？」

自分は逃げていない、という弁解も入れていた。さすがにこの多勢を見ては、逃げていたと疑われても仕方ない。

「そういえば緋炎は……」

「半分を任せた」

不意に荒鷲が一羽飛んできて、蓮がそれを剣で上に薙ぎ払う。

「蒼氷。星来を安全なところに避難させて。この状況は危険すぎる」

「蓮！」

星来は無力な自分が追いやられることを恐れた。

「この状況は戦い慣れてる人でも無事でいられるかわからない。頼む。わかって」

「……はい」

「では、行きましょう。星来様」

後を空から追おうとする荒鷲と兇忤を蒼氷が雷を放って落とし、その場を離れようとした刹那。

ザァー、と草原を風が撫でるような音がした。

「うっ!？」

「なんだ、これ!？」

振り向くと、碧紗から黒い靄^{もや}が出て、凌雅と斗暉を縛った。靄は四天士には効かないらしく、星来と蓮には近付かない。

「凌雅!？ 斗暉!？」

隙を作らない蓮が、捕まることがない二人の異変に振り向いたことによる、隙を作ってしまった。その間に荒鷲が足で蓮をさらい、蓮がいたはずの場所にカランと華焰刀が落ちる。

「蓮!」

三人が目を見開き声をあげる。

蓮は魔物の群れに落とされ、魔物が一斉に襲いかかる。

「蓮!」

「いけません! 星来様!」

星来は急いで駆け寄ろうとするが、蒼氷に止められる。

「でも、蓮が!」

僅かな魔物の間から嶺河に噛み付かれ、兇忤に引っ掻かれ、苦痛の声をあげる蓮が見えた。凌雅は、蓮は華焰刀を使ってやっとな能力を引き出せる状態だと言っていた。その大切な華焰刀は星来の目の前にある。抵抗したくとも出来ないのだろう。

助けてやりたい星来も、ただ立ちすくむしかなかった。

「どうして……私は無力なの……?」

ドサツと音をたてて蓮が魔物の群れから弾き出された。体のあちこちに無惨な程の傷ができ、出血であっという間に血溜まりができた。

「蓮っ!」

「大丈夫、夫。四天士は生命力も、強い、から……」

安心させるように蓮は笑顔を作ったが、見ていられなくなる程に苦しそうで、痛々しい。

「星来、離れて」

その時、群れの中から兇忤、いや違う。翼は荒鷲のもの、体は双頭の兇忤。今回現れた三種を混ぜたような種だ。最後の一撃を食わすために、出てきたのだろう。

離れることもできず、星来は願う。

「――力が」

その時、魔物が吠えた。

「力が欲しい」

蓮を目掛け、飛んでくるように走り出す魔物。

「――守りたいのに！」

フツ、と

一瞬にして、星来を包む空間が暗闇に変じた。

「あれ、え？」

寒くかったが、ひどく寂しく、悲しい気持ちになった。

「いつまで、そうしているの？」

大人びた幼い声が聞こえて、後ろを振り向いた。

いたのは、幼女。しかも髪と瞳は蒼い。

「蒼尊には、十分な守る力があるのに」

まるで母親が子供にものを教えるような口調。

「私は……蒼尊なんかじゃない！ だから使えるはずの能力――雷も使えないじゃない！」

八つ当たりだった。無力を認めざるを得ない自分の。

その矛先を向けられた幼女は儚げな顔をする。

「私は十六年前に守りたくて力を使ったけど、結局失うことになった」

「だから、その失敗で目を閉じて、耳を塞いで」

「使えないんじゃない。本当は使える。自らが使えなくしている」

「貴方は、何をしたいの？ 何を求める？」

「私は、先輩達を守りたい。その為の力が欲しい。今度こそ戦うって決めた」

幼女は蒼い双眸で見上げ、星来を見据える。

「本当に守りたいなら、立ち向かいなさい」

「逃げたら、影が後悔として残る」

「目を開け、耳を塞ぐものを離しなさい」

幼女は手を差し出した。星来は意識的にその手をとる。

「失敗を恐れないで。恐れから繰り返さないで」

「私はこれくらいしか出来ないけど」

「後は、貴方次第」

幼女は手から少しずつ光の粒となって人の形を崩していく。

「……君は、誰？」

幼女は消えかけている顔で儚げに笑う。

「私は貴方、貴方は私」

「四年間を共にしたモノ、貴方が十六年前に無くしたモノ」

「今度こそ、守って」

悲痛の思いに、星来は決意する。どんなことがあっても、と。

「……うん」

幼女は安心したように笑う。

「お姉ちゃんと、お母さんを、よろしくね」

「私が存在できたのは、あの人の力を引き継いだおかげ——」

「え？ あの人？」

空間は光を取り戻し始めた。

「蒼尊の力は特別なものなんかじゃない。守りたいという意志、それだけなの」

「さあ、行って。そのための力は、もう貴方自身に宿っている！」

闇が音もなく弾け、辺りが暗くなる前の光景に戻った。星来は幼女の手をとった時の状態だった。暗闇の中にいた時と違うのは——

「力——守りたいという意志」

突き出した掌に、集束し大きくなっていく電気の球。

蓮は閉じかけていた目を、大きく開いた。

「星来、それ……」

双頭の兇忤が口を開け、まず蓮に噛み付こうとしていた。

「っ！ させない！」

星来は電気を放つ。それは太い光線状となって、双頭の兇忤を襲い、黒く焦げるまで焼ききった。

「雷漣らいれん……」

自然と脳裏にその技の名が浮かんた。

——これが、私の力なんだ。

魔物達は一瞬怯んだが、群がって襲ってくる。

（慌てちゃいけない。一点を狙えば……）

群れの中に黒い球体を認めた。

（あれだ！）

あれで誰かが魔物や碧紗を遠隔で操っている、と推測した。無意味にあれがあるわけがない。

星来は地を蹴り、跳躍する。足りない高さは魔物の背を蹴って補う。道を遮った荒鷲をもう一度雷漣で焼き、黒い球体の前まで来る。「蓮をあんな目にあわせてえっ！」

かつてないほどの怒りを込めて叫ぶ。星来は碧瑠刀を振りかざし、スパッと黒い球体を切断した。断面に電気が纏い、全体を包むと砂となって消えた。そして、あれだけたくさんの魔物も同じく一匹残らず砂になって消えていった。

星来は地に着き、バチバチと電気を纏った碧瑠刀を眺めた。

自分は電気、即ち雷を操った。

——やっぱり蒼尊だったんだ。

もう否定できない。いや、否定しない。この力を自分の守りたいもののために使っているのなら。

星来は、はっと他にもしなければならぬことを思い出した。

「あ、蓮！ 大丈夫ですかっ!？」

蓮は凌雅に肩を支えられて、立っていた。その光景に少し胸がチクリと痛んだ。

「星来。蒼尊の力が……」

「自分でもイマイチわからないんですが……」

そういえば、あの子は誰だったんだろう。蒼い髪と瞳をしていたし、『私は貴方、貴方は私』と言ったからには自分自身だろう。しかし本当にそれだけだろうか。

「星来。留京が呼んでるよ」

斗暉が碧紗の上半身を起こしながら呼ぶ。星来は言う通りに碧紗に近寄る。

「星来、星来なの？ 本当に？」

その虚ろな顔は。

最初、自分を鏡で見た時の顔と驚くほどよく似ていた。

——この人が、姉。

この人が母親と言われた時より、もっと素直に受け入れられた。それはずっと姉が欲しいと思っていたからだろう。

「十六年間、すごく、長かった」

碧紗の目に涙が浮かぶ。

「姉さん。記憶が？」

「ええ。十六年前の四年間のこと」

「……私は思い出せないんです」

碧紗は悲しそうな顔をした。

「でも、碧紗さんが姉さんで嬉しいです！」

碧紗はにっこり笑って星来を抱き締めた。姉と言う表れない感触が、とても温かかった。

そして、星来は決意した。

——蒼尊の役目を引き受けよう。守りたいものが、自分の力で守れるなら。

第三章：禍の予兆、真実の行方

「この度は大変ご迷惑をおかけしました……」

堯宗の宿の一室。碧紗は戦った四人に失態を詫びていた。

「もういいって。碧紗に術をかけた奴は相当な使い手だったみたいだし」

蓮は斗暉に薬を塗ってもらい、緋炎に術で治癒力を速めてもらっている。

「姉さん。何があったんですか？」

「姉なんだから敬語なんて使わなくていいわよ。そうね、記憶と意識がはっきりしなくなったのは、使者の人と話してからなのよね。しかも離の」

「そんな、まさか！」

蓮は台を叩いて立ち上がる。その場にいた全員、滅多に動揺しない緋炎までぎょっとした。

「離なら、予め朱夏から『近々遊びに行く』と私に連絡が来るはずだ！」

「記憶が残るのに操られる人にわざわざ本当の国を明かすなんて足跡を残すような危険なこと、普通しませんよね」

「そう！　って、星来か。能力使えるようになったからか、察しが良くなったんじゃない？」

星来はうつすらと笑みを浮かべる。さっきの戦いだってそうだ。黒い球を見抜いただけで、あれが元凶だということを悟った。これも四天士の能力の一つなのだろうか。

「四天士と言えば、さっきの姉さんが操られていた時にちょっと気になることがあったんですけど」

蓮の腕から薬を塗る斗暉の手が離れた。

「正気を取り戻そうと『蒼尊の星来だ』って言ったら、『四天士は殺す』って返されたんです」

記憶を辿り、言葉につむぐと次は意見の言葉を継ぐ。

「もし普通に皆を殺すだけが目的なら、わざわざ『蒼尊』を『四天士』に変換しなくてもいい気がしますし、『蒼尊も殺す』と言うはずだと思えます。ですから、もしかしたら術者の目的は四天士を殺すことなんかじゃないかなって……」

星来の意見に付け加える者はおらず、部屋の外の声だけが静寂の中で響きわたる。気まずさに星来は慌てて立ち上がって頭を下げた。
「すみません！ 出すぎたことを言ってしまったって……」

「あ、そうじゃなくて。うん。確かに一理ある」

星来は蓮に促されて座る。自分の鼓動の音が聞こえる程、鼓動が速くなっていた。

「それなら魔物召喚の術を星来達より私の方にまわしていた理由ができる。それに堯宗。町に魔物は出た？」

堯宗が首を横に振ると、決定だな、と蓮は伸びをしながら呟いた。

「理由はまだわからないけど、目的は四天士を殺すことだろうな」

「これは面倒事になりそうだな。かつてないほど」

凌雅は溜め息をついた。

面倒事になるという理由以外に、こういう事は前例がない。

——いや、緋尊を殺そうとした例はあるが。

「蓮。僕から兄上に手紙出しくよ。異に来てもらうように。その方が都合がいいでしょう」

「そうだね。慶果、斗暉の手紙を出しに行ってくれるかな」

「わかりましたあ！ 蓮様！」

斗暉は部屋にあった紙に文字を書き出した。星来は文面を覗きながら訊く。

「斗暉の兄さんって何をやっていらっしゃるんですか？」

筆を走らせながら斗暉は答える。

「言ってなかったっけ？ 僕の兄、久遠くおんは四天士の一人、白尊はくのみことだよ」

「四天士だったんですか！？」

星来が仰天すると、ははっ、と斗暉は笑った。

「兄上は銀髪紫眼で、僕はそれは病気だからと思って。父親が医者だから昔から家の医学書を読み漁って。白尊って知った時は少し兄上を恨んだね」

書き終わった手紙を慶果に渡すと、慶果は笑顔のままで一礼して部屋を静かに出ていった。

「でも、誰なのかしらね。四天士を殺すなんて」

碧紗は星来の肩に手を乗せた。星来も碧紗の方を向く。姉の顔は四天士の妹の心配、そのものだった。

「全く見当もつかない。疑えばきりがないし。どのみち悪意を持った相当な使い手。見つけ次第、処分しなければ」

蓮は緋尊の総將軍としての風格を露にして言う。

「そう言えば、随分日が落ちたわね。皆は中つ国に戻らなくていいの？ 私も操られていたとは言え、官に詫びなきや」

「そうだね。明日は学校あるし。そろそろ帰らないと」

全員立ち上がり、部屋を後にして行く。星来も出ようとした時、碧紗が引き留める。

「ねえ、星来。仕事を片付けて休みが出来たら、一緒に母さんに会いに行きましょ？」

少し考えて、星来は答える。母親の方はまだ認めたわけではないので。でも、この誘いを断ることはできなかった。

「うん。きつと姉さんを待ってるよ」

「じゃあ、蓮伝いに連絡するからね」

「うん！」

今度は笑顔で答えた。星来には姉が出来たことで、本当に嬉しかったのだ。

中つ国に戻った一同は、寮一階のリビングでくつろぐ。特に戦いに出向いた航以外の四人は、椅子の背もたれに背を完全に預けて伸びをしていた。

「今日は一段と疲れたあーっ」

七緒はソファーに勢いよく寝っ転がった。高天原では傷だらけだった七緒の体は中つ国では無関係らしく、傷一つない。

「これで明日は学校があるもんね。信じられない」

「いつものことだろう」

凌雅は上級將軍の腕章を外し、コップに冷蔵庫から麦茶を取り出して一気に飲む。

「そうか、学校か。聖良。良かったらずっと寮にいない？」

七緒は上半身を反動で起こして聖良に尋ねた。聖良はともでもない、と拒否の意で掌を振る。

「そんなっ！ その、申し訳ないです！ それに家の方が……」

「家の管理ね。西園寺。頼める？」

「はい、オーケー」

仁史は携帯電話を取り出し、電話をかける。何やら取引のような会話を軽くすると、満足気に聖良に微笑みながら、ブイサインをする。何のことかわからず、聖良は首を傾げる。

「警備会社と契約オツケー。留守中も安心して」

「えええっ!？」

かえって余計に訳が分からなくなって、おどおどしている聖良に引き換え、七緒は手を叩いて仁史を称えていた。

「何だよ。自分は何もせずに仁史に全部……」

「あ。ポルターガイスト」

「いでっ!」

七緒がさりげなく投げたクーラーのリモコンが航の脳天に直撃する。跳ねたりリモコンを敏希が、またしてもさりげなくキャッチし、冷房を入れた。ある意味、見事なコンビネーション。

「でも、制服とか……」

「取りに行けばいいだけの話じゃない」

「だったら僕と一緒に行くよ」

仁史が名乗り出る。

「駄目だよ。言つとくけど合宿の予算案の書類、今日までだからね。会計さん」

にこにこしながら蓮が言うと、仁史の顔は一瞬にして青ざめた。

「はぁ！？　ちよつと、何で早く言ってくれなかったの！？　どうしよう。徹夜確実だ…」

仁史はとぼとぼ自室に戻っていった。後ろ姿もちよつと悲し気だった。

「あーあ。かわいそーに。どうせワザと言……」

「七緒。寒かったら温度上げるか切っていいぞ」

「あ、サンキュ」

「いっで！」

敏希がリモコンを投げ、航の後頭部に直撃し、跳ねたところを七緒がキャッチする。つまり、さっきと逆のパターン。

「じゃあ、さっさと行っちゃおうか」

「えっ、あ、はい！」

寮に長期滞在するのも悪くないし、もうここまで来たら引き下がれないと観念して、聖良は七緒の後について外に出た。

「新堂道場って、確か東泰町の一丁目あたりだよどうだいね？」

「はい。何で知ってるんですか？」

「沖縄の道場は全て把握してるから。父さんの影響でね。さあ、ひとつ走り行ってみましょー」

「あっ！　待ってください！」

聖良は折れた靴の踵を直すと、疲れているはずなのにその色を見せず、さっさと走っていく七緒を追いかけて行った。

多分、あの様子なら住所だけでなく、場所も把握していることだろう。

「ここでもいいんだよね？」

「はぁ、はぁ……はい……」

「大丈夫？　ちょっととばしすぎたかな」

無理もない。七緒はマラソン大会で陸上部の長距離のエースを差し置いて、ぶっちぎりの一位を獲得している程の体力を持つ。しかも参加したのは男子の部。これでついてこれたら聖良の方がおかしい。

「じゃあ、取って来ますね。待っててください」

聖良は外と敷地を遮る門を開けて中に入る。持ってきた鍵をドアの鍵口に差し込み、回したが、いつものような鍵が開く音が鳴らない。考えられることはドアが元から開いている。

（おかしいな？　原瀬先輩と来た時はちゃんと確認したのに）

もしものことを考えて、聖良は恐る恐るドアを開ける。すると、玄関に人影が立っていた。泥棒、ではない。見覚えがあったから。即ち、聖良の父親。外泊を許さない父親は、憤怒の形相をしていた。先程の仁史と同じように、血の気が引いていく。

「聖良！　誰が留守中に外泊を許した！」

聖良の全身から冷や汗が吹き出て、父親の言葉一文字一文字に押さえ付けられるような感じがした。

「ごめんなさい！」

「この前いなくなった時に叱らなかったからと言って、気が緩んだか！？」

父親は手を上げる。打たれる恐怖に震えながら聖良は手で顔を守る。

力んで、打撃に覚悟したがそれがこない。目を開けようとも怖くてそれができない。

「私は理由を聞いてから処罰を考慮しますが」

（七緒先輩の、声？）

聖良はそっと手をどけて、目を開ける。そこには二人の間に割り込み、聖良に向けられた父親の手を掴む七緒がいた。

「聖良を家から寮に連れ出したのは私です。それは謝ります」

横切った気配は全くなかった。今あるのは、さっきの明るい七

緒は消え失せ、高天原での総將軍の風格を表した、最早蓮であった。

「誰だ？」

父親は七緒の手を振り払い、まるで不審者として扱うように尋ねた。一方七緒は何があったのか、戦いの時に見せる笑みで笑う。

「誰だ、ですか。ご存知のはずです。今更訊かないでくださいよ。それとも『八年前のこと』ですから、お忘れですか？」

「ま、まさか！ お前っ！」

父親は目を見開いてわなわなと震える。聖良には剣道道場の家同士、過去面識があったのだらうと、軽く考えていた。しかし、大いに違った。

「お久しぶりです。新堂雅治さん。いえ」

七緒は打ってかわってにこやかに、且つどこか皮肉をこめて笑う。

「先代異国総將軍、巖 剛矯殿」

——え？

——父さんが、何だって？

「そうか。その顔は李雪——緋尊、蓮か」

「中つ国では異七緒と言う名前ですけどね」

聖良は七緒の言った意味、父、雅治がどういうことを言っているか理解できなかった。例えばできたとしても、信じたくなかった。

「なぜ、わかった？」

「聖良の戦い方が妙に高天原の戦い方だったんです。聖良と手合わせた凌雅と、少し戦いを見た私とで意見は一致しました」

「凌雅か。懐かしいな。彼奴は今、どうしている？」

「上級軍將軍まで昇格しましたよ。それに信官長も兼任しています」
「上級軍將軍だと？ 水楊と万励はどうした？」

七緒は返答に困った。信用してもない上司を庇って死んだのだ。ここで正直に犬死にと言えば、彼らの矜持を踏みにじることになる。七緒は苦渋の選択の末に答える。

「……殉職しました。私を庇い……」

「そうか。彼奴らしいな」

七緒は爪が皮膚に食い込むほど、ぎゅっと拳を握り締め、怒りを抑えた。

——彼奴らしい、だって？　今もなお、彼らを貶すつもりなのか？

「七緒先輩？　どういうことなんですか？」

「あ、ごめん」

はっと我に帰り、七緒は聖良に状況説明しなかったことを詫びる。
「聖良。今から真実しか言わない。信じられなくても、ちゃんと受け止めてね」

七緒は一拍置いて、真実を話す。

「新堂雅治、高天原では巖剛矯という名だった。八年前まで高天原で異国総將軍を務めていたが、緋尊暗殺未遂により高天原から追放された」

「……！」

聖良は視線で否定を雅治に望んだが、肯定の意で静かに首を縦に振った。

「すまない。聖良。産まれた時から気配で分かっていた。長い間、緋尊を片腕としていたから。娘を奪われるのではと高天原の者にも報告しなかった。そして、このことはいづれ言わなければならないと思っていた」

聖良は俯いた。一番恐れていたが、同時に尊敬していた父親にも高天原の存在を肯定された。夢だったらと何度願ったことか。

「蓮。いや、巽」

「いいですよ。呼び慣れている方で」

「では蓮。お前がここに来るのは、荷物を持ってやる以外にも理由があるだろう」

「さすが剛矯殿。よくお分かりで」

その前にと雅治は二人に家に上がるように促し、七緒はお言葉に甘えて、と靴を脱いで上がる。聖良も信じられないまま家に上がる。

雅治は二人を居間に案内して座らせ、お茶を出した。

「昔話は面倒だ。用件だけ率直に」

「聖良が寮に滞在する許可が欲しいのです」

聖良は父親に限ってそんなことはない、許すはずがないと思っていたが、雅治は黙っていた。

「ちゃんとした理由はあるだろうな」

「もちろん。高天原で大分面倒事が起きまして。常に蒼尊の星来がないと困るんです」

「それは……私が聞いても支障はないか」

七緒は無言で水滴がついたガラスのコップに入った麦茶を飲む。

「四天士を殺そうとする愚か者が現れました。術を使って太宰を操り、危うく私と星来は殺されそうになりました」

「バカな！」

滅多に取り乱さない雅治が驚きのあまり吐くように叫び、聖良は驚いて肩を縮ませた。

動揺を見せない七緒は、新堂家の麦茶を氣に入ったらしく、一気に飲み干した。

「理由は分かりません。操った張本人は全くわかりませんし。魔物を多勢操っていたことから相当な者かと」

七緒は呑気に自分のコップに麦茶を注ぐ。聖良はどうしてそんな呑気でいられるのか不思議だった。

「だとしたら余計、聖良を家に留めて置かなければ。いつ攻めてきてもいいように、私が特別な稽古をつける」

分かっていますねえ、と七緒は溜め息をつく。

「人が雛を育てても飛ぶことは教えられるってこと、分かりますか？」

雅治は眉をひそめた。

「元総將軍の貴方が稽古をつけたら、そりゃ強くなるでしょうけど。でも、それでは四天士の力は使いこなせないままです。相手が四天士の力を以てしてでないと倒せない奴だったら、どうするんです」

聖良は七緒の感心した。七緒は勝ち誇ったように二の句を継ぐ。
「貴方は八年も高天原での実戦から退いている。貴方の力が衰えてると断言はしませんが、ここは現役の將軍職を預かる者に任せていただけませんか。それにこちらには凌雅の他に二人、將軍職の者がいますから」

雅治は返す言葉がなく、俯く。聖良がちらりと七緒の横顔を見ると、雅治に見られていないことをいいことに、満足げだった。

（やっぱり、七緒先輩はすごいな）

もつともな意見を出すと、人々の納得か、納得しか得られないことに逆上する怒りを得る、と聞いたことがある。果たして七緒の説得はどちらだろう。

しばらくして、雅治は苦虫を噛み潰したような顔で顔を上げる。

「私の意見を言う前に訊く。聖良を強くすることができるか。死なせないと誓うか」

「いずれも肯定しましょう」

対照的な表情の二人は一触即発の雰囲気醸し出す。先に動いたのは、雅治。七緒の横に来て、跪いた。

「聖良を、頼む。絶対に守ってくれ。全て任せる」

その次に雅治は顔を上げ、聖良を見つめる。

「聖良。蓮は間違ったことは言わない。この人の言うことをちゃんと聞くんぞ」

「分かりました」

七緒は二杯目を飲み干すと、壁に掛けられた時計を見る。

「さて、聖良。そろそろ夕食の時間だし、持ってく物持って行ってこう」

「待ってくれ。八年前から気になって、昨日更に……いや、いいか」
七緒は訝しく思い、立ち上がろうと立てた膝を、正座の状態に戻した。

「先代異国太宰、呀 が 千宵 せんしやうは覚えているだろうか？」

「ああ、はい。懐かしい名前ですね。共に追放された仲間がどうか

しました？」

「いや、それが、もしかしたら追放されていないかもしれん。それかもっと酷い状況になっているかもしれん」

七緒の表情がぐっと険しくなった。

「八年前、私は高天原と中つ国を行き来する者のための門に千宵と共に義官に連行された。そこまでは良かった。しかし、手続きを済ませて門を通ろうとした時、千宵のみが別のところに連れていかれた」

七緒は何も言わずに話を聞く。顔の険しさだけが増していく。

「私と千宵は中つ国でも面識があった。久しぶりに千宵と話してみたいと思い、中つ国の千宵がいた東京に行き、昨日千宵の家を訪ねたが……」

「あ、だから母さんが『父さん、しばらく外泊する』って言ったんだ」

聖良は今の状況から考えると、どうでもいいことを理解すると、この場を壊したのではないかと恐れた。しかし、その様子はなかった。

「千宵は『元からいなかった者』になっていた。家族に訊いても『そんな人は家にいない』と返された」

「それは……中つ国に現れた魔物の処理をした後のような時のように、ですか？」

雅治は頷く。七緒は顎に指を当てて怪訝な顔をした。

「それに中つ国に追放されていない、と言うなら蓮の耳に挟んでおきたいことがある」

やっぱり止めようか、と考えるから言うことを決意する。

「千宵は多少なら術が使えた」

「そ、そんな！」

七緒は目を見開いた。

「あの、訊いていいですか？ 術って四天士以外の人はどうやって使えるようになるんですか？」

「術は天賦の力。特定の人じゃないと使えない。だから術で犯罪が起こったら結構犯人を絞りこむことができるから、普通はやらないでも、多少しか使えないなら……」

「八年も経った。その間鍛練していたと考えれば辻褄があう。術は研けば鋭くなるものだ」

七緒は渋い顔をして考えた。

もし、あの時自分を殺そうとしたのもこのことの一貫なら、腑に落ちることもある。

（でも、千宵の目的って？）

「そう言えば、そろそろ夕食の時間、じゃなかったのか」

「あ、そうだ。麦茶、ご馳走様でした。聖良、荷物をまとめていこう」

熱した鉄のような色の夕焼けに染まる道を、七緒と聖良の二人は持ってきた旅行用鞆を肩から下げて歩く。

「本当に、千宵って人なんでしょうか」

七緒は吐息をつくと、空を仰いだ。

「六割方は決定、と言っているかもしれない。これで事が早く片付くのか、かえってややこしくなったのか……」

よそ見をしていたせいか、空き缶を蹴ってしまう。飛んでいった空き缶はカラカラと音をたてて転がる。

「あーもう！ 止め止め！ これ以上脳を使ったら破裂する！」

「な……七緒先輩！？」

「やだやだ！ 文化祭の企画とかならいくらでも頭使えるけど、こんなこんがらがったことは拒否っ！」

「あ、七緒先輩！」

何か吹っ切れたように、七緒は猛ダッシュで走り去っていった。

「七緒先輩、こういうところもあるんだ……」

呆れながら聖良は七緒を追いかけていった。

第四章：夏の雨、宗蓬院家の秘密

ザアアアア——……

風籟島に雨が降った。日差しがないのは嬉しいが、ジメジメするのはいただけない。

（雲行き、悪かったしなあ）

中つ国。明華学園一年一組の教室。

夏休み二日前とだけあって、日頃からまだ受験とは縁が遠い一年生は気が緩み、授業態度が悪い。しかも今日は半日授業だった上に、一学期の授業が全部終わったとなれば、騒がしさはもう爆発状態。

「本っ当にうるさいよね。バカ男子共は」

麻奈が聖良の席の近くに来て、組んだ腕を机上に乗せて座り込む。そう言っていた麻奈も、授業中はよく寝ているので安眠妨害されるのが嫌なのだろう。

「仕方ないんじゃない？ 私だってすんごく楽しみだし」

「あんな風に全面的に出すのがバカなの！」

二人は騒ぐという領域を越えて、暴れる男子達をちらりと見やった。確かにバカっぽく見えるが、部活の大会の話や、夏休みの予定を披露する話を聞くと、実に楽しそうだ。

「こっちもさ、楽しみだね！ 合同合宿！」

明華学園では毎年、東京にある兄弟校の煌燐学園こうりんと夏休みにここ風籟島で合同合宿をするのが慣習。今年合同合宿を行うのは剣道部、弓道部、拳法部の三つ。もちろん、剣道部所属の聖良や麻奈は参加することになっている。

「佐伯先輩に聞いたんだけど、今年はアタリ年らしいよ！」

「あたりどし？」

「そ。なんかカッコイイ人が多いらしいよ？ 特に運動部総部長って変な役職の、えっと何て言ったかな」

「……宗蓬院、晟夜」

この前、敏希が七緒の好きな人として名前を出したことがあるのを思い出し、そっと口にする。同時にその時の敏希の悲しげな顔が浮かび、胸の奥が棘のついた手で鷲掴みされたように痛んだ。

「そうそう！　なあんだ。聖良も知ってるんじゃないん」

まさか寮で敏希から聞いた、なんて到底言えなかった。

「去年バスケット部が来て、佐伯先輩の友達に煌燐学園の人にアド聞いた人がいるんだって。で、その煌燐の人曰く、すっごくカッコイイんだって！」

急に麻奈が早口になり、目を輝かせてはしゃぎだす。

「うちの学園なら、原瀬先輩という勝負……っ!？」

急に教室の気温が下がった気がした。それだけじゃない。あんなにうるさがが爆発状態だった皆が凍りついたように一斉に口を閉じ、妙な緊張感と沈黙が漂う。

「え？　先生来た？」

「ち、違うよ。あっち……」

麻奈は他の人に見えないように、体の影に隠しながら教室のドア付近を指差す。そしてこの沈黙の理由が痛いほどわかった。

「原瀬先輩！」

ドアの縁に腕を組んで寄りかかっている。

（え、でも何で？）

生徒会役員選挙はまだだし、聖良のクラスには弓道部員はいない。クールな敏希のことだから、用も無しに来ることはないだろう。この中で接点を持つと言え、おそらく、自分だけ。

（一応、行った方がいいよね）

用があれば呼べばいいのに、と思ったが敏希がそんなことをする人じゃないし、このクラスの人も敏希に声をかけるといったら、とんでもないことだろう。

聖良は立ち上がって、無理と十分承知していても目立たぬように敏希に歩み寄る。言うまでもなく、矢の雨をくらったように視線が

痛かった。

「あのー……」

「新堂。合同合宿が始まる前に対面式があるのは知ってるよな」

「はい……」

いきなり本題を切り出したことから、自分に用があったのは間違っ
つてはいなかった。

対面式と言うのは明華学園と煌燐学園の顔合わせ、と言ったところ
で合同合宿の開会式も兼ねている。

「式の最後の方で、両校の各部活の部長がステージ上で握手するん
だが……」

段々、こちらの話も雲行きがあやしくなってきたのは、気のせい
だろうか。

「新堂。部長代理として出てほしい、との七緒からの連絡だ」

「……」

——え、今、何て言った？

——部長代理？ 出るって何に？

考えていることを一回真っ白にし、敏希の言ったことを理解する。
そして、血の気がひいていった。

「えっ、えーっ！？ 私がですかっ！？」

「剣道部に新堂という名字はお前しかないだろう」

「そうじゃなくて、部長と副部長は！？」

「中城は祖父が危篤で本島に帰るから合宿には参加しなくなった。

守屋も短期留学で参加しない」

やる気あんのか、うちのツートップは、と初めて先輩を心底恨ん
だ。

「三年生は元々参加しないし、中城も守屋も代理は誰がいいかと訊
いたらお前の名が出た」

推薦なら大会で使ってください、としない先輩に向かって言った。
「でも、そんな大役……」

「心配することはない。ステージ上ったら向こうの部長と握手する

だけだ」

握手するだけ、と言っても聖良にとって“だけ”ではない。

「それに七緒も会長としてステージにいる」

七緒もいる。それだけでとても安心した。

「七緒先輩も合宿に？ あ、でも三年生だから……」

「生徒会が出る。参加する部活に所属してない仁史も航も出る」

「え？」

「七緒が夜に話す」

この場では言えないことだろうか。それとも単に話が長くなるからだろうか。どのみち重大な理由があるに違いない。

「おーい。帰りのホームルーム始め……ひいっ!？」

教室に入ってきた担任は、先生のくせに敏希を見た途端に飛び上がって驚いていた。それほどこの人に威圧感があったつけか。いや、あった。自分は慣れてしまってるだけで。

「は、はら、せ。うちの生徒に何か？」

「用なら済みました」

と言って、身を翻して自分の教室に帰っていった。その途端にクルスの沈黙は解け、元通り、またはそれ以上。ホームルーム終了後、聖良が敏希との関係について質問攻めにあったのは、言うまでもない。

部活を終えて、聖良は闇と雨の中、寮に帰る。

——ザアアア……

「随分降るなあ……」

傘を閉じ、スポーツバッグについた水をタオルで拭くと、一時的な我が家になっている寮に入る。一階は寮と言う雰囲気はなく、普通のどこにでもあるリビング。先輩達は部屋があってもここに集まって話してることが多い。

「ただいま……て、どーしたんですか!？」 西園寺先輩!」

まず目に飛び込んだ光景は、仁史がイスに座って――まあ、そこまではいいのだが、上半身をテーブルにうつ伏せて、死んだような状態になっている。さすがの聖良も驚かずにはいられず、スポーツバッグを置いて近寄る。

「だ、大丈夫ですか！？ 具合悪いんですか！？」

「はははは……だーいじょーぶーだよ……」

明らかに大丈夫ではない。仁史が身を任せているテーブルには、お金に関する資料が散乱しており、仁史が何か書く必要のある資料には、ミミズがのたくっている、というより暴れているような文字が並んでいた。そういえば、仁史は昨日も予算案があーだこーだ言っていた。仕事に終われて徹夜したのだろう。

（そんな冷静に解釈してる場合じゃない！）

「先輩！ ちょっと本当に大丈夫ですか！？」

聖良は仁史の肩を掴んで揺らす。無理して起こすつもりはないのだが、仁史の目が完全にどこかにいつてしまっている。一回現実に戻さない。

「お祖母ちゃんが手え振ってるー」

「ちょ！ 現実に戻ってください！ 川を渡らないでください！」

聖良はなおも揺らす、仁史の目はどこかにいったまま。しかもなぜか口角が上がり始めた。本格的にヤバイ。

「せえんばあい！」

「……なんだ、航もないのに、やけに騒がしい」

敏希がスポーツバッグを肩から下げ、ビニール袋を持って帰宅した。聖良はやっと助かった、と思った。

「原瀬先輩！ 西園寺先輩が変なんです！」

「またか。これは重症だな」

敏希が冷静なのか、こういう状況になれているのか、落ち着いて持っていたビニール袋から、ふがしの袋を取り出す。

「お前の好きな楽丸のふがし」

仁史は俊敏に反応し、ガタンと上半身を起こし、敏希が持ってい

るふがしを確認すると目がきらきらと輝く。

「わーい！ 駄菓子ーっ！」

一瞬で立ち上がって、小動物みたいにふがしに飛び付く。仁史は満面の笑みで袋を開け、ふがしを取り出すと、極上の満足げな笑顔をしながら食べ始めた。一方、魂が抜けかけてた仁史を見た時よりも驚き目が点になる聖良。

「……今の、西園寺先輩ですよ」

「ああ。仁史は駄菓子食えると別人だからな」

「あ。敏希ー」

仁史はふがしを食べながら、どこからかビンを取り出す。

「科学室から炭酸水素ナトリウム、パクってきたからカルメ焼き作ってー」

「パクった!？」

「あー。確か丁度ザラメあったな」

「パクったことには突っ込まないんですかっ!？」

これも敏希が冷静なのか——仁史から白い粉の入ったビンを受け取るとキッチンに行った。

「敏希、カルメ焼き作るのすごく上手いんだ」

「へ、へえ。意外ですね」

仁史は鼻歌を歌って二本目を食べ始める。無邪気な笑顔が可愛い。

「楽丸のふがしは美味しいんだよ。新堂も食べなよ！」

仁史はもう一本ふがしを取り出して、聖良にわたす。あまりにも仁史が幸せそうなので、一口食べてみる。甘過ぎず、多分いくら食べても飽きない甘さで絶品物だった。

「たーだいまー。お、仁史。また食ってんのか？」

「ん」

生返事だけして、三本目を食べ始める。聖良も同じものを食べて、その気持ちがあった気がした。

「お。楽丸のやつじゃん。俺も一本——っ!？」

聖良が最後の一口を食べようとした時、一気に重いものが押しかかるような重圧を感じた。寒気までしてきたので、それがする方を恐る恐る向いてみると、仁史が先程の笑顔と打って変わって、それはそれは怖い刺すような目付きで航を睨み付けている。

(こっ、こわっ！)

自分が特に何をしたわけでもないのだが、命の危機を感じて敏希がいるキッチンにこそそこそと逃げる。

「あの、あれも西園寺先輩、ですよね……？」

「だから言っただろう。別人だと」

いつもの冷ややかな顔で地味におたまのザラメを溶かしているところを見ると、ちょっと可笑しかった。そして聞こえる、仁史と航の声。

「僕のお菓子を奪うなんて、いい度胸だなあ？」

「お前のじゃないだろ！？　また敏希が仕方なく買ってきたんだろ！」

「皆のものは僕のもの、僕のは僕のもの！」

聖良はとても先輩がやるような喧嘩には思えないな、と思いつながらキッチンから言い争いを眺めた。

——ザアアア……

言い争いが十分うるさかったが、本来かき消されるほど小さな雨音がまるで自らを主張したように耳に入った。キッチンにある小さな窓ガラスを見やると、雨粒がガラスに当たっては、緩やかに下へ流れていく。

「天気予報は晴れだと言ってたんだがな」

敏希が溶かしたおたまの上でザラメに重曹を入れて、箸で膨らませた。

「でも、雨は嫌いじゃないですよ」

敏希が出来上がったカルメ焼きを皿に積み重ねる横で、聖良が言

った。

「雨が降った後は空気が綺麗になりますから、それだけで景色も綺麗に見えるし、なんか、清々しくなるというか……」

「珍しいな。そういう奴」

聖良が振り返ると、敏希と目があつた。その顔は暖かに笑つていた。

それだけで、くすぐったくなるほど嬉しい。

——ガチャツ

「七緒が帰ってきたな」

帰ってきたと言っても、何かがないような違和感を感じた。

「いっつもお前はな——っ!？」

口論も止まったので、聖良はキッチンを出て、リビングに行く。二人の喧嘩はぴたりと止まっていて、七緒が雨に濡れて傘をささなかつたのか、びっしりになって佇んでいる。

「……うるさい」

仁史がお菓子を盗られる時に見せた表情より、明らかに怖かつた。クーラーはドライにしているので、寒いとまではいかないはずなのに、七緒の帰宅と同時に寒くてたまらなくなった。

「た、異さーん。炎を操る貴方様が冷気を発するのはよくないと思いますかー?」

「あーあ。知らないよ……いだっ!」

「いでっ!」

七緒は新聞紙を丸めたもので航と仁史まで殴ると、ソファーにぱたりと倒れ込んだ。いつもの明るい雰囲気がなく、心配した聖良が歩み寄って、仁史の時と同じように声をかける。

「どうかなさったんですか?」

「ううん。ちよつとの寝不足と多大な疲労。あと、ごめんね。剣道部代表代わってもらって」

七緒は反動をつけて起き上がる。

「いえ……て、考えてみれば七緒先輩、一応剣道部に籍置いてるじ

やないですか!」

「私も考えたんだけどね。会長と兼任はダメだって言われたんー、と伸びをして背もたれに寄りかかる。」

「七緒。宗蓬院家の話をしてやらないと」

「眠いけど、うん。その話だけしておかないと、ね」

敏希が作ったカルメ焼きをいくつも乗せた皿を持ってきて、テーブルに乗せる。

「こんな時期に本当に宗蓬院本家が来て良かったな」

仁史も航も状況を察してか、テーブルを囲んで五人で座る。

「先輩達は三年生なのに、どうして合宿に参加するんですか? 原瀬先輩は昼に話してくれなかったんですけど……」

「うん。まず宗蓬院家の話をするよ」

七緒は背もたれに寄りかかる体勢から、前かがみ気味になる体勢になる。

「宗蓬院家って言うのは、唯一高天原と深い関係のある一族。ここが高天原なら宗蓬院家は中つ国で生きる高天原の人々の五帝にあたる存在。特に当主は黄帝に相当する」

始めの自分ならこんなことは素直に飲み込めなかったが、今はずんなり話が入っていく。

「でも、特に宗蓬院家って何をするんですか?」

「わかると思うけど、高天原と中つ国を比べれば、そりゃ中つ国の方が便利で物が溢れてる。だから、たまにいるんだ。仕事を放って高天原に戻らなくなる奴が。そうすると高天原から連絡が来るから、そういう奴を分家共々で探して強制送還したり、それなりの処置をする」

「じゃあ高天原ではあまり関係ないんじゃない?」

「宗蓬院家は分家も含めて皆高天原の人。高天原の八国全土と中つ国——日本なら日本の方が狭い。つまり、中つ国で宗蓬院家の人に連絡を入れれば伝達が速いから、すぐに伝わる。その人達が高天原で周りの人に連絡すれば、またすぐに全土に伝わる。だから、今起

きてる事が手軽に全土に伝わるから、どこかでまた異常が起きれば、すぐにこちらに情報が入る」

「じゃあ、いち早く色んな情報が入ってくるんですね」

七緒は仁史が取ろうとした大きめのカルメ焼きを取って食べた。

仁史の顔は悲し気な顔をした。

「やばい。究極に眠い。下準備は色々あるわ……とりあえず、詳しく聞いたことはないけど、晟夜様もその双子の妹の暁あきらも高天原でそれなりの権力を持つてる人だから、今回のことを報告して損はないよ」

七緒はソファーに座ったまま目を閉じたが、寝ちゃいけないと首を横に振った。

（この合宿にこんな深い意味があっただなんて……）

その他の人には、互いに力を高めあい、友好を深める合宿でしかないだろう。でも、自分達にはそれ以上の意味がある。これが、中つ国に住む人と高天原に住む人の差違か。

「明日には止むといいんだけど」

七緒リビングの大きな窓を眺めた。

「雨、嫌いなんだよね。いいこと、起こりそうもなくて」

七緒の何気無い一言が、言い過ぎかもしれないが、聖良に七緒との違いを感じさせた。

——この雨が、これから来る嵐らんと乱らんの前兆だなんて、思いもよらなかった。

第四章…合宿開始、宗蓬院兄妹

夏休みに突入し、二日目。いつもは運動部員が入り交じる体育館は、この日は綺麗に整列した人がずらりと並んでいる。

（やっぱり断ればよかったな……）

聖良はライトが熱いステージ上にハの字に並べられた椅子に座りながら四日前のことを後悔していた。

聖良以外は待ちに待った合同合宿初日、対面式。もしこれがなければ、聖良も“待ちに待った”と言う表現が使えただろう。後悔しても今更、と思うがやはり捨てきれない。ライトは熱いわ、風は来ないわ、今日に限って湿気が高いわ、止めに緊張で顔が火照って最悪だった。

ステージ中央では、明華代表として七緒が挨拶を述べている。さすがそれらしく、緊張の色を全く見せず普通に会話をするように喋っている。それが聖良の緊張を促進し、座っていても足が震える。

「お前がそこに立って何か言うわけじゃないだろう」

「は……はい」

弓道部部长として隣に座っている敏希が聖良を落ち着かせるか、呆れて言ったのか平然と構えて小声で呟く。

（そうだよ。私は煌燐学園の部長と前に出て握手だけすればいいんだから）

震えと鼓動の速まりは未だ治まることを知らないが、気持ちだけはいくらか楽になった。冷たい優しさだったが、何よりも言ってくれたのが敏希だったのでもって安心する。

その時、七緒の声が途切れて号令をかける二年生の声に変わった。明華代表の挨拶が終わったのだ。一度は落ち着いた心境も、次だと意識してしまうとまた戻ってしまった。

「聖良、大丈夫？ 顔真っ赤だけど」

右隣の席に戻ってきた七緒が座りながら言った。聖良は声を出す

ことができず、頷いて答える。

次に、司会の仁史の声がマイクを伝って体育館内に響く

「では、各校代表、及び部長対面。まず両校代表から。明華学園、巽七緒。煌燐学園、宗蓬院晟夜」

（宗蓬院先輩と、なんだ）

麻奈があれほど格好良いと言ったのだ。どれほどのものかと顔を上げて見ようとしても、上から何かに押さえつけられているように顔が上がらない。そうしているうちに拍手が聞こえ、握手を終えた七緒が隣に戻ってきた。

「聖良、大丈夫？」

「全然大丈夫、じゃ、ないですね。はは……」

聖良は引きつったまま笑う。

「次に、剣道部部长。明華、新堂聖良」

「あ、はっはい！」

いらぬのに返事をしてしまい、聖良は赤面する。更に追い討ちをかけるように生徒がクスクスと笑いだした。

（もうやだ！ 逃げ出したい！）

込み上げて溢れそうになる気持ちが爆発しそうになったその時。

「黙れ」

低く、聞き取りにくかった声だが堂々たる威厳を秘めたそれは、

確かに体育館内に響き、笑い声は瞬時に止んだ。

「いちいちこんなことで騒ぐなど、情けない」

男の声だが、左隣からではない。少なくとも向かい側、煌燐の方。聖良はそちらを見やると見えたのは、腕を組んで明らかに呆れている素振りを見せる青年。位置からして宗蓬院晟夜。全体的な、ルックスを含めた何かは敏希のものに近い。しかし、決定的に何かが敏希を遥かに凌ぎ、敏希の持つ何かを少量しか持っていない。

「さすが、宗蓬院家の当主」

「あれくらい覇気がないと一族なんて到底まとめられないよ」

七緒と敏希が聖良を挟んで小さな声で話した。

「早く式を進めないか」

「あつと。煌燐学園剣道部部长、宗蓬院暁」

（宗蓬院？）

そう言えば、誰だったかは覚えていないが、宗蓬院晟夜には双子の妹がいる、と言っていた気がする。まさか同じ剣道部、しかも部長とは。

聖良はステージ中央まで進んでいく。いざ本番になって諦めがついたのか、足の震えは止まっていた。それでも鼓動が速いまま。

（宗蓬院暁……先輩って、どんな人なのかな）

視界に細い指が入った。

「初めまして。宗蓬院暁です。よろしく」

女性にしては低い、豎琴を奏でたような声だった。聖良はそれに応えるように手を差し出しながら宗蓬院暁と目を合わせる。

（きれいな、人……）

その言葉が出たのは普通に感想を述べる時の感覚ではなく、寧ろ熱い物を触って熱いと思う時と全く同じ感覚だった。

漆を塗ったような肩までのショートカットの髪が似合った、白い肌の顔。それは宝塚でも十分通じるような、すっきり整った中性的な顔立ち。スタイルの方も、特に脚は高速通りにスカートは膝丈にしていたが、全体で見ると随分短く見えたほど長かった。

「どうかしたか？」

惚れ惚れし過ぎて、聖良は暁の手を握ったまま、ぼーっとしていたのだ。

「すみません！ 新堂聖良です！ よろしくお願いします！」

聖良は手を慌てて離し、あたふたと頭を下げた。すると再び生徒からせせら笑う声がした。聖良の顔はまたしても耳まで紅潮した。

「……」

と、途端に治まった。暁が横目で百人以上はいる生徒達を睨み一

つで黙らせたのだ。さっきの晟夜といい、この兄妹が放つ威圧感
尋常ではない。晟夜の威圧感が瞬時に刺し貫く氷牙なら、暁は吹き
荒ぶ極寒の吹雪。

(怖い……)

初めて魔物と対峙した時とは違う怖さ。恐怖と言うより畏怖と言
った方が相応しいかもしれない。

聖良はくるりと後ろに向き直ると、席に戻った。

「ごめんね。こんなに無理させちゃって」

七緒が申し訳なさそうに声をかける。

「いえ。最終的に引き受けたのは私ですから」

聖良はスカートのポケットから取り出したハンカチで、顔の汗を
そっと拭う。

「暁先輩って、なんかハッキリ言えないんですが……怖い人ですね」
七緒はきょとんとして首を傾げる。

「そう？　晟夜様よりは、いつも優しいけど」

「それに……七緒先輩に似ているところがありました」

宗蓬院家当主の双子の妹、暁。彼女は兄の血を持っているせいか、
怖い。それでも分家、しかも養子なのにどこか七緒に似ている。分
かっているはずなのに言葉に表そうとすると、姿を隠してしまうか
ら、言い表せない。

「それは私が怖いってことかな？」

「違います！　えっと」

分かっているよ、と囁くような笑顔を聖良に向けた。

気が付くと、最後の拳法部部長の握手も終わり、航が閉式の言葉
を述べる。やっと対面式が終わるのだ。

「聖良。この後、寮に一回戻って」

「え？」

「どのみち今日は親睦を深める程度。それより今は高天原で起こっ
てることを宗蓬院に伝えなきゃ」

「では改めて。現宗蓬院家当主、宗蓬院晟夜」

生徒会メンバーの団欒の場である寮のリビングに宗蓬院兄妹二人を含めた七人が集まり、低いテーブルを囲んで座っていた。

「よくぞお越しになりました。晟夜様」

七緒は自分の一族の当主に向かって頭を下げた。

「毎回言っているだろう。お前は宗蓬院分家の者であるが、宗蓬院の血はひいていない。ゆえに敬語などいらないと」

「はい……すみませ……じゃない。ごめん」

七緒はこの言葉を言われるたびに複雑になる。

自分の好きな人と、晟夜と敬語や身分を気にせず話せるのは、恐らく分家では七緒一人。初めはそれに惹かれた。その優しさに惹かれないかと思えることがある。だからと言って、この気持ちを消すことなんてできなかった。それを優しさと思え。

「で、私達に念を押して寮に来るように言っただけでことは面倒事、だな？」

「暁の好きな相当のね。とりあえず一通り説明するから、質問は終わった後でしてくれるとありがたいけど」

七緒は頭の中に当時の情景だけを残すように、目を瞑って吐息をつく、異国の出来事を話した。まず聖良をつれて碧紗に会いに行った時のことから始まり、事細かに。誤解を招かぬよう、言葉選びにも注意して。

しばらく七緒の語りは続き、星来が初めて雷を操り、魔物を追い払ったところで話は終わった。晟夜と暁は怪訝な顔をしていた。

「本題に入る前に、さっきさうりと言ったが、蒼尊、見付かったんだな」

先に口を開いたのは暁。自分の話題に触れられ、聖良はびっくりとする。

「今の話からすると……完全覚醒にはまだ至ってないな」

「完全覚醒はしてる。ただ能力をうまく使いこなせないだけで」

「力を使いこなすことが完全覚醒と言うんだ。早く使いこなしてほしいものだ」

七緒が弁護する中、暁は横目で聖良を睨んだ。

星来が初めて雷を放ってから一週間近く経ち、聖良は七緒と共に鳴莫みょうぼと呼ばれる魔物の中では最弱らしい猿型の魔物と対峙して実戦練習を行っていた。

一度に五匹程度までなら対処できるが、それ以上は手が回らない。せっかく蒼尊なのだから雷を操って蹴散らしたいところだが、どうしてもあの時のように放てない。良くて電線がショートした時くらいの電気しか出てこない。そうやってそうこうしているうちに蓮が炎で軽く焼き払う。その都度、自分の無力さと蓮の剛強さを痛感した。

「今は蒼尊のことはどうでもいい。白尊に連絡はしたのか」

晟夜が本来話すべき話題へと戻す。

「もちろん。途中で何か所か寄らなきゃならないところがあるから、巽に来るには少し時間がかかるって」

「……玄尊は」

七緒は一瞬言葉を詰まらせたように見えた。晟夜は問い質す。

「死んだわけではあるまいな」

「いや。ただ私は実際に会ったわけじゃないし、久遠から聞いただけなんだけど。『あの人の四天士に必要不可欠な何かは永遠に死んだ』ってさ」

聖良にはそれが自分にも言っているように思えた。

聞くところによると、十六年前に自分は四天士に必要不可欠な力を失った。玄尊も力を失ったのだろうか。いや、だったら四天士に必要不可欠な何かなんて曖昧な表現を使うだろうか。しかも“失った”のではない。“死んだ”のだ。自分の過去以上に、玄尊には一体何があったのだろうか。

「せめてこのことは玄尊の耳に挟んでおかなければな」

「住所は久遠だけが知ってる。今の状態になる前は親友同士だったらしいから」

晟夜が怪訝な顔をして、眉を顰めた。^{ひそ}

「なに、今まで聞いていなかったのか」

「まるっきり知らないってわけじゃないよ。坎に住んでるのは知ってる」

「それだけじゃ、役に立たないだろう」

「晟夜。玄尊のことは白尊に任せておけばいい。早く長老にも連絡しないと。本家も全面的に協力し……」

ボタン、と大きな音がし、続いてリビングまでドタドタと走り迫る音が響いた。

「あつきらー！ つぎやう！」

ツインテールの小柄な少女が暁に飛び付こうとすると、暁は肘を曲げて横に突き出し、肘が少女の額に直撃した。

「コラ。危ないだらがっ！」

「そんなことより聞いてよー。この黒糖あんぱん、甘さ控え目でおいしーの！」

少女は手に食べかけのあんぱんを持って、目をキラキラ輝かせている。

「つか、綾乃。^{あやの}今のお前、明らかに不審者だぞ」

「んー？ んぐんぐ……」

あんぱんをたった二口で平らげると、綾乃はぴよこんと頭を下げる。

「こんばんわー。煌燐学園三年生、拳法部部長の五十嵐綾乃^{いがらし}でえす」

「（同年！？）」

「（とっ、年上！？）」

生徒会四人と、さすがの聖良もこれには驚いた。ツインテールの髪型のせい、子供によくあるようなゆっくりとした喋り方のせい

か、高校生とするなら、いくら頑張っても一年生にしか見えない。
呆然としている明華の五人の傍ら、晟夜が静かに立ち上がり、階段を上る。

「晟夜。寝るのか？」

「……騒がしいのは嫌いなだけだ」

吐き捨てるように言うと、二階へ消えていった。その途端に明華の五人から溜め息が漏れた。晟夜がいなくなったことで、張りつめていた空気が一気に緩んだのだ。

「はあー。なんなんだよホントに！」

「さっすが晟夜様。バカでも黙る」

「誰がバカだよ」

「じゃあー、黙らなかつたあたしはバカじゃないー？」

綾乃は首をかしげた。暁はつかさず突っ込む。

「誰がどう見ても世界公認のバカだろが」

凍り付いたような束の間の沈黙の後、それを突き破るような泣き声がりびング、いや寮中に響く。上にいる晟夜は相当迷惑がっていることだろう。

「うわーん！ 暁のバカー！ そんな風に言うことないじゃんかー！」

そんな状況になっても、暁は完全に無視を決めていた。他五人も対処の仕方が分からないので、とりあえず放っておく。しかし、泣き止む様子がないので、とうとう暁が抑え気味に怒鳴る。

「ったく。あっちじゃ朱夏なんだから、もっとしっかりしたらどうなんだ！」

「そうなんだ。朱夏ならもっと……」

七緒は今、何気無く呟いた内容に恐怖を覚えた。

「えー！？」

綾乃が三年生だと分かった時より、はるかに驚愕した。敏希ですら、ケータイで部員に送るメールを打つ手が止まった。生徒会四人は輪になってひそひそ話を始める。

「え、私こんなの拾われたの？」

「こんなの仕えていたのか？」

「こんなのが僕らの国を治めているわけ？」

「なに、俺こんなのより格下なの？」

「こんなのゆーなーっ！」

綾乃に一齐に生徒会から不信の眼差しが注がれた。それが相当怖かったらしく、綾乃は暁に助けを求める。

「暁あー。みんながいじめるよーっ！」

「正論なんじゃないの。向こうが」

止めの一言。綾乃は泣き声の音量を上げて、また泣き出した。でも、本当に困っているのは、どちらにつくべきか悩む聖良だったりする。

「でもちよっとおかしいんじゃないの？ 五帝には中つ国の自分がいないはずじゃあ」

輪から抜けた七緒は暁に尋ねる。

「私だって信じられなかった。でも認めざるをえないんだ」

「あの、質問いいですか？」

聖良が小さく挙手する。二人もそちらを向く。

「なんで五帝には中つ国の自分がいないか、でしょ？」

聖良はこくりと頷く。

「そうだね。中つ国の自分と高天原の自分は花と葉の関係に近いかな。葉が光を浴びて栄養を作らないと、花は咲かない。でも五帝は例外で、高天原でしか存在しない、はずなんだけど」

七緒は今のことはどう説明すべきか迷った。

「高天原のみの存在ではいられなくなった――即ち、もしかしたら五帝の力も低下している、とか？」

「かもな。最初からそれに気付けば良かったな……」

「うえーん！ 暁のバカ！ バカ！ バカーっ！」

一人で泣いていた綾乃が発狂し出した。

「うるっさい！ いい加減にしないと天日干しにして乾物にしてや

んぞ！」

「あれだけ泣けば、嫌でも水分飛ぶんじゃ……」

そして、結局綾乃が泣き止んだのは、消灯時間ギリギリだった。

第四章：月光の下、風の少女

それは、こんな夢だった。

気が付けば、聖良は広大な草原の真っ直中にいた。

一周見渡しても、若緑の草原とそれを覆う半球の蒼穹そらしかない。風に吹かれてそよぐ草の音だけが響く。

「ここ……高天原？」

少なくとも風籟島にはこんな場所はない。北海道ならと思ったが、山がないのでその可能性はない。

その時、ドサリと。

聖良の目の前に何かが投げ出された。そちらに目を向けると、それは短い紅い髪を持つ人だった。それから推測される人物は、ただ一人。

「れ……ん……？」

顔を見ようとした時、ある明らかな異変に気付く。

目は固く閉ざされていて、地と接している片頬から草が赤く染まっ
てゆく。顔だけじゃない。体全体がそうだ。

「そんなんっ！」

太く鋭い爪で胸を抉えぐられたような不安感を覚える。すぐにでも駆け寄りたいのに、足が固定されたように動かない。

再びドサリと音がし、恐る恐るそちらも見ると、全身痛々しい程の傷を負った、凌雅、斗暉、堯宗。彼ら全ての顔に生気が見られない。

「そんな……ことって」

聖良が涙を浮かべると、人の形をした黒い何かが、光さえも吸い込むような漆黒の日本刀を携え、不気味な印象を醸し出しながら近

づく。それは、蓮を見下ろすと、容赦など知らないように刀を振りかざした。

——殺される。

「やめてえええっ！」

悲痛な思いで叫んだ。

——どうして、どうして……。

聖良は飛び起きた。息があがっていて、呼吸がうまくできない。ひどく実感のある夢だった。

——今の、寝言として言っていないだろうか……。

煌麟の生徒は近くの宿泊施設に滞在することになっているが、晁夜、暁、綾乃の三人は、この個室寮を利用している。部屋は聖良の隣から三つ。しかも聖良の部屋と接しているのは晁夜の部屋。今の寝言として発していて、晁夜に聞かれていたとしたら、明日の練習に出られない。出たくない。

「……こんな状態で、また寝られるのかな」

それでも意地でも寝ようとした時。

——……。

「笛の……音？」

高く澄んだ、触れれば壊れてしまいそうな繊細な音。リコーダーでもフルートでもない。とにかく聖良が今まで聞いたことのある、どの笛の音にも当てはまらない。それどころか、それを笛と呼んでいいものかさえ、分からなかった。

（でも、誰が？）

この、風が囁くような音色。一体どのような人が奏でているのだ

ろう。気になるが明日は早い。でも――

「どちらにせよ、寝られないから、いっか」

ベッドから降り、ジャージに着替えてから、そっと静かに部屋を出た。

「と、まあ、出たものの……」

寮の外に出てみたが、音が流れてくる方向がわからない。普通ならある程度の方向はわかるのに、この音は分散されたように様々な方向から聞こえてくるように感じる。このことからして、やはりこの笛と演奏者は只者ではないだろう。

ヒュオオオ……

そよ風が滑るように吹いた。

陸風だ、と思ったその直後。今度は木々で遮られているはずの海から、打ち寄せる波のように風が吹く。

（普通、そんなすぐに交互に吹かないでしょ……）

そう自分に言い聞かせた後、とても懐かしい感じがした。どこの、どういふところが懐かしいのかは分からない。そのうち、これは笛の音が引き起こすものだと思えてきた。関連づける根拠はないが、そんな予感がする。

「行くだけ……行くだけ行ってみよう」

聖良はこちらと海岸を分ける林へ向かう。こんな真っ暗な時に林の中に入るのは危険だが、そこは真っ直ぐ十歩進めば出られるほど小さいので、迷うことはまずないだろうと判断したからだ。

月光がほのかに木や葉の影を落とし、笛と波の音が静寂を強調する。ガサガサと茂みを進む音が、一段と際立つ。

聖良は海岸に人影を認め、音を立てないように茂みに隠れながら

覗く。

海側に顔を向け、舞う木の葉のような軽やかなステップを踏みながら横笛を奏でる後ろ姿。風さえもが聞こうと集まり、その人を包むと漆黒の髪がふわりと浮く。細かな指先の動きさえもが神秘的な空気そのものだった。

「だれ……？」

その人がくるりと一本足で回ると、それが誰だかやっと分かった。

「暁先輩っ？ ……ひゃっ！」

「誰だッ！」

聖良は身を乗り出すように見ていたので、とうとうバランスを崩して倒れた。

暁は演奏を止め、表情を陰しくして警戒する。暁に向かって吹いていた風もピタリと止まった。

（やばっ！ 怒られ……いたっ！）

逃げようとしたが、茂みの枝に髪が引っ掛かってしまったらしく、頭を動かすと痛い。外そうと手を動かすと、茂みがガサガサと動き、暁に居場所を教えていることなど、あまりの必死さに気付かない。奮闘するが、どうしても外れず、戸惑っていると頭上でガサリと音がして、頭は動かせないので、視線だけを上げられるだけ上げる。暁が茂みを手でどけて、こちらを見ていた。

「君は……明華の剣道部の」

「こ、こんばんは。剣道部部長代理、新堂聖良です……」

何言ってるんだろう、自分は、と思いながらも、聖良は引きつった顔で苦笑いした。極限まで追い詰められて、かえって笑ってしまう。対し、暁は眉一つ動かさない。怒っているだろうと推測した聖良は、ぎこちなく笑いを止める。

ややあつて、ようやく暁が口を開く。

「立たないのか？」

「えっと……枝に髪が」

「ああ。どれ。動くなよ」

暁はしゃがんで、絡まりをほどき始めた。手元が見えない聖良だと、あんな奮闘しても駄目だったのに、暁がやると三つ編みをほどこと同じくらい、さっさと簡単にほどいてしまった。

「あ……ありがとうございます」

「こんな夜中にどうした。夜の散歩か？」

聖良は立ち上がり膝についた土を払って、足早に立ち去ろうとする前に質問をされてしまった。その時、ふと暁の片手に握られている笛を見た。

長さは中指の先端から肘までの長さはより少しあるくらい。フルートよりは短い。この上ないくらい白い笛には、所々華美過ぎない宝玉の装飾が施されている。

重くないのだろうか、と思ったと同時に、質問されていたことを思い出す。

「ちよつと起きちゃって。そしたら笛の音がしたので、どこから聞こえるんだろうと」

「そっか。ごめんな。迷惑だっただろ」

「いえ！　そういうことではなく……」

聖良は顔の前で両手を振った。暁は表情を変えないが、いくらか柔らかくなっていった。

「これから戻るのか？」

「あ、えっと……」

考えていなかったの、咄嗟に返事が出ない。言われてみれば謎の答えはもうわかっていた。

「一緒に涼まないか？　ずっと独りで笛吹いてて、ちよつと人が恋しくなってきたんだ」

独りで――

いつだったか、そんなフレーズを聞いたことがあった気がする。人と接していれば、飽きるほど聞く一言なのに、なぜか気になる。

前の時にこう、何かの説明の後に、寂しそうに――

「どうした？」

「なんでもないです！ あ、涼みます！」

暁は背を向けて海岸の岩場へ歩くと、聖良も茂みから出て、ついていく。

月光が朧気に海岸を照らし、朧気な影が岩場に落とされる。

「不思議だと思わないか？」

暁が夜空に浮かんだ満月を見上げながら、呟いた。

「この光、本当は太陽のものなのにさ、月一つ隔てるだけで、こんなにも淡く幻想的な光になるんだ」

そう言えば、と聖良は納得した。月は自ら光っていない。太陽の光を受けて輝くから。鏡が光を反射するのは違い、あんな明るい光が月を隔てただけで、こんな優しい光に。それは鏡と同じくらいの反射をする力がないからかもしれないが、やはり不思議だった。

「ほら、こっちだ。この岩、意外と座り心地いいぞ」

暁は大きく平べったい岩に座って手招きする。促されるまま聖良は座ると、ひんやりとした岩の感触が心地良い。

「その、さ……ごめんな」

いきなり謝られ、聖良は目をぱちくりさせる。

「ほら、寮で皆集まった時。私、すぐくツいこと言ったじゃないか。ごめん。知らず知らずのうちに、なんと言うか……晝夜っぽいところが出て……」

暁は申し訳なさそうに、しゅんと肩を落とした。怖い印象が根付いていた聖良にとって、それは意外で目を丸くし、動揺してあたふたとする。

「あの、その、えっと……そんなに気にしてませんから。大丈夫です」

「無理なんかなくていい。気が済まないなら、殴ってくれても」
「違います！」

思わず怒ったように言い放ってしまい、聖良は身を縮めた。ちら

つと暁を向くと、既に対面式の時のような堂々とした表情はなかった。そして微かに笑い、一言。

「……ありがとう」

「お礼だなんて、そんな」

暁はより一層、にこやかに笑う。

「優しいな。あんな兄じゃなくて、こんな優しい妹が欲しかったのにな」

そう言った暁の顔も優しく変わっていた。そんなところが本当に七緒にそっくりだ。

「聖良って呼んで構わないか？ 私のことも呼び捨てにしていいいし、敬語もいいから」

似ているついでに七緒先輩と同じこと言うんだな、と聖良は思った。

「呼び方は構わないんですが……私は」

「じゃあ言い方を変える。この合宿期間だけ、姉妹になるっていうのは」

「姉妹、ですか？」

「そう。まあ、姉妹とするなら、こんな似ても似つかないけどさ」失笑する暁を見て聖良は目を伏せて考えた。

「分かりました。暁、でいいんですね」

「うん。なんか、嬉しいな」

二人は顔を見あって笑った。

聖良はさっき抱いた疑問を暁に投げ掛ける。

「そう言えば、暁の笛……なんて言うの？」

ああ、と暁は笛を持ち上げる。持ってみるかと思し出すと、聖良はそれを受け取った。

予想よりもずっと軽い。それどころか、全く重さを感じない。目を瞑っていれば手に笛があるなんて思えないほど。笛に埋め込まれた玉が月を映し、静かに輝く。

「風籟の音」って言うんだ。高天原指折りの秘宝」

「風籟って、この島の名前と同じ……」

「そう。こいつも喜ぶかなって思って、吹いてみたらいつもよりずつと音の伸びが良かったんだ」

「へえ……。この埋め込まれている石は？」

「正確に言うとなじやないけどな。瑠璃、翡翠、瑪瑙、珊瑚、玻璃。控えめな輝きがかえっていいだろ」

聖良は風籟の音を暁に返した。

自分も吹けるようになったら、と思ったが、手に持った瞬間、悟った。これは暁にしか吹けないことを。

「んーっ……やっぱここは星が良く見えていいな。東京はこの半分くらいだ」

「話は聞いてたんですけど、やっぱりそうなんですか？」

「ああ。東京は夜でも明るい。人工の光が邪魔して、自然の光が見えやしない」

暁は星空に手を翳した。そうすると、なんだか星が自分だけのものになった気がするのだ。

「皆とは、七緒達とはうまくやってる？」

「え？」

「あ、いや。そんな深い意味はないけどさ」

暁は手を引っ込めて、聖良の方を向いた。しかし、聖良は視線を逸らすように俯いてしまった。

うまくやっているか、と訊かれたら、肯定できる状態なのかもしれない。

七緒先輩も同じこと訊かれたら、肯定するかもしれない。

でも――

「……私、自分が嫌い」

予想だになかった返答に、暁は眉をひそめた。

「蒼尊のくせに、能力一つ満足に操れない」

ここ最近どうだろう。

自分が仕留めた魔物の数と、七緒先輩、即ち蓮が仕留めた魔物の数。比べてみて、なんと言えいいのか。

「皆の足引っ張って。私なんか、全然役に立たなくて……」

目が潤む。ずっと悩んでいたことを溜め込んで、つらかった。いなくなってしまういいのに。何度思ったことか。

すると、暁は後ろに手をつけて、空を仰いだ。

「ジグソーパズル、って知ってる？ 知らないわけないよな」

何を言い出すんだろう、と思ったが、聖良はそっと耳を傾けた。

「思うんだ。パズルのピース一つ一つが人で、出来上がった絵がセカイ」

海風が吹いて、暁の髪を揺らす。

「ジグソーパズルのピースって、四辺に必ずへこみとでっぱりがあるじゃないか。同じように見えて、実は特定のピースじゃないと合わないんだよな」

投げ出した足をぶらぶらと宙をかく。

「で、ピースのへこみやでっぱりが、人のいいところや悪いところだ。

絵になるには、必ず誰かが自分の凸凹おうちを必要としてる。逆言っちゃ

えば、自分の凸凹がないと誰かは絵……世界に入れないんだ」

暁と聖良は同時に互いを向き、顔を見合わせた。

「聖良はへこみが戦えないところなんだな。でも七緒がちゃんとカバーしてくれて、ちゃんと世界を成しているじゃないか。きっと、同じように聖良の優しさを求めている人がいる。私かもしれないが」

暁の温かい手が聖良の頭に乗せられた。

「だから、気にすることなんてない。自分なりに頑張っていけばいい。七緒は絶対認めてくれる。そんな人なんだからな」

——ずっと、その言葉が欲しかった。

「強かったな。辛かっただろうな。誰にも弱音を言うことなく、一人で受け止めて」

「うっ……うっ……」

溜め込んでいたものが、一気に涙として流れ出た。

近くにいた人だからこそ、言えないことがあった。

だからと言って、あまり親しくない人にも言えない。

今日、暁が来てくれて、良かった。本当に。

「そうだ。聖良の為に即興で曲を奏でてみようか。心が休まるように」

そう言って、暁は風籟の音を構え、吹き始める。聖良は膝を抱え込んで目を閉じた。

さっきの曲と違い、緩やかな音の繋がり。慰め、と言う言葉がぴたりだった。綺麗な音色。なだらかな旋律。

風が、再び集まってくる。

——大丈夫だよ。

——泣かないで。

(……うん)

いつもなんの変哲のない風音が声に聞こえて慰めてくれる。

暁は風の精なのかもしれない、と聖良は思った。

なんらかの形で、人間の形をしているだけで。そう思いながら、

風籟の音で唄を奏でている暁の横顔を見ていた。

「ねえ、高天原での名前はなんて言うの？ 私はセイラって言う名前と同じで、でも漢字は違って、星が来る、って書くの」

暁は口から風籟の音を離し、風と月光が似合うような微笑みを浮かべ、答える。

「……錫弥だ。シャクヤ」

そして再び風籟の音を奏でた。

夜空と静寂の下、幻想の旋律が響いていた——。

第四章：明華と煌麟、互いの実力

「どうしよどうしよどうしよーっ！」

夏の暑さがまだ活発になっていない朝。聖良はポニーテールの髪を揺らしながら学園内を走っていた。

あの後、聖良は笛の音で眠ってしまったが、暁に起こされ寮に戻った。部屋に戻った時、時計は四時を指し示していたので寝坊は覚悟していた。が、まさか本当に寝坊するとは。

「七緒先輩と暁は許してくれるかな。でもでも、晟夜先輩はっ！」

あの二人は許してくれるかもしれない。でも今一番怖い人はどうか分からない。

聖良は腕時計を見た。チャイムが鳴るまで、あと数秒。

「あう……もう絶対に合わない……」

「あ！ 新堂ー。こっちだよー」

自分の足に、倒れそうになるほどの急ブレーキをかけ、声の方へ振り返った。剣道場とは逆の方向の曲がり角から、仁史が顔を出して手招きしている。

「何ですか？」

「説明は後！ 時間ないし。こっち！」

仁史は聖良の手を引っ張り、走り出した。

「ごめんね。新堂が起きなかったのと航がバカしたから連絡がいかなかったんだ」

「はあ……」

よく分からないが、とりあえず連絡が自分に行き届かなかった故に探しているうちに、こんな時間にこんな場所にいるのだと勘違いされているらしい。

（結果オーライってことにしておこう……）

チャイムが鳴ったのは、その直後だった。

立ち止まった場所は、学園内の一角に作られた特別武道場だった。漆喰で固められた壁、瓦が敷き詰められた屋根は江戸時代の屋敷を思わせる。

剣道部は普通に剣道場で行うはずなのに。西園寺先輩も乗馬部で関係ないはずなのに。

「説明は中ですよ。入って」

察してか、付け加えて仁史は引き戸を開けた。

まず、ちゃんと玄関があり、そこで一つの部屋になっていた。上履きと靴下を脱ぎ、それを下駄箱にしまおうとメインの場へ続く戸を開けた。

中にいたのは、七緒、航、晟夜、暁、綾乃。しかも横にいる仁史を含め、よくカンフーのシーンで着られるような拳法着を着ていた。「やっと来たー！ ごめんねえ、虎堂が置き手紙を書いたんだけど、あのバカ、それをちゃっかり持ってきちゃったからさ」

七緒が掌を合わせながら言った。

「いえ、それよりこれって一体……それに、今皆さんが着ている服って？」

「これは高天原で武術の訓練をする時に着用する服。高天原のジャージに値するって感じかな」

「それってつまり、高天原の人で集まった、ってことですか？」

七緒は頷いた。

聖良は再度、今いるメンバーを見渡す。

「あれ。原瀬先輩は？」

「敏希は弓道部の方に行ってるよ。部長対決が終わったら来るって」七緒の言葉で、身に締めた心の何かが欠けてしまった気がした。いない。それだけなのに、とても嫌だ。

「敏希がいた方が良かった？」

「えっ！？ あ……えっと」

仁史は微笑む。動揺が知らず知らずのうちに肯定を促してしまっ

たのに違いない。

(動揺しないようになりたいな……)

ちよつと後悔した後、本当に訊きたかった質問を投げ掛ける。

「なんで、皆さんここに？」

仁史に質問したつもりだが、仁史は七緒と航と話始めていて、聞こえていなかったようだ。代わりに、暁が答える。

「昨日の話を聞いて急遽な。今の状況だと、いつ強者が襲撃してくるかわからない。だから名目上、選抜と偽って高天原の人を集め、互いに技を研ぐことにした」

「そっか。高天原の武術は中つ国にはない、体術と剣術を練り合わせるものだからね」

「……え？ ん？」

七緒が二人の会話に違和感を感じ、つかつかと入り込む。

「いつの間に仲良くなったの？ てか今、タメ語……」

「夜中に色々。合宿中限定で私達は姉妹ってわけ」

暁は自慢気に聖良と肩を組んだ。少し顔をしかめた七緒は暁ではなく、聖良に詰め寄る。

「なーんで同じ学校で、四天士同士なのに、私にはタメ語使ってくれないのかなー？」

「えっとお……その、尊敬しているからであって……」

「はいはい。私の妹をいじめるなよ。七緒」

「うるさいよ暁」

それらしくない、一見普通に話しているような口論が始まった。使う言葉一つ一つに皮肉が込められ、聞いている方も実に痛い。この勢いに聖良はこれから何をするかを訊くタイミングを完全に失ってしまった。

「ほーんと仲良いよな。あいつら」

「見てて和まないけど、ね」

仁史と航が呆れたような口振りをして、聖良に近寄ってきた。

「あの、これから何をするんですか？」

「明華と煌燐で簡単な試合だ。組み合わせは俺らであみだくじで決めた。新堂の分も決めちゃったけど、いいか？」

「いいですよ。それで、私の順番は？」

「最後。ちなみに俺は大当たりの審判なんだよな。試合見るだけの」

航がつまらなそうに言った。

「さて、そろそろくるかな」

「原瀬先輩ですか？」

聖良が期待を込めて訊く。

「違う違う。怖い嫌なら耳塞いどけー」

航が何のことを言っているのか、全く意味が……

「暁。七緒。いい加減にしないか。見苦しい」

よく分かった。晟夜の叱責が来るぞ、という意味だったのだ。

ようやく口論が収まった二人を横目に、航は大きく息を吸う。そして、普段の航とは大きく違った引き締まった声を武道場全体に響き渡らせる。

「一組目の試合を行う！ 明華、西園寺仁史。煌燐、五十嵐綾乃。前へ」

呼ばれた二人はそれぞれ指定された位置につき、二人以外は壁寄りへとさがる。その際、聖良はあることに気付いた。

「二人共、竹刀を持ってない？」

「あの二人は体術で競いたいみたい。西園寺はテコンドーやってるし」

異王宮に三人で突入した時に斗暉、即ち仁史が蹴りで魔物を蹴り飛ばしていたことを思い出しながら、七緒の付け足しに納得した。

二人は航の合図で礼をする。

「よろしく。互いに高天原の人間である以上、手加減する気はないから」

「うんっ！ そっちこそ、女の子だからって手え抜かないでねえっ！」

綾乃はにこにこ笑い、ツインテールがぴよこんと揺れる。

聖良には失礼だと思いながらも、この人が拳法部部长なんて到底思えなかった。（しかし、仁史こそあんなことを言ったが、他明華生徒会もあり得ないと連呼していた）

「始めッ！」

航が鋭さを増した声を発す。

（さて、仮にも名門、煌燐の部長。いったい、どんな風に……）

途端、視界から綾乃の姿が消え、ツインテールにまとめた一本の髪の手だけが視界に残る。

仁史は危険を察し、少し身を反らすと蹴りあげた足が下から伸びてきた。綾乃が身を二つに折り、もう一本の足だけで立ち、両手を広げてバランスを保っている。そして更に驚くべきは、その形相の変わり様。

（今までヘラヘラしてたのは、いったいどこに！？）

微笑わらっている。余裕の笑みか、自分を嘲笑わらっているのか。

綾乃がそのまま体勢を崩すかと思われたが、下半身を回転させ、体を支えていた足で二発目の蹴りを加える。仁史は自分も下手に体勢を崩すよりはとバック転してこれを躲かわす。

（さすがにこれは無理があったな。でも、あっちだって同じこと！）

仁史は片膝を立てる形で足をつけ、膝を地につけた方の足をバネに綾乃に突っ込む。

「はっ！」

素早く身を振よじらせ、飛び蹴りになるように足を突き出す。自分は小柄だし、テコンドーをやっているのもあって脚力には自信があるし、ちょっとした距離を跳ぶのもお手のものだった。……が。

パシッ！

その音がいったい何を示したのか、最初仁史にはわからなかった。意識を戻し、よく見ると、蹴りが綾乃の小さな手一つで受け止め

られている。

（このままで……たまるかつ！）

受け止められている足を綾乃に近付くように少し曲げ、もう片方の足を蹴り上げた。

綾乃は当たるか当たらないかの距離で、顔を横にそらして躲したので、前髪が風で揺れる。

「……くそっ！」

仁史は半ば自棄^{やけ}になり、今度は上半身を起こして拳を構える。綾乃は慌てて離れようと手を離すが、間に合わず、仁史の拳が頬をかく。

まさに、良く言えば石火の早業。

（よし。少し自棄になったけど、冷静にいけば、勝てる！）

「来る、な」

「暁？　くるって、何が？」

隣で腕を組んでいた暁に、聖良は訊ねる。

「綾乃、いつもはヘラヘラしてるけどさ。自分のミスで、つまりある程度予測できた打撃を受けた時は平気なんだけど。今のような予想外のを食らうと……」

「……食らうと？」

「見てろ。しかし、あんな無茶をする奴も久しぶりに見る」

綾乃は焦る様子もなく、頬を手で軽く擦ってから、無言で構えをとる。それに倣って仁史も構える。

そして、先に動いたのは綾乃。

（来た……。っ！？）

動きが微妙に違う。さっき仁史が拳を掠める前の動きを言葉で表すなら、俊敏。対し、今は鋭利と言った方が相応しい。

（あー。怒らせた、かもな）

綾乃の突きが容赦なく仁史に襲いかかる。右からの攻撃を防いだと思ったら、次は下から。それを防いだと思ったら、次は正面——これの繰り返し。全く反撃する隙を与えてくれない。それどころか、長時間やり続けられると、こっちに隙が出来てしまいうに違いない。

（こうなると、足元を崩——! ?）

いつの間にか腹の前に綾乃の掌が突き出されていた。打撃を食らわせるわけではないようだ。

——何をしよう?

そう解析しようとした瞬間、それは起きた。

「えっ？」

ドダッ!

訳がわからぬまま、仁史は床に叩きつけられていた。

誰よりも凝視しなくてはならない審判の航もぼかんとしてしまったている。

「審判。判定」

「お? あ、ああ。勝者、煌燐の五十嵐綾乃」

腕を組んで試合を見ていた晁夜に指摘され、航はやっと判定を下す。直後、今までののはどこへやら。綾乃はびよんぴよん跳ねだした。

「あつきらー! やったよー! 勝ったよー!」

「おいっ! 寄るな触るな抱きつくな!」

騒ぎ立てる二人をよそに、仁史は座り込んだまま、今起こったことを把握しようとしていた。

ずっと見ていて目が疲れたのか、七緒は目を擦り、その答えを言う。

「発勁はっけいでしょ。ね、暁」

「さすが七緒」

抱き付こうとした綾乃の額を押さえながら暁が言った。

「気の力で相手を弾き飛ばす技。習得するのにすごく時間がかかるはずなのに、綾乃が習得してるなんて、意外」

「あたしは天才なのー！」

手をばたばたさせて綾乃が言った。

「はい。そうですね。バカと天才は紙一重ですね」
「ぷぎっ！」

暁が暴れる綾乃に拳骨を加え、大人しくさせた。

「次、巽でしょ。頑張って」

仁史が七緒に歩み寄りながら言った。

「オッケー。西園寺こそ、さっきの大丈夫？」

「ヨユーだって」

七緒は壁に立て掛けてあった木刀を手に取り、所定の位置へ向かう。

仁史はさっきので痛めたのか、背中をさすりながら聖良の隣で座り込んだ。

「っそ……。ホント悔しい」

「背中、大丈夫ですか？」

聖良の問いに仁史は微笑んで答えた。痛いのか、どこか引きつっているが。

「うーん。後からくるよ。これ。ま、平気」

守るためには強くなきゃね、と仁史が小さく呟いたのは、聖良には聞こえなかった。

「二組目。明華、巽七緒。煌燐、宗蓬院暁。前へ」
木刀を持った二人が相對して立つ。

「暁には負けないから」

「やだなあ。聖良のこと、まだ怒ってんのか？」

「それも含む、ね」

七緒は不敵な笑みを浮かべた。

とりあえず暁にはどんなことでも負けたくなかった。宗蓬院本家とか、そういうのは関係なく。知り合った瞬間から意気投合し、姉妹のような仲。例えば些細なようなことでも、負けたくない。

航が構えの号令をかけた。二人はそれぞれの流派の構えをとる。

「待ったなしッ！ 始めッ！」

地を蹴ったタイミングは、ほぼ同時。ドッ、と二本の木刀がぶつかり合い、それを挨拶代わりにすると、すぐ間合いをとる。七緒はしっかり足で踏み込み、木刀を振りかざす。叩きつけるように木刀を振り降ろすと、暁は木刀を横にして受け止めた。

「あれから鍛練はちゃんとやってるか？」

「愚問だね。やってないと言っても言うと思った？」

暁は木刀で薙ぎ払い、七緒は膝を曲げて体を小さくし、跳んで避ける。そのまま左足を伸ばし、体を軸にして全体を捻るように回し蹴りをする。瞬時に反応した暁は、屈んでそれを頭上で通過させる。

「その程度か？」

「ふん。今のを決定打になんかしないよ」

七緒は着地し、暁は体を起こす。

「……」

すぐさま攻撃には移らず、暫しの間、互いに目を見つめあう。

そんな二人を、聖良は瞬きもせず見ていた。

（すごい。やっぱり、七緒先輩も暁も、すごく強い）

生死を賭ける戦いじゃないのに、気迫がすごい。攻めの動きに負けたくない気持ち溢れ、見ているこちらも息が詰まる。

そして、ただ一つ。さっきの仁史と綾乃の戦いと歴然とした違いがある。それはさっきの戦いを“相手を打ち負かす”戦いだとする、この二人のは“互いの力を測りあう”戦い。相手の力を知り、己の力も知る。表情もどこか楽しそうだ。

「さあ、そろそろ再開しようか」

「あら？ 私は奇襲を待ってたのになあ」

「分かってる。七緒は奇襲からのカウンターを望んでいただろう。」

奇襲の際は必ず仕掛ける方も油断が生じるからな」

「なーにとぼけてんだか。暁はそんなことないくせに」

七緒はくすりと笑った。

「手っ取り早く、終わらせよう」

「私達のは、大体三分以内に終わるしね」

「ああ。しかしまったく、私達のは無駄話が多くて敵わないな」

戦いが再開される。木刀一本と対術で、二人は戦う。身を翻し、跳び、屈み。木刀で薙ぎ払い、振り下げ、振り上げ。剣道のように間合いをとらずに、いかに連続して躲し、攻撃できるかが二人の勝負。かと言って、でたらめには見えず、それどころか細かい動作、呼吸でさえも計算しつくされているように思えた。

ドガッ、と木刀がぶつかり合い、押し合いになる。

「決定打一つも満足に与えられない奴になってしまったか？」

「さっかから愚問多いよ。暁らしくない。ま、終わらせてあげるから、いいけど」

七緒は暁の横に回り込むように身を退いて避けると、急に抵抗を失った暁は前のめりになってしまう。

（しまった！ 私としたことが……）

暁は出来る限り視線を背後にやる。

そこにあった、川のように止まることをせず、流れるように攻撃体勢に移る七緒の姿。

（このままで……たまるものかっ！）

そのうちに、七緒は容赦なく木刀を振り降ろした。

ドッ！

七緒の木刀は、暁の背に直撃していた。

「勝者、巽……」

「待つて。虎堂」

判定を下そうとした航を七緒が制す。

不思議に思った航は視線を暁に移動させると、その理由が分かった。

「やるなあ。暁。完全に油断したところを狙うとは」

「いや。これはがむしやらだ」

暁の腕が横に伸び、七緒の鳩尾みぞおちに拳がめり込んでいる。暁は木刀が振り降ろされる一瞬にそれを為したのだ。

「そーんじゃ、判定はどーすりゃいーんだ？」

「引き分け、てことにしといて」

二人同時に言い、更に同時に座り込んだ。

「はあっ……。暁、打撃のスピードが上がったんじゃない？」

「七緒こそ。打撃の重みが格段に上がった」

肩で息をしながらも、互いに誉め称え合う。お世辞なんかではない。素直に湧く言葉。微かに笑うと、二人は互いの手を握りあった。
「また、次にな」

「この試合、引き分けとする！」

航が判定を下すと、七緒と暁は共に立ち上がり、さがる。

「つーかーれーたー……精神力削るんだからー。もう」

「七緒先輩。お疲れ様です！」

聖良は七緒の赤いタオルを渡した。七緒はそれを手に取ると、額や首筋の汗を拭う。

「ありがと。でも次、聖良だよ。大丈夫？」

「私は平気です！ ちょっと寝不足だけで……」

「ううん。体調がどうじゃなくて、相手」

「相手？」

煌燐側は三人。綾乃と暁は既に試合を終えた。残るは——誰だっただろう。分かっているが、その名を思い浮かべたくない。

（え……まさか。そんな。嘘、で、しょ）

「最後っ！ 明華、新堂聖良！ 煌燐、宗蓬院晟夜！ 前へ！」

（うそおっ！）

せっかく思い浮かべないようにしたのに、航が現実に戻す。聖良は視線で七緒や暁に助けを求めるが、死なない程度に頑張つてと言わんばかりの笑顔を返される。

（もう……遅刻した罰だと考えよう）

聖良は自分が持ってきた竹刀を片手に、航が指示した場所に立つ。その目の前に、大きすぎるほどの威厳を備えた、木刀を携える宗蓬院晟夜。

「よ、よろしく、お願いしま、す！」

頭を下げたが、晟夜からは何も返答はない。どうやらとつくに集中モードらしい。

（挨拶ぐらい、してくれたっていいのに……）

聖良は剣道の構えをとる。

「待ったなしッ！ 始めッ！」

聖良が踏み込み、その先に晟夜を見据えようとしたその刹那。視界から晟夜の姿が消えた。

（えっ！？ 速、い！）

背後をとられるのを防ぐために振り返ろうとした時、横に風を感じたのでその動作を止め、竹刀を盾にする。直後に木刀が振り降ろされた。攻撃を防ぎ、安心したのも束の間。

（なんて、重い剣圧！）

聖良は家で師範代として男女関係なく門下生と戦う。その中でも相当場数を踏んだ男子より、晟夜の剣圧はずっと重い。

押し負ける、と思うと、急に晟夜の力が消えた。

（え？ なんで……）

ドガッ！

「きゃあっ！」

その姿は全くとらえられなかった。

晟夜が後ろから木刀で聖良の背中を叩き、聖良は転倒した。

「いったあ……」

起き上がろうとすると、目の前に人の足が現れた。それを辿って見上げると、木刀を振り上げる晟夜の姿。目を見開くと、木刀を振り降ろされた。

（ひゃあっ！）

身が縮こまり、目を瞑る。

怖い……！

「晟夜！」

暁が叫ぶ。

聖良が目を開くと、目の前にぶつかる直前の木刀、晟夜の腕を掴む暁、聖良を庇うように二人の間に片膝を立てて座る七緒がいた。

「どうしてそこまでする必要があるんだ」

暁がぴしゃりと言いつ放つ。

「お前が手加減をしないのは知っている。しかし、叩きのめす必要はないだろう」

「暁。忘れたか。仮にもこいつは蒼尊だ」

晟夜は暁の手を振り払い、聖良を睨み付ける。七緒は警戒し、身構える。

そして晟夜は口を開いた。

「強くなるには、勝つにはまず畏れを捨てる。畏れを捨てなければ、勝てない」

「……ほえ？」

思わず聖良は間抜けな声を発してしまった。

叱責ではなく、アドバイスだった。昨日の発言から比べると、ずっと優しい。

「聖良。大丈夫？ 立てる？」

「ごめんな。聖良。組み合わせを変えるべきだった」

七緒と暁が支えながら聖良は立ち上がる。

全く対抗できなかった。あつと言う間に決着をつけられてしまった。

あれが、宗蓬院家の実力か。なんて、強いんだろう。

ううん。“強い”だけでまとめていいものか。

動きが速いだけじゃなく、的確に死角を突く。しかも一撃が強い。

「……でもね、聖良」

少し時間を置いて、七緒が付け加える。

「最夜の言葉を肝に銘じとくのに損はないと思うよ。分かる？」

「はい……。あれだけ強いからだすからね」

最夜の言葉を信じれば、自分は強くなれるだろうか。先輩達の足手まといにならないだろうか。

——原瀬先輩の隣に、いられるだろうか。

「ああ、そうだ。聖良。碧紗から伝言」

「姉さんから？」

七緒はこくりと頷く。

「一緒にお母さんに会いに行こう、って。風源の塔の前で待ち合わせだってさ」

「風源の塔？ ……ああ、風奏真君の銅像がある柱ですね」

七緒が異国の捐恕を案内した時に見たのを思い出した。なぜかこれは記憶に色濃く残っている。

「で、待ち合わせ時間がもうすぐなんだよ。抜けて行けば？」

「でもそんなことしたら……」

暁はにっこり笑いながら聖良の肩を叩く。

「私から最夜に言っとく。私も行きたいし」

「……て、こら暁！」

七緒は軽く暁の頭を叩く。

「それに今の状況じゃ、護衛は必要だろう？ 七緒が抜けられたら

明華にとって色々不都合があるだろう」

「うう……悔しいけど、聖良のことは頼むよ」

七緒は聖良と顔を見合わせた。

「じゃあ、同じく風源の塔で待ち合わせな。碧紗とも面識あるから、確実に落ち合える」

「分かった。じゃあ高天原でね！」

聖良は竹刀を持って特別武道場を後にした。

この時、すでに自分は確実に闇の中へ進んでいたのに気付くのは、後の話――

第四章：楽師との出会い、家族の再会

陽はまだ昇りきっておらず、巽の風は涼しさを伴い、爽やかに吹いていた。

星来は首都、揖恕の町を風を受けながら歩く。町の人は蓮のおかげか、星来のことを奇怪なものを見る目付きで見ることがなかった。それどころか、笑顔で手を振ってきてくれる。

今日は高天原に来てから胸が弾んでいる。ただ単に夏なのにこんな涼しい風が吹いているからかもしれないし、今日は初めて一人で高天原に来たので、小さい頃に一人で出掛けた時と同じ気持ちなのかもしれない。

やがて見えてきた、噴水の中央に立つ、高天原の守護神の銅像。

（風源の塔……風奏真君）

麒麟とも狼ともとれる守護神は、依然として雄々しく前肢を上げて柱の上で立っている。銅像でも漂わせる、風の司つかさとしての威厳と風格。

「だって……寂しいと思わない？ 独りで世を駆け巡り、独りで戦うなんて……」

まるで隣にいたかのように、聞こえるはずのない蓮の声が聞こえた。すると、その時の蓮の寂しそうな横顔が、風奏真君の姿と重なる。この二人は堂々とした態度が似ている。でもこれはもしかしたら寂しい気持ちを隠した、表向きの表情なのかもしれない。

星来は視線を下に移すと、そこに実際あるものとその名前との違いに気付く。

「どうして“塔”なのかな？ “噴水”の方がいい気がするけど……」

「水の部分は結界の役割をしているに過ぎない。中つ国で言う、一種の古墳と同じ原理だ」

見知らぬ女性が歩み寄りながら付け加えた。

その女性は星来より顔一個分弱背が高く、長い髪は高い位置でしっかり帯を巻いてまとめられ、額には親指の爪二つ分ほどの大きさの、細長い雫のような形をした青い石に糸を通しただけの簡素な飾りをつけている。服はほとんど薄汚れた白い長套ちようとうに包まれ、わからない。

星来は日本史の資料集に載っていた、中でも堀に囲まれた古墳を思い出す。そういえば、確かに堀の意味について気になっていた。

女性は説明を続ける。

「堀の水は世界を分けてるんだ。昔、天皇や尊い人は死して神になると言われていたから。同じように、墓じゃないけど、あの水はこちら側と神の住む領域“聖域”とを分けている。五帝に次ぐ神を」

「貴方は？」

女性は星来の方を向き、微笑む。

「こういう時、場所でこんな馴れ馴れしく話しかけたんだから、氣付いてほしかったな」

「えっ、じゃあ、暁……じゃなくて錫弥しゃくや？ ああ、そういえば」

流れるような形の目に、長套の襟から覗く線の細い首も、暁のそれと同じ。唯一髪の長さだけが違う。

「この場で改めて。吟遊詩人“迦陵頻伽かりようびんが”の錫弥」

「かりよう……って、何ですか？」

「高天原最高の楽師に与えられる称号。もともと、これがつけられる歴とした基準はないけど。各国で噂になったら決りって感じ」

事実、中つ国で聞いた笛の音は、とても繊細でなだらかで幻想的だった。高天原のみならず、中つ国でも最高位を誇ってもおかしくない。

「でも良かった。ちょうど私が異にいる時で。じゃなかったら、絶対会えなかった」

吟遊詩人——各地を旅行し、自作の詩を吟誦、朗読する者。薄汚れた長套が似合うのは、旅を経た故だからだろう。しかし、錫弥の整った中性的な顔と見比べると、ひどく不似合いだった。

「あとは、姉さんが……」

「すぐ近くにいます。ほら」

錫弥は星来の後ろ側を指差す。星来もそちらに向き直ると、碧紗が息を切らせながら走って来る。王宮で着ていた官吏の着物と違い、一般人が来ている袂たもとのない中華風の着物を着ていた。

「ごめんなさい　なかなか執務が終わらなくて……あら、錫弥じゃない！」

「ああ。久しいな。半年振りか？」

二人はとても親しそうに話し始めた。一人取り残された星来だけが状況を飲み込めない。なぜなら、一ヶ所に留まり巽を治める太宰の碧紗と、各国を旅して歌を奏でる吟遊詩人の錫弥。共通することはないように思え、そんな二人がここまで仲が良い理由がわからなかったからだ。

少しすると、話を一段落させて碧紗が星来に話す。

「錫弥とはね、巽に来たときだけだけど、すごく話すの。錫弥は色んなところ行くから、どこの国がどういう政治を行っていて、国がどうなっているかも話してくれて。私はそれを参考にしている」

「巽は一番気を休められる国なのに、碧紗の質問攻めにはほとんど困っているんだけどな」

二人は顔を見合わせてくすくす笑った。

「さてと。ちょっと遅くなっちゃったし、そろそろ行こう」

「あ、待って。あと一人……」

星来は空を見上げた。あと一人、密かに呼んだ人がいるのだ。来て欲しいと願う。

と、紺青の龍が空から飛来してきた。

「蒼氷？」

「うん。目的地までは、山越えがあるから」

龍型の蒼氷は着地し、星来に向かって頭を下げる。さすがにこれは損怒の人達の視線を集めた。

（やっぱり、きれいだなあ）

最初の頃は、蒼氷を見ても何も思わなかったが、今はとても優美に思える。中つ国じゃ、どこ探しても絶対に見られない美しさ。もとより、龍なんて中つ国では見られない。そのことも除いても。

いつまでも黙ったままの主に、蒼氷は少し顔を持ち上げる。

「星来様？」

「あ！ ご、ごめん。えっと、ちょっと乗せてつてくれる？」

「御意」

蒼氷は再び頭を下げた。碧紗と錫弥も乗せてもいいか訊こうとすると、先に碧紗が口を開く。

「じゃ、星来は蒼氷ね。郊外に天虎を待たせてあるから、私はそれで行くわ。星来の為に二頭連れてきたんだけど、錫弥、どう？」

「どうも何も……いないと私だけ山越えできないじゃないか。それじゃ、星来は先にゆっくり飛んでくれるか？　あまり速いと高天原で最速の獣でも追いつけなくなるからな」

蒼穹に、紺青の龍が一匹と、青毛の虎が二頭、それぞれ人を乗せて飛ぶ。

追い風がずっと吹いてくれたおかげで、予定よりもずっと早く山越えできた。少し草原が続いたかと思うと、田圃や畑と農村を思わせる木造の家が立ち並ぶ集落が現れる。

ここが希共。田圃では村の人々が一生懸命、手で農作業をしている。昔の中つ国もこういう光景が当たり前だったのだろう。

「星来達のお母さんは希共に住んでいるんじゃないのか？」

希共に着いても降りようとしないうちに、錫弥は疑問を抱く。

「離れに住んでるから、これでいいの。あともう少し」

集落を抜け、草原が代わりに現れた。細い一本道が蘭景の家と村を繋いでいるようだった。

飛ぶことほんの数秒。畑の中にぽつんと一件だけ佇む木造の家と、畑で地を耕す女性が見えてきた。それを目安に、三人は自分が乗っ

ている獣を下降させていく。女性は下降してきた獣達に気付き、驚いていたようだが、それに乗っている人達を認めると、自ら近寄る。
「母さん……！」

十六年振りの再会に、碧紗は居ても立ってもいられなくなり、天虎の足が地に着く前に自ら飛び降りてよろめきながら女性、蘭景の方へ走っていく。

「母さんっ！！」

「碧紗！！」

蘭景は鍬を投げ捨て、飛び込んできた娘を抱き締める。

「十六年間、母さんの、こと、忘れて、しまつて、いたの……ごめん、なさい」

嗚咽が混じり、そう言うのがやっとだった。そんな碧紗を蘭景は優しく頭を撫でる。

「碧紗。良かったな。お母さんに会えて」

錫弥が天虎から降り、星来と人型に戻った蒼氷と共に歩み寄る。

碧紗は涙を拭い、振り向きながら頷いた。蘭景は錫弥を見て、一瞬だけ眉をひそめた。

「あら、星来も蒼来ていたのね。でも、そちらの方は？」

「……初めまして。錫弥と申します」

錫弥は気品ある物腰で会釈した。すると蘭景は笑い、

「碧紗と星来の友達ね？　どうぞ、何の御構いもできませんが……ゆっくりしていただくさい。碧紗。星来。お母さん、まだ畑仕事があるからね、それが終わったらゆっくり話しましょう」

「あ、手伝うよ。昔みたいに。いいよね？　星来」

星来は少し躊躇った。昔といっても、星来にはその“昔”の記憶がない。

（ううん。何考えてんの。ただ手伝うだけなんだから……）

「うん。でも何すればいい？」

「向こうに小さい頃、貴方達がよく遊んでいた畑があるから……碧紗なら覚えてるでしょう？　そこを耕してほしいの。裏の物置に鍬

があるから」

「わかったわ。行こう」

碧紗は星来を連れて物置に向かった。蒼氷も蘭景に一礼してから追う。

その場に残ったのは、蘭景と錫弥。今さっき会った人達としては、やけに気まずい雰囲気があった。

三人を見送り、今まで見せたことのないような形相で錫弥が口を開く。

「……どうしてわざわざ、別の畑に行かせたのです。同じ畑を共に耕せば良いのに」

星来と碧紗は物置から鍬を取り出し、雑草が所々生えている畑の前に立った。蒼氷も自分を養ってくれた蘭景に恩返しがしたいのと、主がやるならという理由で鍬を持った。

畑の広さは中つ国にある星来の学校の教室と同じくらい。三人でやれば、きつとすぐ終わる。

「じゃあ、私はここからやるから、星来はそこから。蒼氷はその向こうのそこから。いいわね？」

碧紗が指を差しながら説明する。

「わかった。頑張ろーっと」

二人は碧紗に指示された位置につき、鍬を振るい始める。

先が鉄の鍬は、思ったよりも重く、振り下ろすと相当負担がかかる。でも自分は蒼尊だから、力を発揮すればいくらか楽なはず。

（貴重な体験なんだから、楽しみながらやろう）

中つ国では、絶対にこんなことはできない。星来は耕すことだけ考えた。

「……昔はね、私達は全部木でできた鍬でね、遊ぶようにこうやって耕していたのよ」

碧紗が農作業と無関係だった、空白の十六年間をものともせず、

手馴れたように耕している。

「私はどうだった？」

「まだ小さいのに、私に負けなくらい一生懸命、大きな鍬で耕していたわ。あの時の星来、本当に可愛かったんだから。もちろん、今も十分可愛いけどね」

碧紗は笑いながら耕す。よく見れば、もう星来の二倍近く耕していた。隣の蒼水も十六年間、蘭景を手伝っていたのか作業が早い。

「でももう、時間は戻らないのよね。すごく、悲しい」

鍬を振り下ろすと、そのまま手が止まった。

「だから、こういう時にいっぱいその時間を埋めたいと思うの。星来も蒼尊としての務めもあって忙しくなると思うけど、付き合ってほしいな」

星来も一旦手を休め、碧紗の方を向く。双眸は微かに潤んでいた。時を失うのは、何を失うよりも悲しい。星来もそれはわかっていた。

「……うん。これから私の姉さんでいてね」

「ありがとう。星来。さ、続き続き」

再び作業に取り掛かった。

空白の時間を、掘り起こすように。

「終わったよ！ 母さん！」

碧紗は星来の手を引いて、もう片方の手を振って大声で言った。

蘭景も作業を終わらせていて、鍬を杖代わりに手をついている。錫弥も手伝っていたのか、片手には鍬がある。

「お疲れ様。手は大丈夫？」

「うん。でも久しぶりにやったから、ちょっと痛いかも」

それでも碧紗は笑っていた。星来もそれを見て、作り笑いをする。

星来が素直に笑えないのには理由がある。それは、まだ蘭景を母親と認められていないこと。

碧紗は姉だと認めることができた。それに便乗して蘭景も母親だ

と認められるように努めたが、どうしても心の奥底で否定が生まれ、無理だった。星来の母親は中つ国にいるあの人のみだと。だからと思い悩む顔をすれば、蘭景や碧紗に心配をかける。それが嫌で無理矢理笑顔を作った。

「あ！　そういえば、長老のところへ行くの、すっかり忘れてたわ」
蘭景は突然口を開き、困った顔をした。

「何かするんだったの？」

「これから植える種を貰ってこようかと。でも明日でいいわ。せっかく碧紗と星来が来てくれたんだから」

そう言って、蘭景は家に入ろうとした。

「あ、私が行ってきます！」

星来が名乗り出る。もう一度、蘭景のいないところで色々考え直したかったから。

「でも、いいのよ？　気を遣わなくて」

「その……私、せっかく高天原に帰ってきたんだから、長老に挨拶したいし」

「だったら、私も行くわ。長老に会いたいし。星来も行くなら蒼氷も行くわよね？」

碧紗も行くことに賛同し、蒼氷は頷く。蘭景は少しの間考え、うん、と頷く。

「そこまで言うなら、お願いするわ。長老によろしくね」

「任せて！　星来、行くよ」

三人は長老の家に向かって歩き出す。道程は碧紗が覚えているだろうし、草原の一本道を歩くだけなので、まず迷うことはないだろう。

本当に、草原以外に何もない場所だった。星来にはこの景色を見るだけで嬉しく、懐かしい。これが自分の故郷だと指し示す確かな証拠なのだろうか。それよりも気がかりなのは、母親のこと、蘭景のこと。認められなかったら、これは相当な親不孝だ。このままだと自分が嫌いになりそうで怖い。

「……あれ？」

「どうしたの？」

星来は母親のことを考えているうちに、解決していなければ、触れられてもいない問題の存在があることを思い立った。

「私達のお父さんは……誰なの？」

「あ……」

碧紗は戸惑った。あまり気にしたことがないから。それもそのはず。物心付く前から蘭景一人に育てられてきたのだから。

「私が生まれる前に、姉さんはお父さんに会ってないの？」

「会って……ないわ」

「じゃあ……」

ちょうど、その時だった。

星来は押し付けられるような重圧を感じた。本当に押し潰されそうな。思わず、膝について座り込む。そのうち息が苦しくなり、頬を汗が伝った。

二人も星来の異変に気付き、慌てて近寄る。

「星来様!？」

「どうしたの!？ 星来!!」

苦しい。たまらなく、苦しい。

(なに……これ)

ここまでではなかったが、つい最近にもこんな感じがするものに触れた。それは――魔物と対峙した時。

――じゃあ、これは。

――間違いない。

胸を押さえて、碧紗の顔を見て、力を振り絞って声にする。

「姉さん、逃げて……！」

（これは、殺気！）

その刹那。

ドオン、と轟く地鳴りがし、辺りの景色が全て薄黒くなる。黒い硝子越しに見るように。

「こんなところで、暢気に農作業か。愚かな蒼尊らしい」

冷たく低い声が空から降りかかる。息苦しさはいくらか和らぎ、星来は立ち上がって見上げると、宙に漆黒の長套を纏った人影が浮遊していた。

「誰っ！？」

星来は戦闘体勢に入る。

——もしかしたら、こいつが碧紗を操った張本人かもしれない。いつだったか、中つ国で父親と七緒から聞いた名前を口にする。

「千宵！？」

「違うな。俺はそんな愚かな者ではない」

黒い人影は着地し、腰につけていた鞘から剣を抜く。その刀身は、どんな眩い光でも飲み込んでしまうような、深い漆黒。

「俺にはこの世界での名はない」

黒い人影は、長套を脱ぎ捨てた。

同時に星来はその人影の顔を見て驚愕した。我が目を疑い、擦ってみるが目の前の現実是不変ならない。

「そ、んな……！！！」

そんなことが有り得るのだろうか。高天原と中つ国での顔は、どんな人でも遺伝の関係で、多少は違うはずなのに。目の前にいる人は、全く同じだった。言い表すなら、中つ国の自分がそのまま高天原に來たように。

「宗蓬院……晟夜、先輩……！？」

第四章：思わぬ刺客、決意の戦い

星来にはこの状況が飲み込めずにいた。幾度も瞬きしても、目の前にいる人物は宗蓬院晟夜。

少しすると、晟夜の漆黒の剣に黒い靄もやが取り巻き始めた。

何をするつもりだろう、と考える前にわかる。殺される、と。それにあの剣はなんなのだろう。剣自体も強大な殺気を放っている。

「どうして、こんなことをするんですか……？」

星来は震える声を発した。今はなぜここに晟夜がいるのかというより、どうしてこんなことをするのかが気になる。

「……無駄話は嫌いだ」

晟夜が冷たく言い放つと、黒い靄が急速に剣に集まる。その剣をゆっくり振りかざして叩くように振り下ろすと、黒い三日月――蓮の月紅火を闇に染めたような刃がこちらに迫る。

星来は横に跳躍し、それを躲かわす。その直後に今はいつもと違う状況だったことを思い出し、叫ぶ。

「姉さん！」

砂埃が確かめたいものを隠してしまっていて、無事がわからない。今の自分は蒼尊で、常人の人の感覚があやふやになってしまっているが、あれを常人が躲しきれるとは全く思えない。

まさか、と息を呑んだ。

「ご安心を。星来様」

いつの間に移動したのか、蒼氷は背後にいてその腕には、目を閉ざした碧紗を抱きかかえていた。

星来は一先ずほっとする。

「ありがとう。蒼氷。姉さん、大丈夫？」

「気を失っているだけです。しかし、今の私達は妖気ですきた半球状の結界に覆われてしまっています。いつこのかたが巻き込まれるか、あるいは狙われるか……」

星来は天を仰いだ。昼の雲が少ない空だったはずなのに、結界のせいで薄黒い。

（巻き込まれる、狙われる、か。どうしよう）

蒼氷と協力して戦えば、どうにかなるかもしれないと思ったが、それで完全に姉の安全を保障できたわけじゃない。蒼氷に碧紗を守らせようか、とも思ったが、蒼氷がああ剣撃を全て、または全力で放たれたものを防ぎ続けられるとは思えない。

（それなら）

とるべき道は、一つ。

「蒼氷。姉さんを連れて逃げて。錫弥達にはこっちに来ないように伝えて」

「星来様!？」

蒼氷にはこれが自分の主の口からこんな言葉が出るとは信じられなかった。ほんの数日前まで、魔物でさえあんなに対峙することを嫌がっていたのに。ふと見た星来の双眸に強い決意が表れていたのも意外だった。

（いや、それでも星来様にはまだ早すぎる）

「しかし、それでは……」

「これは命令なの！ 蒼氷なら聞いてくれるんでしょう!？」

星来は思わず怒鳴った。それは本気である証拠。

蒼氷にも、もう迷っている暇はなかった。これは主からの“頼み”ではなく、“命令”である上に、これ以上敵を待たせていつ攻撃してくるかわからない。いや、あれから一度も攻撃してこない今、奇跡を使ってしまったているかもしれない。

「わかりました。しかし、この結界はとても強固で、とても私の力では……」

星来はもう一度、天を仰ぐ。

（やれるかな……?）

守護獣より、その主のほうが力は強い。まるで昔からその知識を持っていたように、星来は知っていた。

（でも、今の私にできるのかな？）

あの日、初めて己の能力で雷漣を放ってから、まだ二度目を成功させていなかった。

だが、原因は今になってやっとわかった。あの時は自分の中に何かが湧いてきて、それを放ったに過ぎなくて、魔物との実践練習の時にはそれがすっかり冷めてしまっていたから。それが今になってわかったのは、あの時に湧いてきたものが再び湧き出してきたから。（ううん。迷ってなんかいられない。やるしかない）

星来は碧瑠刀を持った右手を引き、弓を構えるように身構えた。

——感覚が、蘇ってくる。

体に何かが湧いてきて、体を満たしてくる。そして気がつけば、碧瑠刀は自分自身を表わしているようにバチバチと雷を放っていた。「はっ！」

星来が気合を入れる声をあげ、碧瑠刀を斜めに突き出すと、雷漣が上方に向かってまっすぐ飛んでいき、円い穴を開けた。それでも、この結界の再生力がわからなかったので、ずっと穴を開けておくために雷漣を止めなかった。

「早く！」

その言葉を聞いて、蒼氷は葉が翻るように一瞬で龍型になると、その背に碧紗を乗せた。

「それでは……どうか、ご無事で」

「うん」

星来は蒼氷の目を見て、しっかり強く答えた。

（絶対に、負けないから）

雷漣を途切れさせると、そのわずかな間に蒼氷は穴から外から出た。穴は直後にしぼむように塞がれてしまった。

それを見届け、星来は腕を下ろす。

（……独りになっちゃったな……）

自分の味方をしてくれるのは、自分ただ独り。独りって、なんて冷たいのだろう。今の季節は夏だというのに。

（だめだめ。甘えを断ち切らなきゃ。暁はあんなこと言ってくれたけど）

碧瑠刀をぎゅっと強く握り締め、晟夜の方へ向き直る。晟夜の周りには黒い靄が守るように漂っていた。

（立ち向かおう。いつまでたっても、守られてばっかじゃだめだから）

星来は碧瑠刀を両手で握って走り出した。

蓮のように、瞬時に策をひねり出すことはできないけれど、全力でぶつかっていくことはできる。

「だぁあっ！」

星来が剣を振ると、晟夜は眉一つ動かすことなく、金属がぶつかり合う快音を響かせ、漆黒の剣でそれを受け止めた。

中つ国では力の差で負けてしまったが、ここは高天原であって、自分は蒼尊。負けることはないと思っていた。だが、その予想に反して碧瑠刀は黒い靄に包まれながら漆黒の剣に押されていく。

（何？ これ……）

靄が鏑まで迫り、危険を感じた星来は慌ててさがった。

「禁忌の剣として、高天原に封印されて幾星霜。そのスサノヲに対して、ぶつかってきたことは褒めてやろう」

晟夜が冷たく静かな声で言い放つ。

（禁忌？ なんなの？ とりあえず、下手に接近しちゃ危ない）

晟夜自身かスサノヲが放っているあの黒い靄は、とにかく触れてはいけない。触れてはまずい気がする。

（じゃあ、能力を……！）

左手を突き出して、至近距離から雷漣を放つ。しかし、黒い靄が瞬時に集束し、雷を弾いて晟夜を守った。星来が雷漣を放つのをやめると、黒い靄ごと断ち切ってスサノヲが振り下ろされる。

（くっ！ そんなっ！）

星来は咄嗟に碧瑠刀を両手で握り、その剣を受け止めた。ただし、そのままでは黒い靄に侵食される。

（そうだ。剣から雷漣を放てるなら、それを応用して……）

敏希が言ってなかったっけか。蓮は華焰刀を使って自らの力を引き出している。それなら、自分とこの碧瑠刀も連動しているはず。

「はあっ！」

碧瑠刀に雷が迸り、薄暗い空間の中で強く発光して靄を焼く。晟夜は眉を顰めてスサノヲを碧瑠刀から離し、地を蹴って宙を跳ぶ。そこからスサノヲを使って黒い三日月の刃を放った。

（しまっ……！）

星来の今の体勢は、躲すには苦しい。

（それなら、打ち消す！）

碧瑠刀を構え、めくるめくばかりに体中を駆け巡る力を刀身に集中させる。それを心象として形作っていく。

（あれをうまく、丸ごと打ち消すほどの……）

星来はそれをすべて雷に写し、放つ。一見、普通の雷漣に見えたが、標的に向かっていく途中でその先端は顔が模られ、龍のような形態になった。雷の龍は大きく口を開けて黒い三日月を飲み込め、雷が爆発を起こす。

晟夜が腕で顔をかばい、次の攻撃に移ろうと爆煙の中から星来を捜す。

「このおおっ！」

星来が煙を突き破り、雷が迸る碧瑠刀を両手で構えて跳んでくる。（当たれっ！）

と、思いながら碧瑠刀を振ると、晟夜が黒い靄を集束させて作った盾によって防がられる。それでも星来は碧瑠刀で押して、応戦する。

（これさえ、破ることができたら……！）

少しずつ、少しずつだが碧瑠刀が黒い盾を破っていく。ということは、碧瑠刀で応戦できないことはないのだろう。

（もう少し、頑張ればっ！）

「……微温い」

「!？」

先端を尖らせた黒い矛が前方から六本、こちらを睨んでいる。

（やばい！ 距離を……）

慌てて下がったが、空中では自由が効かなかった。

黒い矛は一斉に星来に襲い掛かる。不意打ちに星来は雷を発することができず、碧瑠刀で防いだが、それもせいぜい二本。防ぎきれなかった矛は星来の体を切りつけた。

「う、あっ！」

星来はみるみるうちに地に吸い込まれるように落下し、その体は地に叩きつけられた。

（痛、い……）

初めてあんな凶器で切りつけられた痛み。もちろん、中つ国で美術の時間に誤ってカッターで自分の指を切ってしまった時よりも、比べものにならないくらい痛かった。

（血……）

右腕の傷跡から流れる、血。これが無くなれば、人は死ぬ。

（やだよ……死にたくない。誰か、止め……）

ここには、誰もいない。自分の味方をしてくれる人は。攻撃してくる人はいても、守ってくれる人はいない。

（そうだよ。もう、いつまでたっても甘えたままじゃ、だめ！）

ビュッ！

「っの！」

星来は横になったままの体を転がして、落ちてくるように襲い掛かってきた矛を避ける。そしてそのまま手をついて、立ち上がった。

（痛い、痛いよ……）

見てみれば、脚もさっきの一撃で傷だらけになっている。見るだけで、全身に痛みが伝染しそうだ。

（自分を見るんじゃない。敵を、見なきゃ……）

星来は顔を上げて、傷の痛みを歯を食いしばって耐えながら、黒い靄に包まれて宙に浮かぶ晝夜を見据える。

（どうやったら、攻略できるかな）

一撃であれを破ることはできない。だからと言って、下手に押し合いを続けていれば、今のように別の方向から黒い矛にやられる。防御も完璧。攻撃も完璧。それでも、どこかしら崩せる箇所があるはず。

（……難しく考えないで、ちょっと簡単に考えたらどうかな？　そうだ……）

星来はもう一度、碧瑠刀に雷を纏わせて構える。晟夜も気配を感じ取り、再び戦闘体勢に入った。

（どうか——！）

ありったけの力を脚に込めて、空に突っ込むように星来は跳躍する。その碧瑠刀を握る手にも血がにじむくらい、ありったけの力を込めて。

「はああああっ！！」

星来が碧瑠刀を振りかざすと、晟夜もスサノヲを振るう。二つの剣はぶつかり合い、雷と黒い靄が弾けて押し合いが始まる。

（腕がだめになっても、負けちゃだめ……！）

腕が微かに震えてくる。疲労からくるものなのか、敗北の恐怖からくるものなのか、あるいは両方か。でも、今の自分にはそんなものは二の次。

方や、晟夜は無表情。ただそれは、とらえかたによっては余裕の笑み。

（愚かだな。また同じ手にかかるつもりか）

晟夜は黒い靄を繰り、六本の矛を模^{かたど}らせる。星来は押し合いに必死なのか、それに気付いていない。
（消えるがいい！）

バチッ！！

黒い矛が星来を突き刺そうとした途端、矛の方が弾け、破片が飛

び散った。

（なるほど。見えない程度の雷の壁を張ったか……）

全く能力が使えず、戦えない無能な蒼尊だと聞いていた。だが、この蒼尊の中の何かが力という力と呼び覚ましている。

「絶対、負けない!!」

星来は先輩に頼ってばかりの自分を捨て去るように叫んだ。すると、碧瑠刀の方が押し始めると、

（大丈夫……勝てる!）

「それで、勝てたつもりか？」

黒い靄が急激に増幅し、翼のように広がるとそれが一斉に星来ではなく、碧瑠刀にスサノヲもろとも凝集される。

「えっ？ なんなの……？」

離れようとしても離れられない。そのうちにどんどん碧瑠刀が圧縮されていく。その碧瑠刀の気持ち伝わるように、自分も少しずつ苦しくなってくる。

その時、やっとこの行為の目的がわかった。

（まさか……! やば……）

パキッ——

碧瑠刀の青い刀身が、儼く折れた。

「え——」

碧瑠刀の折れた先だけが、死んだように落ちていく。

星来は呆氣にとられてしまい、黒い靄がスサノヲを包んで巨大な刃になっていることに気付くのが微かに遅くなってしまった。

「きゃあっ！」

どうにか身を振って躲そうとしたものの、体を両断されなかっただけまだいい、というくらいで黒い刃は深々と星来の体を切り裂いた。

「うっ……あああっ！」

痛い、じゃすまされない痛み。息ができなくて、苦しい。

星来は結界の端まで跳ね飛ばされ、背中から強く地に叩きつけられた。体の中のものがでてきてしまいそうな感じがする。

（苦しい……）

右手に握り締めていた碧瑠刀を見ると、悲しいほどに刀身は折半されていた。これではもう剣としては使えない。少し視線をずらすと、流れ出た自分の命とも言えるものが草を赤く染める。

（もう、だめ……これじゃあ戦えない）

攻撃する力を同時に二つも失ってしまった。下手したら、もう生きて帰ることもできない。星来の中に思いを寄せる先輩の顔が浮かぶ。

（戦えない、よ。凌雅……蓮……）

戦えない？

どうして？

——まだ、雷の力があるのに？

「諦めるもんか……」

星来は碧瑠刀の柄を投げ捨て、立ち上がる。血が流れようとも気にしない。

「ほう。まだやるか。そんな状態でも」

「だって！」

悔しかった。一瞬でも自分に負けそうになった自分が。目に涙が溜まるのも、きっと悔しさのせい。

「いつまでも、こんな自分は嫌だ！！」

星来の頬に、涙の軌跡が描かれた。

その刹那。

多数の硝子が一気に割れたような音がし、その直後、急に景色が明るくなった。

それは結界が砕け散ったからだだった。

星来が見上げると、上空に火の粉が舞っていた。

（火……）

星来が視線はそのままに体を返し、そこに見たのは。

あの日、見たのと同じ、赤い麒麟に騎乗した、赤い騎士。

「どういうことか、説明してもらおうか！ 宗蓬院晟夜！」

火の粉を纏った華焰刀を前に突き出したまま、蓮は驚いた様子も無く、暴怒の形相でその手に握る華焰刀より鋭く睨みつけた。その表情は星来ですら見たことが無かった。

「やっと来たか。緋尊、蓮」

言葉が続く前に、蓮は華焰刀から炎の螺旋を放つ。それは晟夜の顔のすぐ傍を通過する。

「黙れ。質問に答えろ」

蓮は緋炎を駆り、地に降りてボロボロになった星来を心配する。

「れ、ん……」

「大丈夫？ な、わからないよね。こんなに傷だらけになるまで……」

血だらけになった星来の頬を優しく撫でると、あるものに目を留める。

「泣いたの？」

星来が何か答える前に、蓮は星来を庇うように二人の間に立ちただかった。

赤い戦士にこの上なく濃い殺気が渦を巻く。

「ふっ……四天士の仲間が愛おしいか」

「違うな」

蓮は巨大な炎弾を晝夜に放つ。晝夜は黒い靄の盾を作り、それを防ぐものの凄まじい爆発が起こる。

「後輩を泣かせた奴は、ぶっとばすと決めていた。それだけだ」

第四章：紅い剣、黒い戦慄

距離を置いて対峙する、赤い剣士と黒い剣士。

もし、これが絵や映像ならば勇ましい場面と言い切ることでできただろう。

（だめ、だよ……）

蓮だとしても、敵わない。それほど強い、と思う。あの宗蓬院晟夜は。

星来は止めようと声を発しようとも、手振りで示そうとしたが、全て疲労と出血に打ち消されてしまった。次に、今までの出血のせいか、目に映る景色が徐々に暗闇に奪い去られ、薄れていく。

（やばい……意識、が……感覚が……）

ふいに足の力が抜け、ふらつと背中から地に吸い込まれるように倒れていく。再び地面との衝突を覚悟したが、その体は一本の腕によって抱きとめられた。

星来は驚いて、残りの力を振り絞って顔を見上げると――

「大丈夫か！？」 だいぶ消耗してしまったみたいだな」

「星来！ しっかりするのよ！」

――蒼氷に、来ないように伝えてと言ったのに。

「錫弥、蘭景さん。どうして」

特に、自分を抱きとめている、長い黒髪も額の青い飾りもすべて錫弥のものだった。星来は呆然としながら、錫弥の顔ではなく青い飾りを眺めた。

――なんだろう。この引き合う感じ。

「もう、大丈夫。少し眠るといい」

錫弥は人差し指と中指を星来の額にそつと当てた。

すると急に、徹夜した後のような眠気と、安らぎが襲う。

（でも、目を閉じちゃだめ……蓮を、止めなきゃ）

その意思はとても敵わず、星来は目を閉じていった。

気のせいだろうか。目を閉じる間際に見た、錫弥の髪の毛の光沢が――

「星来は？」

蓮は視界に入るか入らないかの程度の横目をむいた。

“癒”の術をかけた。本来の術をかけたなら、何日も眠るハメになるから軽めにかけた。ただ、加減が難しいから数分で覚める」

蓮の背後で、錫弥は蘭景と星来を匿うように横にさせた。また、錫弥の見えないところで蓮も眉を顰めた。

「術、使えたんだ？」

「まあ、結構。こんな時期に使うと疑われるかと思ったが、今はそんなこと言ってられないからな」

「そのまま使わず仕舞いだったら、犯人候補に入れていた。……星来をよろしく」

一步一步、警戒しながら晝夜に近づく。ある程度の距離を置いて止まると、がらりと鋭く険しく目つきを変えた。

「なぜ、こんなことをした」

「お前には関係ない」

きっぱりと返されると、蓮は見下すように鼻で笑った。

「四天士の一人が殺されそうになったことが、ほかの四天士には関係ないと言っているつもりか？ 笑わせるな」

華焰刀を構え、本格的に戦闘体勢に入る。

戦うことは避けたかったが、もう仕方がない。この怒りを抑えていたら、いつ爆発して怒り任せになってしまうか。それだけは避けるべく、今からやるしかない。

蓮は地面を一蹴りして、突進する。その後ろには華焰刀から描かれた紅の帯――紅虹が描かれている。

視界で大きくなっていく、敵の姿と包む闇。

（あれはいったい……？）

己が身に留められない力が溢れているのか。でもつい最近、似たようなものに遭遇した気がする。とりあえず、思い出す前に攻撃し

なければ。

華焰刀が紅い軌跡を描いて、スサノヲとぶつかる。紅い眼差しと闇の眼差しも衝突しあう中、黒い靄が巻きつくように華焰刀を侵食し始めた。

（そうだ、この感じ。直接関わったわけじゃないけど、これは……）蓮は昔、華焰刀を持っていなかった時と同じように、刀身に炎を纏わせ、黒い靄を焼く。しかし、それは晁夜に読まれていて、即座にスサノヲを離し、薙ぎ払う。蓮は華焰刀の手応えが軽くなった瞬間に、少し後ろに下がりながら、高く跳躍した。すると、反撃すべく、華焰刀を突き出して渦巻く炎を放つ。

炎の竜巻が迫るも、晁夜は平然としていて片手を突き出す。掌で黒い靄が集束し、渦の中心を光線となって進む。

中央部は鎌鼬かまいたちでどんな力も分散させる——はずだったのに、光線の勢いは分散することも、衰えることもない。

「ふーん。やるじゃん」

その時、炎が爆散し、黒い光線は手のように八方に分かれ、蓮を取り巻いた。

「こんのっ！」

華焰刀を立てて持ち、一回転して周囲に紅虹の盾を作る。一斉に光線が蓮に襲い掛かると、けたたましい爆音と共に、爆発する。

周囲を煙が立ち込めるが、そこからすぐに炎は向かってこなかった。

「闇霞おんかもろとも散ったか……」

晁夜がぼそりと呟きながら、突き出していた手を下ろした。

常人なら、あの爆発に至近距離で巻き込まれては、死んだも同然だが、蓮は緋尊。死んだとは決めがたい。

煙が薄れ始めた頃、煙の壁を突き破り、蓮が弾丸のように飛んでくる。

「いい加減に——ッ！」

華焰刀を両手で握り、上から叩き落すように振り下ろして月紅火

を放つ。

晟夜は一瞬、顔を顰めたがとっさの間に月紅火をスサノヲで受け止める。だがその技は、さすが緋尊の上位階級の威力を持つ技だけあって、徐々に晟夜のほうが押されていく。踏みとどまろうと足を強く地に叩こうとした時、紅い爆発を引き起こした。

それを蓮は片膝をついて着地しながら見ていた。

（危なかった……。月紅火はきついけど、戦いの流れを変えるには仕方が無かった）

ぼたり、と赤い水滴が髪を伝って滴り落ちた。

爆発を至近距離で受けるのは避けようと、あの場所から脱出しようとした時、あの黒い靄に左足を捉えられてしまい、空中でよろめいた。しかもその時に、自ら放った紅虹に触れてしまった。

そう。紅虹は中つ国のゲームのように、放った自分は効果を受けないなんていう、万能で優しいものじゃない。

（でも、ちょっと待てよ。黒い靄……捕らえ……）

蓮はつい最近の記憶をよく探り出す。

誰かが——凌雅と斗暉が黒い靄に捕らえられて——でも、どういう状況だったっけ——ああ、そうだ。

「碧紗が操られた時、だ」

じゃあ、晟夜が碧紗を操っていたと言うのか。事実、星来が言うには、碧紗は四天士を殺すと言っていたらしいし、晟夜も自分達を殺そうとしている。共通している。

「どうして……」

闇霞が炸裂し、砂埃を晴らす。晟夜も額に傷を負ってはいたものの、まるで痛手になったような様子は見受けられない。

「どうして」

真実を突き止めなくてはならないとわかっていても、知りたくなかった。ずっと慕ってきた人が親友を操って殺そうとし、妹のような後輩も、自分も殺そうとしている。数は少なくとも、惨いと言わざるをえない所業。

「どうして！　こんなことをしたあつ！」

全身に炎を纏って、流星のように突き進む。もう、悲しんでいるのか、怒っているのかわからなかった。

蓮は晟夜との距離が狭まると、全身に纏っていた炎を華焰刀の刀身に集め、火の剣になったそれを振るう。晟夜も闇霞は厚くスサノヲに纏わせて迎えうつが、今度はそれだけでは済まされなかった。炎が蛇の形を成し、あたかもそれのようにとぐろを巻いてスサノヲに巻きついてきたのである。

——問いに、答えよ。

炎の鎌首が、蓮の代わりにそう脅迫しているようだった。晟夜は下がって刀身に闇霞を圧縮させて炎を潰し、残骸の火の粉を振り払うと、注意が剣に向けられた隙に蓮が肉薄してくる。晟夜が闇霞を矢にして飛ばし、蓮を傷つけたが、当の本人は専ら気にする様子がなく、ほぼ火の玉の拳を晟夜の鳩尾みぞおちに叩き込んだ。

重い鈍痛が晟夜を襲うも、持ち堪えて闇霞の砲を撃つ。攻撃のみに意識を注ぎ込んでいた蓮は対処ができず、遠くに吹っ飛んだ。

「かはッ……」

口から赤い飛沫が飛び散った。体が地に引き寄せられているように重い。けれどもここで終わらせるわけにはいかない。

「はつきりさせたいことも、あるから……」

「七緒……」

晟夜は血を吐きながらも立ち上がりそうしている、紅い剣士見つめる。

さっきの炎は血紅色——まるで、血そのものを燃やしているような深い赤だったし、温厚な七緒が放っているとは思えないほどの殺気を帯びていた。いや、それ以前になぜ七緒が炎を——

——このままでは、緋尊が緋尊の禁忌の扉を開ける。

（緋尊？　禁忌とは……なんだ？）

——それが発動すれば、緋尊は間違いなく死ぬが、お前も死ぬ。

（それは、防がなければ）

――殺せ。

その声と共に、晟夜は再びスサノヲを構えた。

消耗は予想よりもはるかにひどい。感情任せに能力を、一時的とはいえ最大限に引き出してしまったのが一番の失敗。

（焦らず、正確に、すぐに終わらせなければ）

能力節約のために華焰刀に炎は纏わせず、作戦を考えようと立ち上がった。すると今度は晟夜の方から向かってきた。蓮はかすむ視界を、目を細めてはつきりさせ、威力も縮小させた月紅火を放つ。晟夜は完全に見透かしたように避け、スサノヲを振り下ろす。

躲されることは覚悟していたので、蓮は横に跳んで避ける。そしてそのまま返すように、晟夜が瞬時に作った厚い闇霞の盾さえ、その刃で切り裂く。華焰刀は傷を与えられるギリギリのところで、スサノヲに受け止められた。

「晟夜！」

蓮はその腕に渾身の力を入れて押し続け、目を覚ましてもらえるように叫んだ。しかし返答はなく、寧ろ目が黙れと言っている。それに怒りを覚え、続けて叫ぶ。

「無意味な戦いをして、無意味な結果しか生み出さないことは……貴方も知っているはずだ！」

晟夜の表情が、微かに歪んだ。

（今の言葉は、効いた？）

と、思ったものの、剣圧は全く減じない。中つ国と同様に、晟夜に揺さぶりは効かないようだったが、晟夜がその時発した言葉に、動揺ではないが何か変化があったことを窺わせた。

「俺がこの場に居るのは……俺にも守りたいものがあるからだ！」
――え？

晟夜の守りたいもの。彼の立場から考えると、一族のことだろうか。それだとしたら、四天士を殺すことと何の関係があるのだろうか。

か。一体、晟夜に何があったのか。

その刹那。

「う……うあああつ！」

華焰刀からスサノヲが離れ、晟夜は頭を押さえて苦しみだした。

「晟夜!？」

蓮は手を差し伸べようとしたが、これが油断となって断ち切られるかもしれない。手をそのままにして、迷った。

（でも……あれ？）

この状況も、星来が言っていた碧紗の状況に似ている。

——じゃあ、晟夜も操られていると言うのか？

それにしても、晟夜にはまだ自我があった。違いはあっても、限りなく似通っている。

ふと、晟夜の首元が濃い血色に鈍く輝いた。蓮が何事かと目を凝らして見ると、晟夜の首には血色の、光沢からして金属でできた首輪がはめられていた。

「……せ」

息を切らせなかった晟夜が肩で息をし、首を絞められているような苦しさで言った。

「なに？　なんて言ったの？」

「俺を、殺せ……！　七緒！」

額に汗をかきながら、晟夜が蓮に必死に乞う。

（どういう意味？）

晟夜は苦痛に耐えながらふらふらとよろめき、スサノヲを持つ腕が上がったり下がったりの動作を繰り返していた。

もし、本当に晟夜も操られているとしたら。それならこの状況もなんとなく納得がいく。

「早く……しろ！」

「晟夜！」

ドッ！

「あ……」

その時、貫いたのは紅い刀身ではなく――

黒い、刀身だった。

同時に貫かれたのも晝夜ではなく――

蓮、だった。

何が起ったかをすぐに判断することはできなかった。

華焰刀を晝夜に突き立てようとしたら、突然内側から衝撃が来て、すべての思考が遮断された。

衝撃がした方を見るのに、視線を下に移動させたら――黒い剣が、自分の左胸を貫いていた。

自分の血が、剣を伝い、鏢つばに当たって滴り落ちる。

（こんな、ところ、で……）

一気に剣が抜かれると、血がそれを追うように噴き出す。

（このっ……）

蓮の意識は途切れ、ばたりとうつ伏せに倒れた。

「蓮！」

「蓮様！」

錫弥と蘭景が叫んだのはほぼ同時だった。その叫び声の後に、そ

れによって起こされたのか星来が目を開く。

(どうしたのかな――?)

星来は仰向けに寝かされていたので、目が覚めた時は雲が流れる空しか見えなかった。

視界の端に少しだけ入る錫弥と蘭景は、何やらとても緊迫した面持ちだった。

何があったのか星来も確かめるため、上半身を起こす。傷口からの出血は止まったものの、やはり傷はまだ痛む。

錫弥と蘭景が見据える先には――晟夜しかいなかった。疑問を抱いた星来は、蓮を探すために視線をずらす。そして目に映った蓮は地面にうつ伏せになり――大量の血を流していた。

「蓮！」

「駄目だ！ 星来！」

起き上がって、思わず走り出そうとした星来を錫弥が肩を掴んで止める。

(そんな……いやだよ。蓮！)

蓮が血を流している。しかもあんなに。いくら緋尊でも――あれでは死んでしまうのではないか。

と、晟夜は倒れている蓮の頭を踏みつけた。

「くくっ……ははっ！」

踏みつけている蓮の頭を、狂ったように笑いながら、まるで人とは思っていないようににじる。

「武に長けたと言われている緋尊がこのザマだ！ なさけないな！」

晟夜の様子が変わりと一変したのは、星来でもすぐにわかった。

自分が寝ている間に、何があったのか――

すると、錫弥が口を開いた。

「貴様――誰だ？ 晟夜、ではないな」

「ははっ！ 名を名乗るまでもない！ ……さて」

蓮の頭から足を離し、“晟夜ではない” 晟夜は、じりじりところらに近づいてくる。思わず三人も、後ろへ身じろいだ。

「その二人はどけ。素直に逃げてやれば、お前らは見逃してやろう」

殺気の眼差しは明らかに星来に向けられていた。絶対的な危機の状況で、星来は震え止まらなくなる。蛇に睨まれた、小さな動物のように。

（やだ——死にたくない。来ないで——！）

「待て」

錫弥が立ち上がり、晟夜の前に立ちふさがった。晟夜は何事かと立ち止まり、怪訝な顔をする。

そして錫弥は静かな声で続ける。

「ここで退く気は、ないか」

「はっ！ 楽師風情に何ができるというんだ。それとも一曲奏でてくれるのか？」

明らかに嘲笑うように、晟夜は哄笑する。自分が見下されても、

錫弥は冷ややかな表情のままだった。

「そうか……」

錫弥は長套に手をかけ、一気に引き剥がすように脱ぎ捨てた。その下にあった——白い鎧が露あらわになると同時に、錫弥にも殺気が湧き出してくるのが感じられた。

「おお？ 武の心得はあるんだな？」

「だてに小童共こわっぱより、数万倍は生きとらんよ」

急に言葉遣いが変わる。すると次第にそれが裏付けられるように白い鎧は金へと色を変じ、髪は紫へと染みるように変わる。

「錫弥——？」

星来は誰にも聞こえない、自分でも聞こえないくらい小さく呟いた。白尊は銀髪だと聞いていたし、玄尊は多分、四天士であるからには特殊な黒髪だろう。四天士にはどれにも当てはまらない。

錫弥は体を横に向け、前にきた右腕と右足を伸ばし、左腕はひき、左足は若干曲げる。拳法によくありそうな構えだ。つまり、戦闘体勢――

「命乞いの一つや二つあれば、四肢を断つくらいで済んだものを！」「ろうそくの火が風で吹き消されたように、錫弥の姿がふっと消えた。

「なに！？ どこに……」

途端に晟夜の体が吹っ飛んだが、錫弥が表れた形跡はない。その浮き上がった体が地面に叩きつけられると思ったら、再び下から突かれたようにまた浮き上がる。敵の姿が見えない、袋叩きにされていた。

少し袋叩きが続き、最後に晟夜が思い切り地面に叩きつかれると、空中に物影が現れた。

それは錫弥ではなく――否、人ではなく。

高貴さが漂う、紫の毛並みに金色の鎧を纏った、半透明の細長い翼の生えた、狼だった。

「まさか！ いや、あれは……」

「貴様には特別、名乗ってやろうぞ」

晟夜は地面に伏しながら顔を上げ、現れた狼を見上げた。

星来と蘭景もまた、呆然とそれを見ていた。

神々しく、威厳と覇気に満ち溢れた狼。それを星来は、すでに見ていた。銅像ではあったが。

「五帝と共にこの高天原を作った、四大真君の一人――風奏真君の錫弥」

第四章：舞い荒ぶ風、乱れ轟く闇

「錫弥が……風奏真君？」

高天原全土の風を司り、その歌声は穢れを浄化させる力を持つ、五帝に並ぶ神。その五帝ですら、数百年に一度会うかどうかの守護神が、今、目の前にいる。

人々が想像して作った銅像とは、もちろん姿は違っていたが、ところどころ通じるものはあった。それでもやはり、本物の方が優美な気品と、武勇の挙措を兼ね添えているのは明らかだ。

狼の姿の錫弥は、四肢を地に着けて、伏せる晁夜を見下ろす。

「もう終わりかろう？　小童というものは、人を困らせるほど遊ぶのが好きであろうに。つまらぬのう」

錫弥がくつくつ笑うと、口内に生えた、研がれ磨かれたような白い牙が顔を覗かせる。わざとらしい侮りに晁夜は、全身の痛みを堪え、膝を立てて立ち上がるとする。それでちょうど錫弥と同じ目線になったが、それでも錫弥は上向き加減になって、なおも見下ろす態度になる。

「いや、無理に立ち上がらなくてもよいぞ。小童は寝るのも仕事のうちだからのう」

「黙れ！」

晁夜は激情し、闇霞の矢を放つ。四方八方に飛び散ったかと思うと、それらが一つの生き物の如く、一斉に切っ先を錫弥に向けて迫る。

「ふん。小童なんぞに捕まる私ではないわ」

半球状に囲まれた錫弥は、特に怖気づいたりする様子はなく、涼しい顔をして鼻で笑うと、またフツと姿を消した。その直後、一ヶ所に矢が流れ込んだ。もちろん、矢を霞状に戻しても狼の残骸らしきものはない。

「あれを回避しただと!？」

「ではなかったら、なんじゃ？」

晟夜の背後で風が巻き起こり、刺すような声が降りかかる。

「その愚劣な頭を噛み砕いてやろうかのう？」

反射で晟夜が振り返るよりも早く、錫弥が波のように飛びかかる。晟夜はあの牙を避けるはもろろん、闇霞の盾を作ることもしできないと判断し、左腕をかざして代わりの盾にする。錫弥は前脚の爪を晟夜の右腕に食い込ませ、その上、本気で食い千切るつもりで噛み付いた。紫の毛並みが、口元だけ赤く染まる。本当に食い千切らなかったのは、晟夜の右腕は錫弥の胴をスサノヲで突き刺そうとしていたので、早めの回避が必要だったからだ。

そのまま晟夜を踏み台に、その背後に降り立つ。

「尊ぶべき神の牙でつけた傷じゃ。大切にせねばのう？」

錫弥は口の中に入った血を吐き捨て、踵を返す。

晟夜は戦いにおいて、もう使い物にならなくなった左腕と、そこから流れる血を風奏真君の脅威を思い知りながら見つめる。

「仮にも俺はお前の兄だ。その兄にここまですることはないだろう？」

命乞い紛いの言葉に、惨めさを思いながらも晟夜は言う。

事実、どんな風に見積もっても軽傷とは言えない。爪が刺さったところは深く穴が開き、牙が食い込んだところは、皮膚を深々と抉っていた。体には、見えない闇霞の膜を張ったはずなのに、それさえ無効化している。

当の錫弥は、とことん皮肉を返答に込めた。

「私が貴様のような小童を兄に持った覚えなぞないわ。中つ国のことだとしても……」

少し離れたところの、依然気を失い、倒れている蓮をちらりとみやる。

「お前……“違う”な？」

風が二人を隔てるように間をすり抜け、錫弥の紫の毛並みと、晟夜の髪を揺らしていく――

星来はただ、二人の戦いから目を逸らさず、勝利を祈ることしかできない。錫弥は、蓮ですら優勢に立てなかった晟夜を、あそこまで叩きのめしている。助力と言って自分が行けば、足手まといになるのは考えなくてもわかった。

『星来。聞こえるか』

そよぐ風に混じって、錫弥の声が星来に囁きかけた。蘭景の顔を見ても、変わりなく二人を見つめていたので、恐らくこの声は自分にしか聞こえないのかもしれない。

『これが、本当の私だ』

神——まさしく人を寄せ付けず、人と同等でないことを強く主張し、圧倒的な力を持つ。それこそ、真の姿。

『星来がここで会った“私”は、人というためだけに取り繕った、“私”』

優しいそよ風に混じる、もの悲しげで、決意を秘めた声。

『関わったのが数時間だけで、よかった。長かったら、もっとつらかった』

錫弥の言いたいことが、だいたいわかった気がした。今、晟夜と対峙している孤高の狼は、こう言いたいのだ。

もう、関わるな、と——

(でも、どうして……?)

錫弥が星来に声を送り届け終わると、晟夜の口から笑いが漏れ出し、そして坂道を転がるように大きな笑いへと変じた。

「ははっ！ さすが真君様だ！ このガキに別の魂が入っていることくらい、お見通しなんだからな」

「何を細工しおったか、答えよ。さもなくば……」

「これだ」

晟夜は自分の首にはめられた、血色の金属でできた首輪を指差した。

「戒錠索かいじょうさくという。これをつけた者は、俺の意のまま。命令に背く場
葵は、首を千切れんばかりに絞め、それでもだめなら自らの魂を対
象に入り込むことだってできる」

（ふむ……どこぞやの愚か者が作ったのか）

初めて聞く道具だった。この世界ができて、幾星霜と生きている
ので、記憶はあまり頼りにならないが、戒錠索というのは聞いたこ
とがない。これは言い切れる。となると、最近の産物。しかも、魂
を入り込ませたり、闇霞を操る能力も与えるとなると、思った以上
に大きな黒幕がいる。

錫弥はもう一つ問い質す。

「貴様は、誰じゃ」

確信はあったが、そうであってほしくないと願った。七緒が言
っていたあの名がでてこないようにと。だが、もう数千年も生きた
錫弥は、現実には常に無情であることは重々承知していた。

そして、その時がくる。

「……俺は、元異国太宰、呀千宵」

（願いは運命を逸らすほど大きくなく、儚くあるのみ、か）

錫弥は答えず、晟夜——千宵もそれ以上、言葉を続けなかった。
取り巻く闇霞の量が、湧くように増す。あれが“晟夜のままだっ
たら”二戦も交えた身なので、疲労を期待できたものの、あれは千
宵だ。肉体には疲労が蓄積されているかもしれないが、闇霞の力を
取り込んでいたら、関係なくなる。

（やれやれ。闇霞と交えるのは、開闢かいびやく以来、何千年振りかのう）

錫弥は五帝と共に高天原を開闢して間もない頃、いたるところに
跋扈ばくこしていた負の力、闇霞討伐の中心者としてほぼ一人で始末して
いた。これは闇霞が大氣中に含まれる力であって、空気を浄化する
のが得意な錫弥と相性が良かったためだ。陽の力とつりあい、且つ
害を及ぼさない程度まで少なくなった時は、もう闇霞と戦うことは
ない、と考えていたのに。この状況において、懐かしさを楽しんだ。
晟夜——の、姿をした千宵を取り巻く闇霞がざわりと揺れ、それ

を合図に飛び出す。

錫弥が風を放ち、千宵が闇霞の槍や矢を放つのも、同時。突風が闇霞の武器を風化させ、武器の波に穴が開く。その穴から狼が襲ってくるだろうと千宵は身構えたが、狼の姿はない。

「どこを見ておる」

錫弥はすでに千宵の左側へ移動していて、それどころか間の距離を狭めている。

すぐにスサノヲを振り下ろすが、それは錫弥の前脚についていた足甲によって受け止められる。その近距離で、つかさず闇霞の矢を放つと、錫弥の翼を穿つ。

「……ふむ」

虫食いのような穴が翼にできたのに、錫弥は感心するように横目で自らの翼を見るだけで、痛みを感じているように見えない。

「ふふ。そうじゃ、そうじゃ。私を楽しませてくれぬとう」

錫弥の姿が消え、次に現れた時は元いた場所へと離れていた。

「しかし、のう。この体を使って戦うのは、数百年ぶりであるゆえ、うまく動けぬのう」

穴が開いた翼が白く色付き、それが自らを包み込む。縦に一回転すると、いつの間にか翼は布へと変じ、紫の狼も、白い布の服の上に金の鎧を纏う人へと変じていた。

「真の姿を解いていいのか？ それで俺に勝とうとでも……」

「小童に案じられる筋合いなど、ありゃせんよ」

武器を持たない空手の錫弥は、危険を顧みず、風を纏って千宵に迫る。

錫弥が方向を指し示すように手を伸べると、風はそれに従い、千宵の元へ集まる。

千宵はこれを受け止めず、跳んで躲すと、空中で構えて錫弥へ剣尖を向けて落下する。その背には、闇霞の翼が。

（避けられる、が……）

腰に差してあった風籟の音を、振り払うように引き抜く。

（体勢を崩されたところで、あの翼の闇霞がこちらに来られては、ただでは済まぬのう）

キィン、と金属音をたてて白い笛と黒い刀身がぶつかり合う。スサノヲは風籟の音を闇霞で侵蝕しようとするが、接触部ですら接近することができていない。そのうちに、今度はスサノヲの刀身も無色へと変色し始めた。

装飾が施されただけの、なんの変哲もないように思えた笛は、スサノヲと同等、あるいはそれ以上の力を持っていることを悟った千宵は、笛からスサノヲを離し、代わりに翼と成していた闇霞を、すべて錫弥に放つ。

地が揺れるほどの爆音を轟かせると、煙が立ち込める。ザワザワと蠢く煙が巻き上がるのも一瞬、突風が咆え、視界を見晴るかす。

「ふう……」

とっさに防御に使ってしまった笛を持ち上げ、その双眸で見つめる。刀を受け止めてしまったが、傷はついていない。繊細に似つかわず、素晴らしい強度。

「もう戦いには使わぬと、言ってしまったのだが……」

気が遠くなるほど昔——さすがの神も記憶が薄れるほど昔、この笛を作った少年のことだけは、鮮明に残っている。

その少年の髪と瞳の色は——蒼。

「訊くが、その笛は、どれほどの神宝か？」

「神宝？ そうだな……」

笛を腰に差し、どこかおかしそうに笑った。

「神宝でもなんでもない。昔、私が唯一愛した者が贈ってくれた、笛だ」

ある意味、余裕を見せるように星来の方へ振り向いた。

そこに、“決して自分自身に向けてではない笑み”を認めた星来は、少し困惑した。

「本当に、あいつの髪と瞳の色に似ている」

「私、の……？」

きょとんとしていると、錫弥は肯定するように、一層笑みを露にする。それは、懐かしむような。そして、悲しげな。

錫弥、と声をかけようとした途端、千宵が静寂を破り、哄笑しだした。それを不快に思った錫弥は目を眇め、向きを元に戻した。

「……なにがおかしい？」

「簡単なことだ。五帝に次ぐ位を持つ真君様に、ただの笛一本をやるバカ者が——ッ!？」

最後まででは、言葉を口に出すことができなかった。

瞬き一つ挟むと、もうすでに目の前に怒りを露にする風奏真君がいたから。しかも、ただいだけじゃない。スサノヲの剣の平に、綱渡りをするように立っているのだ。スサノヲを持つこちらには、重さの微塵も感じない。闇霞で撃ち落せばよかったのだが、そんな思考は真君の威圧で起こさなかった。

そして、錫弥は。

「我が恋人を侮辱した罪。その身を以って報いを受けよ」

“その言葉が指し示す先”を自然と理解するときには、もう遅かった。

足場が限られていながらも、左足を軸に右足を疾風にも負けぬ速さで、大きく蹴り上げたのだ。

千宵は直撃を免れることはできないと判断しながらも、左手をスサノヲから離し、顔の横に盾として構えた。

いとも簡単に腕をへし折られたような痛みが走り、次いで体が横に吹っ飛び、地に落下すると、勢いで地に擦りつけられる。

首を折るような致命傷は、どうにか防げた。しかし、どこかしら重傷を負うことは免れることはできなかった。左肘と手首のほぼ真ん中の骨が、ぽっきり折れてしまった。なんて素早すぎる攻撃だろうか。

——だが。

「……だが、いい」

手が一本だめになりながら、千宵は不気味な笑みを浮かべていた。

「どうした？ 左腕を防御に使いながら、頭までやってしまったか？」

「お前こそ、不審に思わなかったのか？ お気楽だな」

錫弥は、圧倒的に不利な状況で笑みを見せる千宵に怪訝な顔をし、その要因がどこにあるか探った。それでも見つからない。

「わからないようだな。では訊こう。どうして放つ闇霞の量を増やしておいて、それを武器にしなかった？ それでも今、俺を取り巻く闇霞の量が元に戻っている？」

積もり積もるように、どんどん千宵の笑みの深さが増す。

錫弥はその何かを仕掛ける前に、瞬殺の一撃を加えようとしたものの、今度は錫弥の方が遅れをとることになった。いや、もうすでに遅れをとっていた。

突然、千宵から闇霞が溢れ出し、それが空高く伸びていき、槍のように空に突き刺さった。それから闇霞は太さを増すと、何本かに分かれ、何かを空から引き摺り下ろすように動き出した。

「なんだ……？」

「ふふ……見ろ。これが闇霞の力だ……！」

やがて、闇霞の先に何か白いものが見えてきた。近づいてくるうちに、大きく鮮明に見て取れるようになり――

錫弥の顔色が、蒼白となった。

「なん、だと！？ 三途総門が、なぜ！？」

「風奏真君。お前もわかるように、三途総門は三途門と違い、中つ国への門の役割に加え、繋ぐ道の役割がある。そしてその門番が前であり……」

闇霞に引き下ろされた三途総門が、千宵の頭上で止まる。

繋ぐ道の役割がある、と言っても三途総門は蛋白石と真珠の輝きを持ち、複雑な流紋や文字や、記号を組み合わせたような模様が彫られた扉の門、そのみが姿だった。

千宵が右腕のみで、三途総門に向けてスサノヲを掲げる。なにをするつもりなのか確信がつかめている錫弥の顔色が、さらに蒼白さ

を増す。

「貴様っ!! やめろ!!」

「お前自身とも繋がっているんだよなあ? ——さよならだ。風奏真君」

阻止せんと、錫弥が地を蹴り、風に乗って手を伸ばす。

スサノヲを中心に闇霞がとぐろを巻くように渦巻くと、刀身に集束しそれが固まって雷いかずちとなった。それから間もなく、轟音と共に下から三途総門を木っ端微塵に打ち砕き、天に落ちた。

「う、あ、ああ——ッ!!」

もう少し、もう少しで阻止できたのに、そのもう少しは届かなかった。

三途総門が碎かれると、錫弥も自身の半身が碎かれた苦痛に叫びをあげ、横向きに倒れた。

(なんたる不覚。あの増幅させた闇霞は、三途総門を在るべき場所から切り離す工作をするためだったのか……)

口の中に鉄の味が広がってくる。口を切った覚えはないが、体内のどこかが三途総門が破壊された時に同時に傷ついたに違いない。

我ながら情けなかった。戦闘中に工作するには、同じく闇霞を戦闘中にそちらに送らなければならない。高天原で最も闇霞と戦ったことがある自分が気付かなかったなんて。

いや、後悔や自責をしている暇なんてない。蓮がやられ、自分も三途総門破壊により、力の大半を失った。こうなってしまうては、千宵の蓮と並ぶ最大の標的となった——

「星来!」

口の端から血を流しながら、錫弥は叫んだ。逃げろ、とまでは言えなかった。足止めしてくれる人がいなくて、どうやったら逃げられるのか。この状況で下手に背中を見せたほうが危うい。

地に伏せ、低い視線から見た星来は、母親にぴったり寄り添いながらも、千宵から目が離せなくなっている状態のまま震えていた。彼女の武器であった碧瑠刀は折れているし、あの状態ではとても抵

抗しろとも言えない。

「くっ……星来あっ！」

「あ、ああ……」

星来は蘭景にぴったりくっついたまま、恐怖からの震えをとめられずにいた。

逃げることもできないし、戦うこともできない。戦ったところで、緋尊の蓮も風奏真君の錫弥も敵わなかった千宵に勝てるはずがない。残される末は――死。

じりじりと、千宵が近づいてくる。

「来ない、で……」

そう言った、つもりだったのだが、掠れて声にはなっていなかった。もはや、声を出すのみの力さえ押さえつけられていた。

もちろん、逃げる力さえも。

ここで死んだら、中つ国の自分はどうなるのだろうか。高天原でついた傷は、中つ国では表れない。と言っても、“怪我をする”ことと“死ぬ”ことは事の重大さは桁違い。ここで死んで、中つ国の自分も死ぬことも、十分考えられる。

（私は……死ぬの？）

死にたくない。けれど、この状況下でどうすればいいのか。

目の前で千宵がスサノヲの切っ先をこちらへ向け、体中に戦慄を走らせる。絶望を増幅には十分過ぎる、動作。

「蒼尊、瑞星来」

名前を呼ばれ、それだけでも星来は体が震え上がった。

その口から紡がれる一文字一文字が、確実に星来を闇へと落とししていく。

「蒼尊に大した力がなかったのも、ここで俺に会ったのも、お前の不運、俺の幸運」

「あ……あ、あ……」

――誰か。

「黄泉の国に行けば、誰もお前に刃を向けるものもない。まだ完全死んではないが、緋尊と風奏真君もじきに黄泉で会えるだろう。案ずることはない」

——助けて。

スサノヲが、切っ先をこちらに向けたまま、さっと後ろへさがる。「恨むのなら、生まれた境遇、黄帝を恨むのだな！」

深く漆黒に輝くスサノヲの切っ先が、闇霞を纏い真っ直ぐ自分をめがけて、飛ぶように向かってくる。

それから先は、目を瞑っていて見ていない。

——誰か、助けて——！！

時間^{とき}は、一瞬に感じえて、長く長く思えた。

衝撃は、なかった。

代わりに、温かいものが頬に降りかかった。

「な、に……？」

震え続ける右手で付着したものを拭い、縛るように瞑っていた瞼を恐る恐る開いた。

光が差した蒼い瞳が映したのは、手にこびりついた赤い液体。転じて、真っ白になっていく思考。これは、と訊ねようと首を動かした横には、あったはずの人影がなかった。

「蘭景、さ、ん……？」

——じゃあ、これは……

硬直した体を無理矢理動かしかけた、その矢先。確かめたい真実より先に、地に伏せたまま顔をこちらに向けた錫弥が、口から血を流しながら、見開いた目をその真実に向けて、悲鳴に近い叫びをあげる。

「蘭景様——！！」

星来も声に突き動かされるように、やっと真実を目に映すことができた。だが、それは一番見たくない結末だった。

蘭景がいつの間にか二人の間に立ちふさがり、星来から見えるその背に、漆黒の刃が生えていた。

いや、生えたのではない。

貫いていたのだ。

「蘭景さん!!」

その光景が何を意味していたのか、遅れてやっと理解した星来も、自らさえ引き裂くように叫んだ。

蘭景はその身をスサノヲに貫かせてもなお、その場に立ち続け、それどころか何も装備していない両手で、刃を握った。力強く握ったのか、新たな場所から血が滴り落ちる。それから、傷だらけの生身ではなく、魂から言い放つ。

「我が子を……青尊を……高天原の未来を」

そして、その場にいた全員が、見ていた。

「殺させるわけには、いかないのよ……!」

黒髪で当たり前だった蘭景の髪が、満月のような光を放つ、きらびやかな黄金の色に染まり、“息を吹き返す”のを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6659a/>

蒼穹の万里

2010年10月9日05時52分発行